

を謹聴してありしが、恭しく其の厚意を謝したる後、更めて我が意のある所を演べ聞えぬ。

「空兼は元學法の沙門、身の四大を觀するに急にして、思を精しうして書を學ぶの暇なく、先生に就て口訣は承はり候へども、心こゝにあらざれば、被に書して表に穿つの妙に達せず、唯だ徒らに道林の餘花を摘むに過ぎ候はず、何とて王右軍の名跡を補ふことを得候ふべき。この大命は所詮空兼の拜すべき道とも存じ候はらず」

「謙退の徳は余も深く感ずる所ながら、こは固辭すべき事とも覺えず。今大唐の文筆、決して其人に乏しからざれども、正しく右軍の流れを掬ひ者なきを、日本國の僧空兼あつて、能く其の闕けたるを補ひしと言はれ、其の譽は決して和上のみならず、正しく國の光りならずや。貴國はこの光譽を専らにし給ひ、我朝は損じたる壁を完うするの益あり。一枝の毫、半斛の墨、兩國の得る所は、實に千載の後に垂れなん。枉て大詔を奉じ給へ。余は切に和上に勸むるなり」

されど、空兼は固辭して受けざりき。方明は熱心に勸説に勞したるが、所詮屈すべ

き氣色の見えざりしかば、直ちに筆を擧いで逸勢を説き初めたり。

逸勢は師弟の問答の惱める模様は心得ながら、其の談判の事柄に通せざれば、如何とも施すに策なかりしなり。ざるを今初めて方明の筆話によつて其の意を知りしかば、快く融和の任に當らんことを引受けたり。方明は殆ど蘇息いたらんばかりに悦びて、竊かに逸勢を慕拜たり。其の一事にて既に方明の詔命を快諾したる情を察し得れば、逸勢はこの方面よりして、諄々として空兼を説き勸かしたりき。

空兼に於ては、羲之の書を補修せんことを、さまで至難の業とは思はざりしなり。されども、三衣を纏つて宮殿に出入し、法を説き行を脩するならば、進んでも命を奉すべけれども、墨油の餘技を以て紫禁に上り、徒し名を異境に留めんことは、其の志にあらざりしかば、固く執つて動かざりしが、逸勢が煩ひを師の身に及ぼさんことは、大徳の志にもあらざるべく、既に墓碣を留めて文書ともに萬目の觀略に委ねたる上は、宮殿の壁書を厭ふべき理由なし。王羲之何者ぞ。長安宮何者ぞ。成敗何かあらん。毀譽問ふ所にあらず。宜しく一揮して先生の意を安すべしと説くに至つて、笑

つて、繼かに之れを誦ひたりき。
 方明は立つて逸勢を再拜せり。
 「橘秀才にして在しませらんに、方明は忽ち天體を避くるによしなかりけんを」

「さる推尊は無益なるべし。夫れよりも壁書は別に摹本にても候ふやらん」
 「夫れもこゝに携へたり。和上の意氣に驚きて、出すべき機を失ひたり」
 初めて笑ひを含みながら、錦の帛に包みたる二葉の紙を展ぶるに、一葉には草書の詩をうつして、其の剩れる「樹」の一字を、一間の壁に大書したるもの、残れる紙に唯だ一字ありき。書は雙鈎に摹して、巧みに填墨したるものなりしかば、宛然に羲之の眞蹟に對する想ひあらしめたるなり。
 空葉は息を凝らして此の書を熟視したり。逸勢も眼光鋭く字の一點一畫を射たり。兩個の熱誠なる態度を見つ、韓方明は猶り喟然として歎するなりき。

第十五 馬の餞別

長安城中に醴泉寺となんいへる淨刹ありき。空葉の曾て草履を著けて城中を歴訪せる時、この道場の房を敲きて、梵僧般若三藏に進謁したるより、常に膝步接足して彼の甘露を仰ぎたる靈場なりき。

陽春三月、城中の楊柳翠條風に弄ばれ、桃李爛熳霞に暎ぶ頃、人は家を忘れて春光に酔ふ中を、空葉は寂然として聖教の笈を負ひ、心淨かに崇福醴泉寺を訪れ、直ちに般若三藏の壁下に參したるなり。

三藏は黒き面の目を掩ふ長き眉を動かしながら、嬉しげに空葉を視たり。
 「和僧には近きに本土に還ると聞く。信なるにや」
 空葉は恭しく長揖しながら、携へたる經卷を、三藏が前の案子に置けり。
 「七八月の頃には歸國せまほしく、本國の大使に就て請暇の表を上つりて候ふ」
 「求法に暇なき身を以て、能くも勉めて梵音を學びつる哉。授くる所の悉曇は、略

は領解したりしならん」

「文字微妙にして文意深重なる悉曇を學せんことは、所詮專修ならでは慚ぶべくも候らばす。去りながら御教へのあらまはしは、少しく記憶に留まりて候ふ」

空葉はこの年頃學び得たる、梵字梵音の師恩を謝して、彼の經卷に目を注ぎぬ。

「曩の日恩借を辱けなうしつる聖教、新譯華嚴經一部四十卷、大乘理趣六波羅密經一部十卷、守護國界主陀羅尼經一部十卷、造塔延命功德經一卷、右四部六十一卷、辛うじて書寫の功を卒へ候ひしかば、こゝに携へて還納仕つりて候ふなり」

「和僧遙かに東海に歸るとならば、袂も更めて付屬すべきものあり」

言ひさして座を立ち、三口の梵夾を將ち來りて、六十一卷の經典と、もに、卓上に並べ置きたり。さて徐ろに言ひ出るやう、

「吾が生緣は剎寶國なり。少年にして道に入つて五天を歴たり。常に傳燈を誓つて此の間に來り遊ぶ。今梓に東海に乘らんと欲すれども、緣なくして志願遂げられず。我が譯する所の新華嚴、六波羅密經等、更めて汝に付屬すべし。斯の梵夾と、もに將

去つて供養せよ。伏て願はくは緣を彼の國に結んで、元々を拔濟せん。繁を恐れて一せす」

乃て經典と梵夾とを取つて、懇ろに之れを空葉に付屬し畢りたり。

般若三藏は付屬し果つると共に、案上に腕を突きて、うち解け貌に微笑せり。

「和僧、近き頃勅を奉じて宮中の壁に字を書したる事ありや」

この問ひに對ふるには、空葉も何等の謙辭を用うるの要なかりき。

「然り、大師よ。書きたりと言はんよりは、塗りたりとこそ申すべけれ、固より古人の筆蹟を補ひたるのみなれば」

「皇帝殊に敬感在らせられ、和僧を尊んで五筆和尚の名を賜はりしとや」

「仰せの如く、大師よ」

三藏は愕然として空葉の面を見つめつゝ、

「吾は悉曇の巧拙こそは鑑別すべけれども、漢字の能否には一隻眼をも有せざるが、さるにても、左右の手足と口とに五枝の筆を持ち、五行同じく書き下しつる手際はい

かなりけん、文珠菩薩の化身にあらずば、正しく悪魔の業なるべしと思はれぬ。低き處は兎も角も、高き處はいかにして揮灑せられしぞ、後學のため語り給へ」と、自から麻を乗り出したなり。

空兼は却つて怪訝の面色にて、倒まに問ひ詰りぬ。

「空兼がさる怪行をしたりと仰するにや」

「吾の言ふにあらず、長安城裡は此の噂に満ちたるを知し召さずや」

「さては空兼を幻術の妖僧と申すにや、聞き棄て難き噂にこそ」

「姑らくは苦笑ひしてありけるが、間もなく嚴然として威儀を正せり。

「空兼は御覽せらるゝ如く、父母より受けたる一塊肉の身に候ふに、左右の手足と口とに筆を持たせ、之れを同時に動かすさへ至難なるを、況て一間の壁に向つて、五行別々の字を同時に書き下さんことをや。一考するまでもなく、そは出来得べき事なりや否やは、明白なるべき次第ならずや」

「人間の力にて出来得ざる事を成したればこそ、朝野舉りて驚歎せるなれ。人は言

ひぬ、是れ正しく大権の垂跡、入木の神なり。斯る不可思議を現する事は、人間の能くすべき所にあらずと」

「孔子は怪力亂心を語らずと申して候ふ。空兼よしや右の如き神變不思議の幻術を有するにもせよ、大唐の天子が勅を被りて、勅使隨檢の間、禁闕の壁書を勤むるに、何とてかかる暴慢無禮の所業に及び候ふべき。且又書は是れ筆道の神能として、常に尊崇する王右軍の遺蹟にては候はずや。空兼は之れに對して滿腹の敬意を傾け、一點一畫全身の力を注ぎ、口に眞言を唱へ、心に陀羅尼を持し、熱血を以て補書したるに由り、勅使の奏聞を聞食すと同時に、直ちに隨御ありて天覽を辱なうし、執筆の五法に精通したる者にあらずば、いかでか此の精妙を見ん。宜しく彼の外僧をして五筆和尙と號せしむべしとの勅詔を賜はりたるなり。忠孝彝倫は此の國の立教にあらずや。況んや日本國に在つては、日の神の神裔萬代に君臨し給ひ、天子を以て無上の至尊とす。殊に古へより君子の國と稱せられて、禮儀を立國の要となせば、三歳の童子と雖も、君に對して忠を存せざるはなく、皇家に對して禮を重んぜざるはなし。空兼は日

本國の僧なり。大國の天子の詔を奉まはりて、いかで不義の行ひを爲すべき。與國の朝廷に參して、いかで無禮の陋を爲すべき。足を以て筆を握るは、是れ筆を穢すなり。是れ書を穢すなり。是れ王右軍を辱しむるなり。是れ唐宮を呪ふなり。不肖ながら空兼に於ては、三年の恩遇を被りたる唐宮に對して、誓つてさる呪咀がましき妄舉は仕つらず。輪王も照覽あれ、空兼は誓つてさる邪慢の僧にては候はぬぞや。言々皆な血なり、而も熱したる血なり。語々皆な火なり、而も心を焼く火なり。指を觸るれば指は朽ちなん。手を支ふれば手は焚げなん。三藏も深く空兼が温順なる平生を信するより、痛く其の言の理あるに服して、自らは此の意を以て、汎く世の惑ひを解くべしと誓ひたりけり。

この般若三藏といへるは、中天竺摩伽陀國那爛陀寺の僧なりしが、南印度に至つて達磨積栗底(本師子國の王子にして、一名を達磨掬多といひ、唐にては法稱阿闍梨と稱す)に就て曼陀羅に入り、瑜伽五部の契印、三密護身金剛頂を受け、住すること一年を経て、唐に來りて佛法を弘めんことを誓ひ、禮泉寺に住つて、四部の梵經を翻譯

したるなり。

空兼が悉曇を問ひ、諸法を質したる梵僧は、般若三藏の他に、慈恩寺の寂默あり、南天の波羅門ありき。寂默は梵名を牟尼室利三藏といひ、神宇高爽、量度眞率の老僧にして、中天竺那爛陀寺一萬僧の綱録たりしが、德宗の貞元九年(延暦十二年)に那爛陀寺を發して、錫を擁して東の方震旦に來り、自ら北印度より此寺に往きて出家し、戒を受け法を學べりと云ひ、遂に長安に入つて大興善寺に住りしは、貞元十六年の事なりき。其の十九年に徙つて崇福禮泉寺に入り、梵本の翻譯事畢りて、今は慈恩寺に老を養へるなり。

牟尼室利三藏は侍童に助けられて訪ひ來れり。越州龍興寺の内供奉十禪師順曉阿闍梨も期せずして來り訪へり。南天波羅門と曇貞和尚と、亦并び會せり。曇貞和尚は空兼が悉曇相承の血脈を得たる師家にして、不空三藏の弟子なれども、他は皆な善無畏三藏に因縁を同じうする大德名師のみなりき。

順曉阿闍梨は自ら大法輪を付屬したりし鐵澄が事を語り出て、和國の名僧輩出を頌

し、且つ徐ろに空襲と語りぬ。

「聞く所に據れば、貴僧は越州の節度使に書を送つて、廣く内外諸典を求められしと申すにあらずや」

空襲は阿闍梨の聰明に駭かざるにあらずしも、固より秘すべき事ならねば、

「仰せの如く、越州の節度使は故惠果大師に參せられたる俗弟子に在すれば、書を呈して經律、論疏、傳記乃至詩賦、碑銘、卜筮、五明、所攝の教、以て蒙を啓き物を濟ふ書を、請ひ得て將來せまほしく思ふまゝ、偏へに遠涉の感みを乞ひて候ふ」と、少しく其の意を補ふて對へぬ。

「三教に忠なる感するに餘りあり。さりながら青龍和尚の付屬は貧しからざりしやにこそ承まはりしか」

「さん候ふ。故阿闍梨には悉地付屬を辱なうし、當山の大師よりも稀有の付屬を受けて候ふ。殊に兩界大曼陀羅の尊容を始め、力を竭して書寫し、財を洒して圖畫し候ふものから、人劣にして教廣く、未だ一毫を抜かざるに、衣鉢疾く踏き盡きて、人を

雇ふこと能はず、食寢を忘れて書寫に勞すれども、日車返り難うして忽ち歸期に迫りぬ。此の心の憂ひ誰に向つてか紛りを解き候はん。仰ぎ願くは、大王の助けを得て、虚しくして往き實ちて歸らんことをこそ」

「さあらんには夫の節度使、忽ち感を發して貴僧の需めに應ずべし。吾も聊か心ばかりの儉けを參らすへきか」

「謹んで高意を拜受致しなん。吾が本郷は東海の絶島、碧落波に接はつて、來往に萬死の難あり、石室の見難く、具葉の聞くこと罕なるは、一に路の險しきが爲めに候ふ。一片の咒、隻卷の文も、將ち歸らば萬人を救濟すべきに、いかで吾に惠ませ給へ」

「法は人を得て行はるゝと聞けば、かゝるものも貴僧の如き大徳に持さるれば、則ち濟民利生の實を擧げなんに。そは他の事にあらず、大乘開文の法に依て、病人を治するに鹽酒を許す事なり」

順曉阿闍梨は一條りこの法を説きて、仔細に空襲に付屬したりき。

かくて五大徳交る／＼密教東漸の嘉瑞を語りて、空葉が前途を祝福するに、林漢の國師が説として、一として空葉を益せざるはなく、其の説の稍や盡るを俟つて、辭して山門を出れば、孤雁高く北に飛んで、晚鐘の聲徐ろに暮春の別れを告げわたれり。

附言 『興越州節度使求内外經書啓』は、『元和元年四月日本國求法沙門空葉啓』とありて、三月ならざるは明白なり、こゝには此事ありし事な知らしめんがため、順曉の口を假りて記きたるのみ。看者諒せよ。

疾ひに輕重あれば、藥に強弱あり。障りに厚薄あれば、教に淺深あり。……秘藏寶論

第十六 かへる岸

滄浪根極なく究むべからず、海外の緇侶我が唐に朝宗す、即ち日本の三藏空葉上人なり。梵書を能し八體を工にし、俱舍を繕し三乘に精し。去秋にして來り、今春にして往く。反掌雲水、扶桑夢中、他方の異人、故國の羅漢、蓋凡聖以て測り識るべからず、亦智を以て知るべからず。勾踐相遇ふ口に對して程を問ふ、那ぞ此情に堪えん。離思増遠し、願くは珍重せよ、願くは珍重せよ。元和元年春沽沈之月、聊か當時少留の詩に序すと云ふ。

諷詠する朗聲は千里の風に送られて、遂に萬里の波に漂ひなん。岸遠く海濶き處、舩に寄つて高吟する者は、留學の儒生、橋の逸勢なり。船首に當つて大聖不動明王の尊像を安置し、壇を設けて風波の安穩を祈念する者は、學法の沙門、傳法阿闍梨位遍照金剛空葉なり。中央の正席に安坐して、齋らし歸るべき種々の方物を、下僚どもに處理する者は、遣唐使判官正五位上兼行太宰大監高階真人遠成なりき。

仲秋八月の天は一碧水の如く晴れわたり、蒼波漫々として海亦天の如く澄みぬ。腐に快き風に滿帆を膨ませたれば、船はさながら席の上を舐るに似て、看るく明州の岸は遠く視界の外に没し、瀾望崖際なき洋中には漕ぎ出したるなり。

「禪客祖州より来る。中華帝に謁して回る。空に騰つて猶ほ錫を振ひ。海を過ぎて素と杯を浮ぶ。佛法人に逢ふて授け。天書國に到つて開く。歸程三萬里。後會信に悠なる哉」

逸勢は猶ほ詩を朗吟するなり。此の詩は進士朱少瑞の空兼上人朝謁の後日本國に歸るを送ると題したるものなりき。

「歸程三萬里。後會信に悠なる哉、嗚呼悠なる哉、悠なる哉」

再三再四悠なる哉を繰り返して、顧みて大厓の山を望むるに、白雲漠々として波に浮んで、既に山河を見るによしなし。慨然として來し方を懐ひ居たるが、再び一詩を執つて聲朗らかに吟誦したり。

「禪居一海隔つ。郷路祖州の東。國に到りて周禮を宣し。天に朝して僧風を待たり

山冥うして魚梵遠く。日正うして風樓空し。人至つて徐福に非ずんば、何に由て信を寄せて通せん」

こは沙門鴻漸の、日本國使空兼上人橘秀才朝謁の後却還するを奉送す、と題したる五律なりき。逸勢は吟じ來つて今は情に堪えざるもの、如く、詩の卷をそこくに巻き收めて、急ぎ船樓に登り去れり。

空兼と逸勢とは、遣唐大使遠成と俱に歸國の勅許を受けしがば、大唐を辭し去らんとしたるに、忽ち入謁の寵命に接したり。乃ち唐の禁闕に參して、進んで憲宗皇帝の謁見に入りしに、皇帝には空兼に對して親しく恩勅を賜ふて宣はく、今賜ふ所の菩提實の數珠、仁は此れを以て朕が代りとなし、永く忘るゝ勿れ。朕初めは謂ひき、公を留めて將に師とせんぞ。而して今遙かに東に還らんと欲するは、惟ふに道理なり。後紀を待なんと欲するに、朕が年既に半を越えたり、願くば一期の後、必ず佛會に逢はんかしと、深く別離を悲ませ給ひて、念珠の外に種々の恩賚ありき。

かゝりしかば空兼は一期の面目を施して朝を退き、猶ほ韓方明を始め翰墨に遊ぶ詞

客の祖道を受け、其の行を壯んにして、纒を明州の濱に解きたるなり。其の交遊の道俗に涉りて夥多しかりしと、其の行李の五車に餘りしとにて、當に盧往賓蹄の素懷を遂げ得たるを知るべきなりき。

唐にては憲宗の元和元年なりしも、我が朝に在りては、柏原聖朝の延暦廿五年は既に盡て、今は安殿天皇の大開元年と改まりしなり。されども、船中の人はさる事を知るべきやうなく、此の海路無事に歸ることを得て、疾く關下に伏して復命を申し、夢寐にも忘れぬ龍顏を拜し奉つりて、微臣が懷を安らげんとのみ祈りけり。却て空葉に在つては、二十年の歲月を三年に縮め得て、却つて得る所は夫れにも倍したるものあれば、此の航海の安全を祈る心は、人に勝れて切なりしなり。

幸ひにして好晴はうち續けり。夜陰は風清く月白く、船天心に達し、月海上に浮ぶの奇勝を縱まにしつゝ、船乗りて平穩の航路を樂しみ合へりき。遠成は杯を人々に巡らして、陶然として樂しめるなり。

「桶木夫 一昨年の船路には不慮の難風に遭れしと聞く。いかに其の光景の凄然かりけるよ」

逸勢は滿を引いて高く笑ひつ。

「凄然などは心ありて思ふ事なり。大使を始め斯くいふ某すらも、生たる心なかりしかば、搖上げ搖下す間、兎はれたる死の來ることの遲きを恐るゝばかりなりき」

「さしも恐ろしき難船に、能くも人々の命を全ふしたまひけん、夫も亦不思議なり」

「そは空葉の大徳が一百八十七所の天神地祇に祈りて、恙なき事を得たるなり。判官も此の渡海の安全を願ひ給はり、兼師を頼みて祈願を凝らさせ給へ」

「實にそれよ、某も今宵より潮垢離をとりて、丹念に明王を祈り奉つらん」

さすがに微醺の快味も消えたらん面色なれば、空葉は氣の毒になりて、

「判官よ、御心平らかに在し候へ。是に安置し奉つる不動明王といつば、大阿闍梨惠果和尚の、秘密微妙の法を求め得て歸朝せん時、險浪の上に漂滞し、危舩の中に勞働し、波に隨つて昇沈し、風に任せて掣々たらば、いかばかりか惱亂せん。不動明王の像を造りて、彼の擁護を得て、此の障難を除くべしと仰せられぬ。少僧恭しく師

命を奉じて、大阿闍梨の指導を受け、時刻を移さず一刀三禮の信念を以て、自ら彫刻し奉つり、大阿闍梨の開眼加持を受けて、今この船の本尊をし崇めたるにて候ふ。かかる靈像の守護し給ふを、何もの、龍神か、得て犯し奉つるべき。少僧また船出の日より少願を起して、諸天の威光を増益し、國家を擁護し、衆生を利濟すべく、一禪院を建立して、法に依つて修行せんことを誓ひて候へば、なごか感應在しませらるらん。人々も御心安く思召さるべし」

巨細に説き聞かするに、判官は言ふに及ばず、下官郎等、船人等に至るまで、孰れも空乘を伏し拜みたり。

此の時、いつしか雲月を呑んで、天の色漸く険しく、船中卒かに溽暑くなりて、風の力漸く重く、人々のそれと心着く頃には、船人は逸く帆を下し、舵を繋ぎて難風の防禦に奔勞したりき。

所謂八月の暴風月なれば、一朝天氣の變するや、五日にして領るか、十日にして畑まざるかは、逆め知り難ければ、今空乘を拜みたる人とも、胸は恐しさに跳り初めた

り。さる中にて空乘はいかにと見るに、猶ほ尊前にも進まずして、緩やかに逸勢と語り合へりき。

やがて一天は墨を流したらんやうになりぬ。あなやと見る間に雷光一閃浪を焼き、霹靂のはためきは、却つて海の底より起れり。巖然たる颶風と、澎然たる波濤と、彼此同時に起りて、船は看る／＼九天に飄へるよと思へば、倏忽として急轉直下し、地軸に中つて碎けなにかと危まれぬ。

空乘は明王の前に端坐せり。手に契印を結んで、目を瞑り口を閉ぢたり、風浪次第に猛り狂はんとして、閃電雷震須臾も小歇なく、船は宛然木葉を弄ぶが如くなり。逸勢は我にもあらで阿ツと叫んで、忙はしく遠成が杖を引きぬ。

「見られよ。明王は威力を振ひ給へり」

言はるゝまゝに目を刮りて靈壇を拜するに、明王は御首を斜にして、天の一角を一睨し給へり。はッと思ひて再び拜すれば、持せ給ふ利劍は縦横に波濤を切り給へり。遠成は信心肝に銘じて、合掌して頭を船板に叩け着けたりしが、幾ほどもなく業壽の

風定り、無明の波洒れ、蒼海大月を浮べて鏡の如く輝き、碧天秋清を照して水の如く明かなりき。

爾來已順風船を送りて、海上極めて平らけく、滿船益安くして、既に日本の海に乗り入るを得たり。然る時に、船中にして奇しき事を言ひ罵るものありて、人またもや不安の念を抱き初めたり。

その言ふ所を聞、に、日本國の天皇崩じ給へりとぞいふなる。不祥なること言ふばかりなかりければ、何れの津に碇泊したる時、何者より聞きて何者の言ひ傳へしぞと、其の口の本を尋ね糺すに、船中の諸人互ひに首尾を論じ争ふのみにて、都て一定したる事もなく、とかくする程に恙なく、筑紫の博多の津に船を入れて、十月二十日といふに、めでたく上陸するを得たりしなり。

此時太宰府より出迎へたる官人の言へるに、先帝は年の三月十七日崩御せさせ給ひて、桓武天皇と諡し奉つり、皇太子安殿親王立て天津日嗣を承け給ひ、五月十八日に即位の大禮を挙げさせられ、是日延暦廿五年を改元して、大同元年と仰出されたるよし

し群らかに告げ知らせたり。

さては海上の人々の言ひ罵りしは、徒言にてはあらざりけりとして、孰れも喪服に改むるに、空襲は初めて長安に入るや、忽ち順宗の崩御に會ひて國喪に籠り、今また萬里の波を漑いで、棧を本朝に歸せば、勅を銜ませ給ひける我が天皇の升遷に遭ふて、悲懷哀情例ふるものなしとて、追慕の涙止め難く、身に素服を纏ふて、獨り觀世音寺に留住する事とはなせりき。

空襲既に歸朝しぬ。遣唐使とにも入京して、學法の復命をせんとするに、勅を受けたる天皇は登遐在しましたり。今は新請來經の目錄を製して、遣唐使に託して上表以聞し、心ゆく迄先朝の奉爲に冥福を祈り奉りて、寛かに佛像、曼陀羅、經律、論疏、法具の類を整理し、勅准を得て入京するには及かじと考へしかば、乃ち筆を抜いて二通の上表と、請來新譯經等の目錄一卷とを製し、大同元年十月廿二日付を以て、高階真人遠成に附して奉進したりしなり。

其の表は、命を留學の末に銜んで長安に到り、師依を歴訪して惠果阿闍梨に遇ひ、

師主をして三び受明灌頂に入り、阿闍梨位を受け、兩部の大法、諸尊の像を學習し、一百餘部の金剛乘教、兩部大曼荼羅海會を請來見習す。波濤漢に沃ぎ風雨船を漂はしたるも、鯨海を越えて聖境に平達せるは、陛下至徳の力なり。陛下新に旋機に御するを以て新譯の經、海會の像、遠く海を過りて來る、聖に非ずんば誰か測らん。空無闕期の罪は死に當るも、難得の法を生て請來せるといふ上表也。藤原葛野麻呂に隨つて第一船上り、福州に着岸したるより説き起して、惠果阿闍梨付法の次第を詳叙し、般若三藏梵夾附屬の順序に至り、無畏三藏が王位を捨たるも、代宗皇帝の北極を屈したるも、龍智和尚の八百にして老ざるも、崇惠禪師の邪を推し傾くを支ふるも、法の不思議豈斯藏に過んやと結びて、六韻の銘を加へたる復命書との二なりき。

かくして空襲は、遠成の路路を博多の津に送ると同時に、三年巳還手を携へて異境に遊び、同じ麻下に起臥して、儒佛趣きは殊なれども、意氣相投じて同胞の如く交りし、秀才逸勢ども、勢ひ袂を分たざるを得ざるに至りしなり。

情逼れども順風は船を追へり。小春の空は遠くを照らせども、海の中道は互ひの心

の關となりて、青松の斷續する處、時に白帆の點綴するをば、彼れかさばかり眺むるの外なく、夫すら須臾にして影を變ひ、鞏々たる孤影を夕づく日に落して、いと寂しげに觀世音寺にぞ錫を回らしける。

貴き人も賤き人も、惣て死去りぬ。死去り死去つて、灰塵となりぬ。歌堂舞閣は野狐の里なる。夢の如く泡の如し。電影の雲。君知るや否や。君知るや否や。人此の如し。汝何ぞ長からん。

性 靈 集

第十七 菴生が門

府牒觀世音寺三綱

入唐廻來學問僧空兼

右件僧負三笈遠渡一耽三嗜大道一空往滿歸優學可稱今及二歸朝一
暫住二彼寺。宜至于入京之日准借住例宛二供養牒一件狀
如前故牒

大同二年四月廿九日

正六位上行大典大村眞繼麻呂

大貳從四位下藤原朝臣藤嗣

筑紫觀世音寺は、齊明天皇の奉爲に天智天皇の御誓願に基きて勅創する所の、鎮西
第一の佛刹なり。孝謙天皇の天平寶字五年、新たに戒壇を築きて、西國僧侶の授戒の
聖地となし、即ち平城東大寺、下野藥師寺とも、日本三戒壇と勅定せられてよ
り、伽藍の美、龍象の盛、比ひなしとぞ傳へらる。一山四十九院、朝暮の梵唄兜卒に

達して、殊勝なること言ふばかりなりければ、空兼は請來の寶荷をこの一院に納めて
心靜かに整へ理めんとはしたるなり。

請來したる所の密教諸經は、夫の三十帖の冊子に合編したるものを除いて、新譯經
一百四十二部、梵字真言讀四十二部、論疏三十二部、三種總計二百十六部、四百六十
一卷の浩翰にわたり、外に大悲胎藏大曼荼羅、大悲胎藏法曼荼羅、大悲胎藏三昧耶略
曼荼羅、金剛界九會曼荼羅、金剛界八十尊大曼荼羅、金剛智阿闍梨眞影、善無畏三藏
の影、大廣智阿闍梨の影、青龍惠果阿闍梨の影、一行禪師の影等都合十鋪、五針金剛
杵、五針鈴、三昧耶杵、獨鈷金剛、羯磨金剛、五寶輪、金剛檄、金剛盤子、金花銀闕
伽藍都合九箇十八口、並に阿闍梨附屬の佛舍利八十粒（内金色舍利一粒）、刻白檀佛
菩薩金剛等の像一籠、白絲大曼荼羅尊四百四十七尊、白絲金剛界三昧耶曼荼羅尊一百
二十尊、五寶三昧耶金剛一口、金銅鉢子一具二口、牙床子一口、白螺貝一口は、金剛
智阿闍梨天竺より持ち來つて、不空三藏に轉付し、不空また惠果に附屬せる傳法の印
信なり。尙ほ惠果阿闍梨附屬の健陀殺子の袈裟一領、碧瑠璃の供養鏡二口、琥珀の供

養鏡一口、白瑠璃の供養鏡一口、紺瑠璃の箸二具。般若三藏附屬の梵夾三口の巨額なれば、之れを關べ之れを整ふるに、意外の日子を費し、大同元年もいつしか暮れて、同じき二年の春も、二月の花を迎へたり。

時に大宰府の小貳に、田中朝臣八月麻呂といふ官人ありて、深く母上慈育の恩に感じ、告面の孝を竭さんとす所に、かりそめの疾病より空しく玉を朝の露に害ひしかば、火を呑み鳩毒を服する思ひして、偏へに心肝を摧きたりき。然るに漏鐘は矢の如く過ぎて、一周忌は忽ちに臨み來ぬ。いかで深く厚く極り固き徳に報せばやとて、心を丹精に凝らし、蒸沐して千手千眼觀世音菩薩、四攝八供養摩訶薩等十三尊の影を圖繪し奉つり、恭しく妙法蓮華經八軸、般若心經二軸を書寫したりしが、空乘の新に唐より歸りて、觀世音寺に錫を留むると聞きて、自ら來りて圖し奉れる佛像を開眼し、寫し奉れる二部の經を展讀して、先妣が小祥忌を供養し給はんことを乞ひたるなり。孝子の懇念寔に棄て難きものあれば、空乘は快く承諾して、二月十一日を以て、荒庭を掃ひ清めさせてこゝに齋席を設け、香華を供して願文をさぐげ、懇ろに尊前に供養

し、勤行法の如く修し了りしかば、八月麻呂は感涙に咽びつゝ、勝福の疑ひなき事を悦びたり。

此時にして空乘はまた少願を發起せり。歸航の海上に於て發したる難風は、決して尋常のものにあらざりしが、幸ひにして難を免れ得たるは、明王の威力と、自身の誓願とに由るとはいへ、一つには載せ來れる微妙の聖典、神祕の圖繪、幽玄の寶器を加護する法の不思議たらずとせじ。思へばこの博多の津は、日本最初の密教渡來の聖地なり。神變不可思議經王の東漸したる第一の靈跡なり。茲に伽藍一宇を建立して、密法東漸の記念を留め、經王の來際に傳はらんことを占ひなんぞ念ひ發したるなり。

然るにこゝにいと不思議なるは、鴻臚館の記録を見るに、大唐より一人の梵僧渡來して、此津に便船を待つ間、海邊に一字の家を賃して、暫らく遠海の勞れを休らへたるよしを記し留めたり。其の年月より推し考ふるに、紛るべくもなき善無畏三藏なりければ、愈々此津の密教に機縁淺からざることを信じて、其家の在りし處を索むるに方境もさまで狹しといふにあらねば、空乘は伽藍建立の念愈々牢く、彼の田中八月麻

呂に、密々この事を議りたりき。八月麻呂は深く空葉を崇信する者なれば、一も二もなく此の議を讀して、専ら伽藍建立に力を用ひたるが、遂に密教流布の奇縁やありけん、思ひの外に造營の巧も進みたる折から、符觀世音寺の三綱に到りて、空葉の滝流もいと如意になりけるなり。

順て日本最初の密教道場は成りぬ。空葉は落慶の日にあたりて、惠果阿闍梨より金剛智傳來として附屬せられたる佛舍利一粒、並に五寶獨鈷杵一口を納め、密教東漸最初の伽藍なれば、此れを東長密寺と號して、自らこゝに住み留り、請來の聖典寶具を整修する傍ら、眞言を説き拔濟を試みしに、行藏は法にあらずして、人を得ざれば藏れ、人を得れば行はるゝ道理に差はず、四衆遠近より集り來りて、頻りに醍醐味を嘗みんことを求め、觀世音寺の沙門も日毎に通ひ來たりて、偏に密機を窺はんことを請ひぬ。されども、上表して目錄を進献したるのみにて、未だ廣宣流布の勅准を得たるにもあらねば、容易く秘帳を開くべきにあらず、唯だ眞言陀羅尼を説くのみに過ぎざりき。僧侶等はいと物足らぬ心地して、何とて此の上人の遠慮し給ふやらん、既に寂

山の巖濤大法師は、和氣太夫が高雄山に灌頂の壇を設け、南都七大寺の高僧に旨を傳へて、灌頂三摩耶を授けたる今日なるに、勅允なしとて躊躇し給ふやうやある。上人が得度の師主大安寺の勤操和上の如きも、現に入灌頂の一人にて在するぞかしなど、呷語がましく論らふ輩もありけり。

かゝりし程に觀世音寺の三綱に對して、太政官の符は下りぬ。即ち入唐學法僧空葉をして、速かに請來の經具を隨身して入京せしむべしとの宣旨にてぞありし。空葉も今は猶豫すべきにあらねば、特信者たる大宰少貳田中朝臣八月麻呂を招きて、懇ろに後事を委ね、一向に東長密寺をして、長へに法燈を掲げしめんことを頼み聞え、件の行李を率領しつゝ、初めて博多の津を開帆して、上洛の行途には就きたるなり。

平安京を解してより、既に四年を経たりき。今杖を都城に立て、見れば、長安の大都を見熟れたる眼にも、都の姿は際立ちて美しくなりぬ。さる中に、東寺西寺の伽藍朱雀の南北にありて、王都の鎮護に具はれども、寺觀の壯麗は所詮長安に及ぶべくもあらず、西明、慈恩、青龍、醜泉、興善の五大寺に比ぶべき名刹のなきのみにあら

で、自餘の寺院に肩を接すべきものさへもあらぬなりけり。唯だ獨り、是等の大寺に例ふるも、過ればとて通るまじきは、比叡山國昌寺にこそありけれ。尙ほ大唐の高僧名師に配して、卓然として之れを凌駕すべきものは、唯だ獨止觀和上靈澄にこそありけれ。嗚呼斯の山にして斯の僧あり、以て我が朝の佛教を語るべきなり。嗚呼比叡山！嗚呼靈澄師！

空葉は比叡の崇高に心を引き着けられつゝ、直ちに應天門を過ぎて、大内裡には参入してけり。蒼龍白虎の二樓より、太極殿の碧瓦丹楹に對すれば、太和殿の丹墀にも譲らずして、崇嚴なる光輝に満ちぬ。空葉は進んで内裡に誘はれ、仁壽殿に於てして、今上天皇の内謁には入りたるなり。

天皇は遠く異朝に留學せる勢を感め給へり。空葉は天恩の優渥なるを拜謝して、前に進獻せる目錄の如く、請來せる經律論疏、曼荼羅、影像、道具、梵夾の一切を獻じたり。天皇は和氣太夫弘世をして、請來の法文等、普く天下に流布すべき旨宣下せられ畢んぬ。實に是れ如來滅後一千七百五十六年にして、兩部の大教創て日域に弘まれ

るなりけり。

復命は既に畢りぬ。布教は既に允されぬ。空葉は無上の光榮と無二の満足とを抱いて、欣然として退朝したりき。直ちに平城の古京に赴きて、勸操大徳を訪はんかと思へりしが、京に入りて外男を訪はざるは禮にあらずと思ひ同して、阿刀太夫大足を右京の舎に尋ねたるなり。然るに家は離れたる荒草に寒ざりて、徒らに狐兔の棲むに委かせ、園は茫々たる寒烟に蔽はれて、投足の地だに莫し。古き家の傾きたるとは異りて、家の構へ築土のかゝりなど、新らしきまゝに荒果たるは、一層物のあはれの勝るめり。

空葉は唯だ心目を駭かして、有爲轉變の速かなる人の世を、今更のやうに觀じたるなり。主なき舎を訪へばとて、其の効あるべくも思はれねば、人に就いて大足が所在を質したるも、この秋の騷動にて、何れへ行き給ひしや、其の行方までは誰も知らずといふ。愈心もとなきこと限りなければ、其の騷動のいかなる騷動なりしかを尋ねるに、皆な堅く口を噤みて、それに答ふるを憚るもの、如し。空葉はいやが上に何安か

らすなりて、誰にか聞かんと思ひ煩らひしが、偶然心に思ひ當る事のありしかば、世も餘けき外男が廢宅を後にして、小一條の方に急ぎ行けり。

訪ひつるは藤原爲野麻呂が邸にてぞありし。爲野麻呂は歸朝以來御信任殊に厚く、今は式部卿を以て、東海道觀察使を兼ねるに至れり。されども、空兼は同舟の友として、また道の師として、いと尊信する法師なりしかば、三位の高位にある身を忘れ、膝を交へて親しく語らひたるなり。

空兼が大足の所在を尋ぬるに方りて、爲野麻呂は天を仰いで深く嗟嘆しつゝ、口重たげに語り出たり。

「語らば君の非を諷くに似たり。語らねば道の師を譏るに似たり。語るもつらし、語らぬもつらし。されど、眞佛は風に照覽ましますべし。人もあるべきに、師の如き權者を譏らんこと、來世の業も恐しからん。いので物語り参らすべし」かく言ひつゝも語り出る所を聞くに、思はずも悚然として戰慄せらるゝ事のみなりけり。

伊豫親王は桓武天皇第五の宮に在しまして、御母は故の右大臣藤原是公が女、大納言雄友の妹、從三位藤原吉子なり。親王天資開雅にして、殊に管絃に堪能に在しまししかば、天皇深く愛させられ、平安奠都の後は、北野に山莊を營みて、こゝに親王を置かしめ給ひ、御獵の折々には、此の山莊に臨御なりて、供奉の臣下と置酒高會し給ふこと屢なりき。現に崩御の前つ年の秋の如きは、日昏れ燈火を呼びても、猶を還御仰出されざりしかば、親王は夜暗く道遠くして、還幸の御路たより悪かりなると諫め申されしかど、天皇は御杯を納め給はず、

今朝能朝氣鳴互布鹿能曾鹿野須嘉行嘉之夜波更氣努止毛

と御製ありけるほどに、後の山に鹿の鳴きしかば、天皇御感斜ならず、群臣をして之れに唱和せさせ給ひ、龍顔勝れて麗はしく、夜を宵かして還御在せられけり。

當今(平城)御位に即かせ給ひて後は、中務卿を以て三品宮に在しましゝに、此秋の初つかたなりき。藤原宗成といへるもの、深く思ふ處ありて、親しく親王の御殿に出入したりけるを、師の外男剛刀大足、進講の序を以て、宗成が如き小人を親暱し

たまはんば、御身を保ち給ふ上に妙ならず。當今登極日猶ほ淺く、天下の人心安からぬ折なれば、慎むが上にも慎みて、世の視聽を益かせ給ふべからずと諫め申したり。然るに宗成はいかにして此の事を聞き出しけん、潜かに親王に對つて大足を譏したりければ、親王の御心較や動きて、遂に大足を遣さけ給ひけり。大足は親王の御行末のいたく心にかゝるものから、今は是までなりとて、大納言雄友に親王の御上を頼み聞えて、飄然として平安を立ち出しまし、誰あつて其の之く所を知る者なし。

大足既に斥けられぬ。宗成は時をうつさず、親王に不軌を勸め參らせたり。雄友の大納言は大足が言に少からず不安を感て、親王邸の近状を探り試みるに、大足斥けられて、宗成非望を逞しうするよし聞えければ、大に驚きて右大臣藤原内麻呂に内告したりき。此の事また逸くも親王に告げ參らす者ありしかば、急ぎ參内し給ひて、宗成の己に謀叛を勸めける状を、逐一に直奏し給ひぬ。當今に於せられても、事なかなか容易ならざれば、左衛府に命じて宗成を捕へしめ、謀叛の次第を檢問せられしに、宗成は詭辯を設けて實を覆ひ、宗成いかで不軌を圖り申すべき、親王こそ先朝の

恩寵に狂れさせ給ひて、窺察の念を寄へ給ひ、宗成をこそ憑み聞えさせ給ひしなれと經告したりき。天皇一什を聽せ給ひ、赫として震怒させられ、宗成を左衛府に繋ぐ繋かせ、即時詔して伊豫親王の親王を削り、左近衛中將安倍足雄、左兵衛督巨勢足をして、兵百四十人を率ゐて親王の山莊を圍み、執らへて川原寺に幽し參らせ、尋で御母藤原夫人吉子の方をも同じ寺に徙し、固く一室に幽閉して、飲食をも通じ給はざりけり。安倍足雄、こは其の罪を惡んで其の人を惡ますの本文に差へり。さまでに御憤り思召さば、盍ぞ有司に付して刑罰は正し給はざる。飲食を断たせ給ふは、人君の徳に非すと苦諫し參らせしが、忽ち旨に忤らひて、果は何人も争ひ諫むる者なかりしかば、御悼しくも親王御母子には、人の情に露命を繋ぐこと、いと恃なきを思召されてや、いかにして得給ひけん、九月の上旬に毒を仰いで、相擁いて薨じ給へり。無残なりける御最期にこそ。

さて宗成は誅に服し、雄友までも坐せられて伊豫の國に配流せられ、南家（武智麻呂の裔の藤原氏）は悉く祟られて、中納言乙叡の三位は官を解かれ、縁に繋る秋篠安

人の朝臣も、造西大寺長官には左遷せられぬ。
 空葉は聞く事毎に驚きと愛ひとに、強く胸を打たれたり。さるにても、外舅太夫が諫めを遣して身退き、深く棺を晦ましたることの清く勇ましきを、切てもなぐめとはするなりき。

葛野麻呂は滂沱たる涙涕を拭ひて、重ねて聲を低くして語り續けぬ。

「この事は宗成、良繼、百川が朝(式家、即ち宇合の孫)として、先朝以來深き由緒を有しながら、却つて内麻呂(北家、即ち房前の孫)雄友の下風に立ち、世に出る時なきを憤りて、南家の出たる親王により、事を擧げんとしたるまでなれど、先帝の御愛子たる親王につらく當りしには、尙ほ別の仔細こそあれ」

そをいかにといふに、當今の尙侍に藤原薬子といふ者あり、贈左大臣種繼の女、參議仲成の妹なるが、初め中納言藤原細主に適きて、三男二女を生みぬ。其の長女當今の東宮にて在します頃、選を以て宮中に入りしに、薬子亦東宮坊の官旨となりて皇太子に近侍し、いつしが娘を排けて自ら之れに代り、深く皇太子の御寵に與りたりき。

柏原天皇この事を知し召して、薬子が淫にして義に恃るを憎ませ給ひ、斷然宮中より驅逐して、殿に皇太子を戒飭させ給ひたりしが、當今九五に登らせ給ふや、更に徴して尙侍とし給ひ、恩遇並びなしと聞えつるなり。薬子深く先帝を恨み參らせしかば、適この變あるに方りて、主上の聰明を昏まし奉つり、先帝の御愛子と、寵妃とを虐げまらせて、宿仇を報ひし事、是れ其の裏面の消息なるべし。

葛野麻呂は少しく含羞みながら、

「かくいふ麻呂は北家の裔ながら、薬子とは姻戚の關係あり、唯だ毒に中られざらんことをのみ、且暮に祈り居るなり」

かく説來つて葛野麻呂は長太息を禁じ得ざりき。空葉も勢力に満する人の妄執に就て、さすがに太息を吐きたるなり。

第十八 三寶の聲

想ひ出多き新都の時雨を連れ出で、落葉に埋まる古京の路を踏み分けつゝ、經王の笈を背負ひ、一笠一杖に身を任せて、空葉は先づ平城の冬を訪ひ、勤操大徳の住まひます御院を索めて、遂に大安寺の中院に笈を下したるなり。

先づ第一に出で迎へたるものは、懐かしき智泉なりき。彼は空葉が別れに臨んで、懇ろに下したる訓誡を體して、此年十六歳にして登壇受戒したれば、今は道行増進し四儀殊勝に、六和冥合せる沙門とはなりたり。空葉は手を把つて悦びたり。智泉も膝に伏して喜ひたり。勤操大徳は肉身の情味の、かばかり温かなるを見て、欣然として笑の溢るゝを覺えず、只願智泉が自行化他の智徳の高きことを稱えて、其の喜悅に油を漉ぎたるなり。

び、少稱は約の如く、今より師の法弟となりて、密教を學修せん爲めに來れるなり。この兄弟とにも、今日を師資の初めとすべしとて、勤操大徳を介してこゝに師弟の契りを結びたりき。然るにまた一人の新弟子を得たり、そは油上氏の愛子にて、眞紹といふ十歳の童子なり。自ら俗を厭つて道を慕ひ、智識を索めて身を託さんとする折から、大安寺の空葉上人は、近ごろ入唐して新らしき妙教を請來したりと聞き、是れぞ我が履を取るべき大師なりとて、意を定めて其の門に投じ來りしなり。空葉も一見して其の器の凡ならざるを知り、快よく弟子に加へて、暫らく勤操大徳に付して、其の侍童たらしめぬ。

十一月八日、久米寺の大塔に於て、賢慧智泉を隨へて、初めて大毗盧遮那經の疏を開講したり。是れ實に我が邦に於て此の經の第一聲なりしかば、南都諸寺の龍象いづれも法席に參じて、謹んで傾聴したりしが、中にも大安寺の泰基和尚の徒弟賢慧は、一聞にして唯識の壺奥深からず、密教の玄機神妙なることを悟りて、即坐に名刺を獻げて其の資たることを誓ひたりき。この賢慧は同じ讃岐の佐伯が一族にして、書博士

佐伯直葛野酒麻呂が儒學の教子なりしが、長ずるに及んで佛理を慕ひ、出家して大安の泰基に唯識の蘊奥を授かりぬ。今茲二十二歳とぞ聞えし。

乃ち空葉は暫らく山住して、密教流傳の法を講せんがため、實慧、賢慧、智泉を拉べて、和泉の國に赴き、剃髮得度の縁を求めて、槇尾山寺には住する事とせり。此の事朝廷に聞えしかば、翌大同三年六月十九日を以て、太政官符を賜ひ、課役を免除すべき旨を達せられぬ。空葉時に年三十五なりき。

この山住山修の間に於て、空葉は學び得たる教、行、法に就いて、順序を正しくすると同時に、いかにして之れを本土に布かば、最も多く利濟の功を擧げ得べきや、最も博く廣益を興へ得べきやに就いて、深く思ひを凝らしたるなり。印度に在りては印度に應すべき傳教の道あれども、夫れを以て直ちに震旦を度せんことは不可能なり。されば、入唐の梵僧は、皆漢文を學修し、周孔の道を究めてのちに於て、梵經を翻譯し、之れを基として漢僧に授くるを常とす。本朝と漢土とは、同じ文字の國なれば、教典翻譯の必要は見されども、立國の創めに於て既に國體を異にするのみならず、本

邦には本邦の大道ありて、祖先の神に由つて行はれ來れるなり。厩戸皇子の法輪を轉じ給ひてより、行基菩薩に至つて本地垂迹の説を唱へ、初めて印度の佛法をして、日本の佛敎たらしめんと試みしが、其後の僧は、徒らに高遠なる法の理義に拘みて、更に融和の途を知らず、法相、三論、俱舍、成實、華嚴、律の宗義を確執し、機に處し變に通ずることを爲されば、法は僧の法にして、國家の爲の法にあらず、四衆の爲めの法にあらずるものとはなりぬ。斯の如くんば、唯だ如來の本旨に差ふのみならず、教法の根本を誤るものなり、宜なる哉、教法は徒らに高妙幽玄の理義に趨りて、衆生は空しく轉迷開悟の機縁に遠かり、壯嚴愈耀々として、妄想愈無邊なることや。彼等は此の衆生盡すんば吾願も亦盡じの大悲本誓に住することなく、攝化利生の導師たる務めを思はず、我獨高しとして、巧に諸法唯心を談じ、八不中道を説き、一心三觀一念三千の妙理を語り、十支緣起法界無礙の極旨を唱ふれども、轉じて鎮護國家、天下泰平、息災安穩、疾疫息除を祈禱することを思はず、恬然として出世間の聖境に住するを誇るに似たり。畢竟是れ法敎の罪にあらずして、法敎を殺す僧の罪なり。深く

鑑み違ふ慮からずんばあるべからず。
 空兼は此の如く切りに思ひを致すと、もに、愈密教の人生に適切なるを深く感ぜり。即事而眞は眞言の極意にして、即身成佛は密教の玄底なり。以ふに佛法は彼の法師等の説くが如く、決して遙かなるものに非ず、吾人ともに心中にあつて、即ち近し。されば眞如も外に非ずして、身を棄て何くんか求むべき。迷悟我れに在れば、發心だにすれば即ち到る、明暗他に非ざれば、信修するときは忽ちに證す。一意に來世の佛果をのみ説くが故に、人生は朝の露の如く脆く、夕の電の如く儼なきものとは悲觀するに至れども、若夫れ生佛不二の理を觀すれば、自身即ち無邊の法性身にして、生を愛し、世を樂しむこそ、正しく天地の恵みを聚めて、生を國土に得たる人間の要務なる事を覺るに至るべけれ。群生をして暗暝の苦境を脱し、此の本體の光明に住せしむるぞ、即ち法師の如來より任せられたる本務ならずや。世を離れて法なく、人を離れて佛なし。嗟乎、吾が法海は無邊無際なり。思ひのまゝに掉さへんには、世を濟ひ民を利すること、決して尠少にはあらざるべしと、思ひ決むるには至りしなり。

山居は遂に三年にわたりぬ。實慧、賢慧、智泉等が學徳も、驚くばかり上達せり。空兼この遺書を傾けて、大いに法海に乗出さんには、南都の諸高僧に聲息を通すればとて、能く爲すあるに足る者ありとも思はれず。如かず北嶺の大法師靈澄と手を握つて、顯密二門相研んで前まんにはと思ひ定めたり。

靈澄和上とは同舟入唐の因縁なきにあらねども、浪速の津を發する時より、靈澄は第三船に上り、空兼は第一船にありしかば、既に相會ふ機を失ひしに、松浦の田浦を船出してよりは、風濤に隔てられて着岸の地を殊にし、靈澄は直ちに天台山に入りて長安に來らざりしかば、互ひに一室に相會したるは、田浦に在りし時の一夕に過ぎずして、竟には雲樹千里を隔つるの思ひをなしにき。この意を以て智泉に旨を銜め、彼を使僧として遙々比叡山に登らしめ、法の爲めに敬意を表して、恭しく左の名刺を投じたるなり。

奉 上 僧 空 兼

大同四年二月三日

右爲天台傳燈奉向比叡大禪師謹捧名刺敬白

是時、主上の御惱どかくに勝れさせ給はず、さしも勵精して御親躬萬機を決裁し給ひける政務にも、今は已むなく遠かり給ふには至りぬ。されば在位僅かに五年にして、遂に四月朔日を以て御位を皇太弟賀美野親王に禪り給ひにき。夫の尙侍藥子はいと口惜じきことに思ひて、強て諫め奉つりしかども、寢膳ども安からぬ御惱なれば、奈何ともするよしなかりけり。新帝はかゝる際の際の御受禪なりければ、特に先帝を尊ばせ給ひ、太上天皇の號を奉つりて厚く仕へさせ給ひ、尙ほ太上天皇第三の皇子高丘親王を立て、皇太子とし給ひ、中納言藤原葛野麻呂を權んで、皇太子傅には兼任せしめられたり。

新帝には中務卿宮大伴親王を始め、夥多の皇弟在りましかれども、先朝の御威を懐念在らせられ、御幼年の高丘親王を備貳に立て給ひしかば、口善惡なき京童は、東宮を號して踰躡太子とは諱稱し奉つりぬ。心あらん者は、不祥の言を傳ふるものかなどて、竊かに眉を擧めあへりぞぞ聞えける。

かゝる世の態を知るよしもなき山住の空兼は、聊か祈念する事ありしかば、二夏を靈山に送らんものをとて、實懸と智泉とを伴ひて横尾を出で、山を北東に越えながら、河内國石川郡平石の嘉字下山に抵り着きぬ。この嶺は葛城山の山脈の西北に流れたる一角にして、翠松天を蓋ひ青苔地を被ふ淨境なり。土の民に問へば、北の方に大和河内兩國の通路ありて、山かくの如く茂りたれば、下自から陰を成すより、俗に陰路と呼びけるを、いつの程にか向下降に詛り、轉じて嘉字下とも神下ともいひ來れるなり。此の山葛城の支脈なれば、役の優婆塞この奥にも住みたる事ありて、今も其の古にし跡を留めたりと物語りぬ。實にさもありぬべき地勢の奇異、山氣の幽玄、空兼もこゝに夏籠の草堂を結はんことを思ひ立ちたり。

草堂結構の間、空葉は獨り山を下りて、磯長なる上宮太子の聖廟に參籠し、密教廣布の祈願を凝らして、一期を彼の靈窟に過し、還りて心靜かに草堂に修練したりき。

一夕懇念の心を澄して徹背修禪したりしに、既に四更も過ぎて、曉明にも程遠からじと覺しき頃、この山の木隠れに怪しき鳥の啼く音聞えたり。聞き熟れぬ鳥なれば、耳を聳て、尙ほ能く聴き定むるに、其の聲佛、法、僧を一聲に唱ふるものに似たりき。惟ふに此の山の靈氣に感じて、かゝる靈禽を生じたるならんかしと、感興の連りに催すに委せて、座右の筆を執りながら、忽ち七言絶句一首を記し留めたり。

閑林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥。
一鳥有聲人有心、聲心雲水俱了了。

同じこの曉の事なりき。智泉は憶なくも故郷の事を想ひ浮べて、寢苦しき枕に呻吟してありしが、身は是れ佛門に歸依して、既に世間の俗縁を離れたるものを、かゝる心にて何かはせん。善く諸の情根を接して、五欲を厭離するを、出家の第一義とばするなり、斷じて雜念を交つて清淨心に住すべしと思ひつゝ、連りに噪がる、何を厭へては、眞言を誦してありける程に、氣倦み神勞れて、我にもあらで睡眠たりけり。

幾ばくならずして悪夢に驚かされて覺めたり。身は盜汗に浸されて、動悸は宛然に跳るが如く、慈親の面影眼前に散見として、心の噪がしる前にも倍せり。強て眞言を誦して目を合すれば、また覺ること前の如し。かゝる事再三に及んでは、心甚だ切にして、少しも自ら持すること能はずなりぬ。智泉は殆ど無意識に跳ね起きて、手早く法衣を一着したり。房を開けて天の氣色を仰ぎしに、雞明には尙ほ少時間のあるにや、星の光り麗はしく輝くを見たり。

何思ひけん頭陀袋を首にかけて、草鞋に足を拵へつゝ、槍笠を手に提げたるが、空葉師に謁して暇を乞ふこともせず、實慧を覺して仔細を語ることもせず、其のまゝ、爾然として嘉宇下山を降り去んぬ。

飢うれば食を乞ひ、勞るれば山野に臥して、日ならずして浪速の津に出たり。折しも波海の便船ありしかば、これに助けられて讃岐へ着すると、もに、屏風ヶ浦なる佐伯氏をも訪はすして、急ぎ瀧の宮の家に戻り着きたり。家人の訝り驚くにも關はらず、足を洗ひて直ちに奥へ駆け入りしに、果せるかな、父公は重き病ひの蔭に臥し

て、枕頭に看護り給ふ母上の面にも、愛ひの色は深く刻まれたるなり。

「父上、智泉の只今歸りて候ふぞ、御心地いかに在し給ふ」

膝行り寄つて顔さし出せば、父は其の法師姿をつくくと見て、且は欣び、且は悲み、無手とばかりに手を握つて引寄せぬ。

「噫、吾が命は旦夕に廻れるぞかし、爾の今日歸り來れるは、是れ恩愛の感せしむる所ならずや、生あるうちに爾の道相を見ることを得て、吾が願ひ已に足んぬ。吾が精靈は爾に憑つて、永に道心を守るべきにこそ」

言訖つて、一息苦しげに吐きたるが、一心に智泉の面を諦視めたる眼は、いつしか白く掩ひ被さりて、晏然として覺めぬ睡りに就きたるなりけり。

智泉は幾ど絶えなんばかりに慟哭しぬ。縁あつて偶歸省しながらも、唯だ一日の看護をもする事か、僅かに語を交し、のみにて、却つて永き訣れを促がしたるを、悔み泣くより外なかりき。

「察し参らするに、父公にも爾に一目會ひ給はんとて、此れまでは存らへ在しけん

を、不思議にも爾の歸り來たりしかば、御佛の迎ひを受け給ひけんやうに、今はとて近き給ひしにぞあらんすらん。さらば爾は善き知識の引導なり。悲むべき事かは。速かに御經を奉りて、後生の福ひを薦め参らせよ」

母上の語を盡して勵まし給ふに、始めて僅かに涙を敘めて、是れより追善供養の營みに他念なく、一日を喪に籠りて、一心に法事を薰修したりしなり。

既に其の日も満じたれば、今は師の許に歸らばやとて、母公にも辭し奉つり、佐伯氏の人々にも別れを告げて、再び河内に立ち歸りしに、師は草堂を神の護るに委ねつ、横尾山寺に歸錫ありし後なりしかば、殘炎秋暑の苦熱を冒して、山より山を横尾には歸り参りぬ。

時に太政官より符を和泉國司に下して、空集をして入京せしめらる。

太政官符

和泉國司

僧空集

右被_レ右大臣宣_レ傳_レ請_レ二件僧_レ令_レ住_レ三京都_レ者_レ國_レ宣_レ承_レ知_レ依_レ宣_レ入_レ京

符到奉行。

春宮亮從五位下兼守右少辨 小野朝臣峯守
從七位下守右少史勳七等 佐 忌 守 豊 長

大同四年己丑七月十六日

佛は忍辱の體と精進の甲を着て、持戒の馬に
乘り、定の弓と慧の箭を以て、外に魔王の軍
を推き、内に煩惱の賊を滅ぼす。……大日經開題

第十九 雅づかひ

召命天より降りぬ。今は久しく山林に住るべからず。空兼はやがて横尾山を下りて、
直ちに平安京には上り参りぬ。随ふものは實慧と智泉と眞紹とにして、實慧法師は辭
して平城京に赴き、東大寺に入つて、夫の善無畏三藏阿闍梨の古院を温ね、暫らくこ
こに秘密の經論を修むる事とはしたりき。

入京の日に於て、空兼は治部省にまで出頭したりしに、内殿に於て謁見を賜ふべし
との恩命を拜して、初めて今上天皇の龍顏に咫尺し奉つる事を得たり。天皇は柏原天
皇の皇子あまた在します中にも、御幼少より聰明の聞え隠れなく、好みて書を讀ませ
給ひ、やゝ長せさせ給ふに及びては、博く經史を御覽せさせられ、善く詩文に長じ
させ給ひ、特に草隸の書體を巧みに遊ばさるゝこと、左右能く及ぶものなしと聞ゆ。
其の神氣岳立して人君の景を著はへさせ給ふと稱して、尚ほ立坊の宣下すら在しまさ
ぬ程より、百官はこの皇子に望みをかけ奉つりたるなり。空兼は方外に遊ぶ緇徒なれ

ども、心に君國を忘るゝ者にあらねば、かゝる天資の英敏なる后に在しますまは、群らかに聞き知り居れば、今陛下に伏して戦るゝ天威を拜し奉るにも、謹んで聖明の玉容を仰ぎ奉りしなり。

天皇も夙に空葉が緇林の巨材たるに止まらず、文章に於ても、翰墨に於ても、大唐の朝野を震撼したりし俊傑なることを知し給へり。今膝行拜跪して朝見に入る風事を御覽せらるゝに、飾なき唐風の香の法衣を一着して、手に菩提子の念珠を持ちたるのみ、一點の装ひなき間に、燃るが如き信念と、玉の如き温情とを藏して、深沈なる態度、慎重なる舉措、自から節度に適ふの高風、實に法海の真龍にこそと、深くも敬感に在せられけり。

一天萬乘の至尊と、山林練行の一沙門と、人界の位は霄壤萬里の差あれども、緇林には貴賤の高下を問はずして、其の意氣は自から相投合したり。天皇は二例外の詔旨を下し賜ひて、天意のある所を仄かし給ひ、空葉は恭しく君徳を頌し奉つりて、衷心の赤誠を披瀝したり。かくして内謁見の式は畢りて、空葉は光榮を荷ふて退出し、

直ちに和氣氏の同胞が請するまゝに、洛の西なる葛野郡高雄山寺に入住したりき。

高雄山寺は、去じ延暦十八年に薨去せる和氣朝臣清麻呂が建立し、山院にして、叡澄和上の天台を立宗するや、國子祭酒和氣弘世、河内守真綱等、和上を屈請して天台の妙旨を講せしめたる靈地なり。又、近くは延暦廿四年の冬、叡澄和上勅を奉じて灌頂の壇を築き、南都の名僧道證、修圓、勅操、正能、延秀、廣圓等に、灌頂三摩耶を行ひたる、本朝最初の灌頂道場なり。叡澄和上は、空葉が眼中に唯だ一つありて二つとなき緇林の畏友なり、法海の盟朋なり。今其の舊跡に來つて新たに法幢を建つる空葉が心には、果して如何なる感をか作しけん。

この山に來りて未だ幾ばくならざるに、憶なくも橋逸勢の訪問を受けたり。同舟同學の友なれば、固より掛禮を修むるの要もなく、談は直ちに要點に入れり。

其の言ふ所に據れば、いかにして雲井の奥深く聞えけん、橋夫人(嘉智子)の智泉が年少くして修行の殊勝なるよしを知し召し、私かに御祈願の筋ありて、頼み思召すべき御氣色なりとの事なりき。空葉は少き沙門の得たる行力もなければ、いと覺束な

しと辭ひたれども、逸勢はつや／＼肯なう氣色なく、是非に智泉に命せよとぞ通りける。空兼も智泉が學識と智徳との尋常ならぬを知れば、強ては辭ふ事なく、乃て智泉を招きて逸勢に紹介せたりき。

逸勢は膝を進めて、一段と聲を低うしつ。

「知り給ふ如く夫人は吾が爲に異母の妹なり。今は三位夫人に墜りて、御寵とても淺からざれば、吾とても常に天恩には感泣するなり。さりながら、内親王を擧げまわらせしみにて、未だ一柱の皇子をも擧げ奉つらねば、あはれ親王一柱をこそ思ふなる。こは女子の情として、さもあるべき事ならずや」

空兼が首肯くを見て、逸勢は更に次を語り續けぬ。

「皇子を授かり奉つらんには、所詮神佛の冥護に俟ねばならじと、爰に大誓願を發して、相樂郡當尾の岩船といふ處に一院を建立し給ひぬ。此に智識の僧を請じて、皇子受胎の祈念を凝らさんとするに、適智泉師の法徳を聞召され、吾と大徳との俗契淺からぬを知し召せば、かくは密事の使命を負はせられしなり」

空兼は委曲を聴き果て、智泉の方を顧みるに、智泉は速りに頭を掉りて、其の任にあらじとの意を示したり。

「眞言の法を修すれば、さる奇瑞をも招くべしとはいへ、智泉は尙ほ二十一歳の若輩なり。一部の灌頂にも入らざるに、何とてかゝる大事の勤まるべきや。こは古京の大徳に命せらるべきにこそ」

空兼が語を半だも聴かず、逸勢は双手を擧げて押し止めぬ。

「言ひ給ふな。七大寺の僧徒に、誰か藤原氏の縁を引かざる者やある。橘夫人にかゝる願ありと聞かんには、逆まに調伏の法をこそ行ふらめ。吾は氏族の爲にのみ言ふにはあらず、天下國家の爲なるは、いさ起ち給へ、智泉師よ、起ち給へ」
逸勢は強て請ふて已まざるに、空兼も多少心に恃む所ありけん、遂に俱に智泉を説いて、彼の新院を慶せしむる事としたりき。

この山院は、加茂の里の南、笠置山の西なる起伏間なき丘陵の内にありて、中之川を隔て、大和國に境する處に建立せられぬ。こは井出の大臣以來、橘氏に屬する地な

るど、僻遠にして藤原氏の猜疑を避け得べきとの用心とぞ聞えし。智泉はこゝに住してより、念持佛を奉じて勤行してありしに、何處よりともなく飄忽として墜ち來れるものありき。智泉は手に取りて披き見るに、是れなん一軸の法華曼陀羅なり。怪しみて直ちに高雄に將ち往き、師空兼に示したりしが、斯の經は是れ普賢菩薩の護し給ふ所たれば、須らく靈木を用ひて菩薩の尊像を造り奉つり、そを本尊として祈り奉つらんには、必らず其の驗あるべしとぞ教へられける。

山院に歸りてのちも、其の靈材を得べき方法に思ひを繋いで、日夜祈念したりしに、一夜の夢に奇異の暗示を得たりしかば、曉を冒して三里ばかりの南方に尋ね行きたり。このあたりは一體の深林なるに、中に一株の老樹ありて、そよ吹く風にも異香を落し來れば、果して之れ有りけりと思ひて、人を雇ひて伐り採せたるが、其の木理髓はしくして、思ひ做しにか、寶威徳上王佛の六字を自然に現はしと讀まれたり。智泉は大いに驚きて、欣然として靈木を奉じ、急ぎ山院には歸り來にけり。學法に眼なき身は、固より彫像の技を修むる間を有せされど、智泉は性來畫を好み

て、大安寺に在りし頃、勤操大徳の許しを得て、平城の古京に名ある佛畫師に就き、深く丹青の要訣を究めたりしかば、今彫り奉つらんとする普賢菩薩の尊像を圖し奉つり、之に基きて刀を下さんと思ひ立ちたり。斯くして木取をなさんとする處に、此の鄰村なる佛師椿井の雙法眼といふ者、この事を傳へ聞きて來り、強て工を助けたしといふに、智泉は悦んで之れを諾したりき。

かゝりしかば、彫工思ひ外に抄取りて、今は半工を卒りける時、突如として智泉が母の來訪に接しぬ。智泉は且つ驚き且つ喜び、見れば巳に飾りを落して、淨き比丘尼とはなり給へり。何故に讀岐の故郷を後にして、遙る遠き山寺へは來給ひしぞと尋ね參らするに、妾もかく姿を變へて、智縁尼と法號を呼ばるゝ上は、同じ御佛の徒弟なり。雲水に行住する身には、故郷もなく家もなし。這たびは佐伯の兩親より、今茲九歳になれる幼弟の、父母を辭して京に上り、兄の阿闍梨に師事せまほしと望むに任せ、これを都に伴ひてよとの頼みを受け、高雄山寺に伴ひ來りしなり。阿闍梨の言はるゝには、智泉は今岩船山寺に在りて、造佛の最中なれば、行きて工を補け給へとあ

りしに、急ぎこへは訪ひ來つるなり。いで此の尼にも刀を借し給へとて、智泉を助けて彫像に従事し、左右の耳朶を彫り奉つりしが、刀痕極めて妙なりしかば、法眼も只顧に歎異したりしなり。

相儀も今は全く成りぬ。智泉は自ら高雄に抵りて、空葉に開眼を請ひたり。空葉は悦んで之れを許ひぬ。逸勢も竊かに夫人の内意を受けて、夥多の施物を携へて法筵に列なりぬ。開眼供養は斯の如く莊嚴に修せられぬ。智泉はこの尊像を山院の本尊佛として、嘉智子夫人のために皇子を授けさせ給へと、咒願に誠實を盡したりけり。

智縁尼は大法養の滞りなく了れるを見て、深く智泉の爲めに慶びたるが、是れより祈念する事ありと稱して、一室に坐禪しながら、堅く穀食を断ちて、觀心すること一七日に達びたりき。是時靜思の眼を開きて、空葉と智泉とを招き寄せ、徐ろに永訣を叙しぬ。

「幸ひに兩師の在すれば、妾の得脱を憑み參らすべし。特に空葉阿闍梨に頼み聞ゆべきは、妾熟々皇子を相るに、或ひは天折の哀しみを留めやせんと恐るゝなり。親の

子に先づは順なれば、徒らに存らへて逆さま事を見んよりはとて、かくは死を決めたるにこそ。あはれ阿闍梨よ、妾に代りて皇子を戒めてたゞ給へ。のう智泉よ、廣大無邊の佛徳を布かんとならば、身を徳かに保ち給へ」

言ひ訖つて、一わたり吾が弟と吾が子を、嬉しげに見てありしが、頓て其の眼を固く閉ぢて、空葉が誠心からなる慰めをも、智泉が斷腸の謝言をも、弗に耳に入れずして、合掌の手を緩めず、決定の臉を開らかず、坐禪の牀安らかに、彌陀の來迎を待ち奉つること一晝夜にして、怡然として化に從ひたりき。

智泉の慟哭はいと切めて哀れなりけり。彼父の葬りを行ひて未だ半載ならざるに、今また母を哭すの不幸に遭ひ、悲痛心に餘りて幾と身を傷らんばかりなり。空葉も孝子の哀悼さもありなんと憐れむものから、かくて身を傷らんには、慈母の悲愛は其の効なきに至るべきを以て、故らに智泉に警策を與へつゝ、相與に厚く其の冥福を修して、懇ろに葬儀をぞ營みける。

智泉は後に此の山院を請うて、智縁尼の冥福を薦めんために、岩船山報恩院となし、

子に先づは順なれば、徒らに存らへて逆さま事を見んよりはとて、かくは死を決めたるにこそ。あはれ阿闍梨よ、妾に代りて皇子を戒めてたゞ給へ。のう智泉よ、廣大無邊の佛徳を布かんとならば、身を徳かに保ち給へ」

言ひ訖つて、一わたり吾が弟と吾が子を、嬉しげに見てありしが、頓て其の眼を固く閉ぢて、空葉が誠心からなる慰めをも、智泉が斷腸の謝言をも、弗に耳に入れずして、合掌の手を緩めず、決定の臉を開らかず、坐禪の牀安らかに、彌陀の來迎を待ち奉つること一晝夜にして、怡然として化に從ひたりき。

智泉の慟哭はいと切めて哀れなりけり。彼父の葬りを行ひて未だ半載ならざるに、今また母を哭すの不幸に遭ひ、悲痛心に餘りて幾と身を傷らんばかりなり。空葉も孝子の哀悼さもありなんと憐れむものから、かくて身を傷らんには、慈母の悲愛は其の効なきに至るべきを以て、故らに智泉に警策を與へつゝ、相與に厚く其の冥福を修して、懇ろに葬儀をぞ營みける。

智泉は後に此の山院を請うて、智縁尼の冥福を薦めんために、岩船山報恩院となし、

空葉はまた大和國平群郡鳴川の邊に塔を樹て、永く菩提を用ひしなり。
 智泉は哀しみを轉じて更に御修法の壇に上れり。空葉は再び高雄山寺に歸り來りしに、今春名書を捧げたる叡岳の澄澄大法師よりは、上足弟子經珍を使僧として感敷を通じ來り、併せて眞言、華嚴、梵字悉曇等の經論十二部五十三卷の借覽を要められたり。空葉は法門の爲めに篤志なる大法師の誠意を喜みして、少しも惜む所なく貸し與へたりき。

尋でまた宮中より大舍人山背豐繼が奉宣の進止を奉はるに、空葉をして世説の屏風兩帖に世説の中より特に風味すべき章句を抜いて、揮毫して進獻すべき旨を宣せられたるなり。豐繼の語る所を聞くに、主上には双びなき御筆の妙を得させ給へるに由りて、書を尙ひ給ふ御心深く在し、常に太宰府に内勅して、晋唐の墨蹟を徵させ給へり。近き頃、橋太夫逸勢に仰せて文選を書しめ給ひしかば、今また阿闍梨の名蹟を徵さるゝなりといへり。

勅命は嚴かに拜辭する事を許されざりしかば、謹んで命を奉じて、其翌る朝、席を

淨め筆硯を洗ひ、龍管を染めて揮灑し、左の表とともに謹んで進獻したりき。是れ乃て空葉の書の、主上の聖意を賜はりし濫觴にぞある。

世説書屏風兩帖

右伏て今月三日大舍人山背豐繼が奉宣の進止を奉はるに、空葉をして世説の屏風兩帖を書かしむ。空葉は細林の朽枝法海の爛屍なり。但録錫を持して以て乞を行し、林藪に吟じて觀に住することを解れり。寧ろ現鬼墨池の才、眺龍返鶴の藝あらんや。豈圖らんや、燕石魚目認つて天簡に當り、天命這れ難く敢て珍繪を汗さんとは。既に人を驚かすの技術なくして、還つて目を瞶すの死地を繞へり、之れを煉き之れを煉れて心魂惘然たり。謹んで豐繼に附して敢て以て奉進す。謹んで進る。

第二十 即身成佛

大同五年三月十五日、天皇の召命を奉じて参内したりけるに、直ちに清凉殿の御座所へは召させ給ひけり。空葉は廣縁の末に拜伏して、恭しく天機を候ひ奉つりけるに、龍顏殊に麗はしく在りし、平城の太上天皇、讓位させ給ひてのちも、玉體尙ほ勝れさせ給はざるにより、先づ年号削の法師が僧綱を統ぶるを憚りて、一族の中よりかへる法師を出し、を愧ぢ、船を伯耆の山中に晦ましたる玄資僧都の事を思召させられ、柏原の朝にも鉢蓋を負ひて参内し、立ちこゝろに御惱平癒あらせられたる例もあれば、僧都を請じて清風を御覽せられんには、或ひは聖心和らきて、玉體の平生に復らせ給ふ事もやとの御慮を以て、優詔を下して延召し給ひしかども、僧都は深く京洛の風を厭へるにや、

外津國廻水草清之緯支藝岐京乃字知波樓高努佐滿奈理

と一首の歌を奉つりて、詔に應せざるのみならず、更に遁れて備中の湯川寺に潜み

たりと聞えぬ、いかにせば彼の僧都を起しめ得べきかの御下問を拜したるなり。

玄資僧都の高風は、此の一首の歌に徴しても知るに難からず。其の浮華の名利を惡み、三界の火宅を厭ひて、深く鷲峰羅刹の山住を愛し、懸羅細草を衣となし、荆葉杉皮を茵となし、曉風朝月に情塵を洗つて、一杯の澗水に命を支え、松石清流に法身を託して、一枝の時花に眞を證せんとするものなり。吾と其の志を同じうせざれども、菩提の妙果を摘まんとする心は、則ち一つなり。輪王と雖も起すべからずと思惟するまゝに、空葉はこの意を以て奏問に及びたり。

折から東大寺の道雄法師を始め、興福、大安の大徳等、天機伺ひとして治部省にまで出頭したりけるを、特に内殿に召して謁見を賜りたり。期せずして密教の阿闍梨空葉を首として、華嚴、法相、三論の龍象、殿上に集へりし事とて、主上にも此上なき機と思し給ひしかば、同じ如來の教法にして、顯密二門に分るゝさへあるに、七宗八宗の教流を派ちて、各法幢を建て、互に法鼓を鼓ち、更に相譲り相下らざる所以に就いて、各宗各派の玄底を御諮問あらせられたり。こゝに集ひし龍象のうちにも、寂

澄の一乘止觀を提げて天台の一宗を立し、今また空慧の四種曼荼羅を將來して、眞言密教を唱道するを慨し、機がなれば自家の宗議を彰らかにして、彼等の新宗門を折伏せんと思へるものありし事とて、目前その法敵ともいふべき密教護持の空慧を證して、かゝる得難き勸問を下されしに感奮し、此の好機逸すべからずと信するの餘り、法論の態度を以て、滔々吾が奉ずる宗義こそ佛法の眞趣なれと論ずるものを生ずるに至り、闢らざる論戰に火華を散らす勢ひとはなりしなり。

興福寺の大徳は盛んに法相の宗義を論じて、其の有、空、中の三時教を立て、一代の聖教を判するが故に、五部の大論、十支論の源極は、總て吾が宗に盡せり。内に三界唯心の眞理を證し、外に無縁の大悲を起し、有情を度して涅槃の彼岸に到らしむるもの、是れ如來立教の本旨にして、吾が宗の秘奥なりと説きぬ。

大安寺の大徳は、三論の教旨の中道を得たる所以を論じ、吾が宗門の教義は、こゝに空慧師のあるありて、既に盡底を盡さるれば、別に説くの要なれども、菩薩藏、聲聞藏の二藏を立て一切の教を攝め、不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、

不來の觀法を以て、無所得中道の眞理を覺るが故に、大乘の妙極此れにありて他にあらざる説き、例を引き證を擧げて、有空の眞俗二諦を論述したりき。

東大の道雄も勢ひ駈すること能はず、徐ろに華嚴の妙諦を説き出しぬ。

「甚深なる摩訶、峻高なる蘇迷、廣大なる虚空、久遠なる芥石よりも、近くして見難きは我が心なり。細にして空に遍きは我が佛なり。我が佛は思議し難し、我が心は廣くして大なり。聲縁の識も識らず。薩摩の智も知らず。奇哉の奇、絶中の絶なるは、只其れ自心の佛なる歟。自心に迷ふが故に六道の波鼓動し、心原を悟るが故に一大の水澄清なり。澄清の水影萬像を落し、一心の佛諸法を察知す。衆生此の理に迷ひ、輪轉絶すること能はず。蒼生太だ狂醉して、自心を覺ること能はず。大覺の慈父其の歸路を指し給ふ」

此れを開口として滔々數百言、眞如法界不守自性隨縁の義を明かにし、色即ち是れ空なり、衆生即ち涅槃なる所以を論じ、五教、十玄、六相、華嚴三昧の至要を説き、大乘の至極は、華嚴にあらすして何ぞと論斷したり。其の辯は巧妙にして、其の義は

幽玄なり。一向華嚴の教理の深遠高尙なるに感ずれども、眞如生滅二門の釋に至りては、日中に天日を仰ぐが如く、五彩の耀光赫々たるに眩めきて、更に眞光を見ざるの感を生じたり。

空慧に穩和忍辱を以て體とし心としたれば、かゝる際に於て密藏の秘鍵を開示せんことを、好まじからず思ひたるなり。されど、殿上の公卿より切に請ひ申さるゝのみならず、やむごとなき勅問を辭ひ奉つるべき語を知らねば、唯だ僅に其の二を説く事とせり。

「佛に三身あり、教は則ち二種なり。應化の開説を名けて顯教と申し、法佛の談話を密藏とは申して候ふ。顯教とは、他受用應化身の隨機の説にして、密藏とは、自受用法性佛の内證智の境を説き給ふなり。是れ病ひに應じて藥を授け、根機萬差なれば針灸も千殊なる如來説法の妙とこそ稱ふべけれ。若し夫れ顯密二教の差別淺深と、成佛の迅速勝劣とを知らんとならば、金剛頂發菩提心論を御覽せらるべし。云く、諸佛菩薩普因地在して是の心を發し、勝義行願三摩地を戒と爲す。乃し成佛に至るま

で、時として暫くも忘るゝことなし。惟し眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を説くと云々。是の三摩地の法とは、自性法身所説の秘密眞言三摩地門是れなり」

説いてこゝに至るや、三論法相の二大徳は、手を舉げて語を遮りつゝ、「諸經論の中に皆三劫成佛と説く。今即身成佛の義を建立する、何の憑據かある？」

「金剛頂經に、此の三昧を修する者は、現に佛菩提を證すと云へり。又、若し衆生あつて此の教に遇つて晝夜四時に精進して修すれば、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成すと説けり。又、若し能く此の勝義に依つて修すれば、現世に無上覺を成することを得とも説けり。されば、佛も六大を説いて、法界體性と爲し給ふ。六大は人體の根元にして、地、水、火、風、空、識をいふなり。此の六大法界體性所成の身は、氣障無碍にして常住して變せず、頌して六大無碍常瑜伽といふ。六大をして悉地に住せしむるには、四曼を離るべからず。四曼とは、大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、

法曼荼羅、羯磨曼荼羅の四種曼荼羅にして、印契には、大智印、三昧耶智印、法智印、羯磨智印といふなり。此の威儀を具して三密加持すれば、則ち法身真如觀に入るを得べし。三密とは、身、語、心の三密にして、即ち若し眞言行人あつて、此の義を觀察し、手に印契を作し、口に眞言を誦し、心に三摩地に住すれば、三密相應して加持するが故に、早く大悉地を得、法界體性智毗盧遮那佛の虚空法界身を成するなり。加持とは、如來の大慈と衆生の信心とを表はす義にして、佛日の影衆生の心水に現するを加といひ、行者の心水能く佛日を成ずるを持と名づく」

夫れより經を引き論を探り、横に即身を説き、縦に成佛を釋きて偈々數萬言、辯は五智の淨水の滔々として流るゝが如く、義は圓明の心鏡高く法界の頂きに懸るが如し。寂かに一切を照破する處、今は一人の破折する聲とてもなかりけり。

東大の道雄は深く其の説に耳を傾けて、佛身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ佛身なりと説ける、不同にして同、不異にして異なる妙趣を味ひて、其の教理の現世的なるを歎稱するなりき。

主上はこの即身成佛義を聞食され、叙感淺からず見えさせ給ひしが、頓てまた親しく勸問を下されたり。

「空乘が説く所、義は誠に玄極なりと雖も、朕は其の證を見んことを望む」

此の大詔を承はりて、各宗の龍象は始めて夢の覺めたる如く、空乘が果していかに勸答すべきかを、息を凝らして待ち設けぬ。

空乘は謹んで聖旨を拜受せり。

「臣弟子不肖の身を以て、至尊の御前に三摩地觀に入らんこと、天威を駭し奉つるに似たれども、大命は輕からず、三密は不可思議なり。いで、法の神祕を叙覽に供へ奉つりなん」

座を移して南面に趺坐したるが、霎時袖の内印を結び、目を瞑りて口に咒文を誦し、心に三摩地に住する程に、看るゝ威容赫如として、面上一道の靈光を放ち、五體に陸離たる光明を輝かすかと疑はれぬ。忽ちにして菩提心金剛堅固の體を獲、忽ちにして灌頂地の福業莊嚴の身を獲、忽ちにして佛の智慧身、忽ちにして佛の變

化身。遂に法界體性智陀羅尼那佛の虚空法界身を成じて、現下父母所生身を解脱し、超絶したる事を示したりき。

崇高なる相好、端嚴なる威儀、主上も靜かに御榻を離れさせ給へば、公卿は大床に拜伏し、龍象は念珠を繰りて頂禮するに、即時本座に復りたるを見れば、温乎たる一個の僧空乘なりき。入我我入の實證今は争ふべくもあらず、東大の道雄の如きは、自身の同じ國同じ郡同じ姓に生れたるを得難き譽れとして、遂に師資の禮を執りて、親しく密教を習ふには至りしなり。

是事ありしより已還、空乘は深く主上の御歸依を忝けなうしたり。然るに、空乘は高雄の山居を愛して、輕々しく山を降ることなく、專念に眞言道を修し居たり。道雄は常に東大寺より通ひ來て教へを受けるに、こゝにまた果隣大徳といへる學匠あり、何處の人、何姓の出なるを知らねども、久しく東大寺に掛錫して性相兩宗を精研し、其名四方に播く、都鄙推崇して緇林の尊獅となし、者なるが、曾て堅慧坊によりて阿闍梨の高風を聞き、今また道雄によりて非凡の法徳を知り、是れ我が師なりと稱して、

山に來りて弟子の禮を執るに至りぬ。其の夏臘は僅かに四年に過ぎざれども、齡を問へば四十を超ゆること四歳にして、空乘阿闍梨に長すること方に八歳の兄なりき。

是歲、實慧は年紀長じて二十五歳になりぬ。學修する所大いに進みて、今は玄底を極むるに至りしかば、空乘も速かに灌頂の壇に入らんことを命じ、初めて資の爲めに壇を立て、順次に兩部の灌頂に入らしめ、遂に五瓶を灑いで灌頂の職位を授けぬ。是れ空乘歸朝の後、最初に行ひたる灌頂にして、實慧はこれより壇儀、印契、經軌の秘訣を盡すことを得て、日本最初入壇の弟子、第二の阿闍梨とぞ稱えられける。

眞言は不思議なり、即身に法如を證す。……心經秘鍵

第廿一 法の威徳

秋も九月に入りぬ、曉の露漸く冷やかに、夕の風腐を胃かす頃となりて、右京左京の人心洶々として安からぬさまなりき。彼方に走せ此方に趨り、口々に言ひ罵るを聞くに、千代萬代の末かけて動きはせじと据る給ひつる平安京の礎も、今は平城の古京に徙さるべしとて、驚き嘆ぐにてぞありける。長岡京はかりその都なりしかども、平安京は、柏原天皇の末代の都とし給ひし聖地なるに、僅かに十七年にして、再び平城の古京に復されんこと、所詮泰平の兆とは思はれず、いかに成行く世の季にかと、都人は惑ひ歎きしなり。

兎角するほかに、正三位坂上田村麻呂、從四位下藤原冬嗣、同く紀田上を造宮使として、悉平城京を營するべしと聞えしかば、平安京の紛擾は一方ならず、公家に於ても、今は不問に措くことを許さざる事態となりぬ。

抑平城遷都の議は、いかにして起りしかといふに、是れなん太上天皇の寵幸し給ふ

ふ侍藤原藥子が叛反なりける。太上天皇の御備も諸所の御幸によりて御平癒あらせられ、去年より平城の古京に遷らせ給ひ、平城の宮御造營の間、故の右大臣大臣清麻呂が邸に在りし、攝津、伊賀、近江、播磨、紀伊、阿波六ヶ國の貢租を以て、造平城宮の料とし、二千五百の傭工を督して、専ら造宮を急がせられ、當今の太上天皇に奉じ給ふこと、いと厚く在りし、かば、藥子は言ふ所として聽かれざるなく、夫の造長岡宮使の折、大伴佐伯の族に喪はれたる父贈左大臣種繼に、太政大臣の贈官をさへ容れられ、己は正三位朝臣となり、兄右兵衛督仲成さへ常に寵眷を辱なうして一門の榮華譽ふるにもなかりき。

されども、藥子は侍としてのみ仕ふるを屑とせず、何とてかして太上天皇を今一度重祚させ給はせ、己皇后宮となりて、威福を恣まはしむと思ひ立ちしにしかば、兄仲成と謀りて、さまざまに太上天皇を動かし奉つり、既に御位を禪らせ給ひしにも拘はらず、平城より詔勅を發して、參議の職を復せられ、尋で平安京を停められ、平城京に復されんとて、造平城宮使をも任命せらるゝに至れり。正しく是れ重祚

の御催しを聞えける。

平安京にて驚き嘆きしは、全く是れが爲めなりき。高丘皇太子の傳たる藤原葛野麻呂は、かくと聞くより心連りに嘆かれて、こは容易ならぬ世の亂階なるべきに、苦諫して叙慮を翻へし奉つらばやと、急ぎ平城の古京に赴きけるが、此の時は既に太上天皇重祚の御心動きて、諸司百官と宿衛の兵とを隨へ給ひ、今しも川口の道より東國に御幸在せらるべく、薬子と御筆を同じうしつ、出御の折からなりしかば、葛野麻呂は朝に絶りてはらくと涙を流し、皇太子に御慈しみの在しきまさんには、かゝる無謀の御企ては思し止まらせ給へ。東國を恐み思召されて、幾千の兵をか召させ給ふべくや。かくて京を攻め落し給ふまで、平安京にては手を束ねて待ち給はんや。遂げさせ給ふべき御望みありとも、事は正しく非望なり。況てや遂げさせ給はんこと思ひも由らぬに、御躬を苦しませ給ひ、皇太子を窘め給はん事、智者を待すして明らかなるをやと、血を吐くばかりに諫め申したり。左馬頭藤原真雄も、葛野麻呂に語を添へて、固く諫め進らしかど、薬子が冷かなる一笑の下に、更に納れさせ給ふべき御氣

色もなく、強て御進發在らせられぬ。實に是れ大同五年九月十一日の事なりけり。

主上は遷都の御催し紛れなく、中納言坂上田村麻呂すら既に造平城宮使に拜したりと知し召させられ、いと深く宸襟を惱せ給ひ、田村麻呂を大納言に進めて其の心を轉せしめ、其外左右衛府、近衛府に任官して、をさく變に應じ給へり。然る處に、大外記外従五位下上毛野朝臣頼人、平城京より走せ歸りて、太上天皇出御の情報を奏ししかば、素破とて田村麻呂をして文室綿麻呂を將て美濃より之れを邀へしめられ、一面は伊勢、美濃、近江三國の府に勅して關を固めしめ、人を遣はして右兵衛督仲成を捕らへて、之れを右兵衛府に繋がしめ、薬子の官位を解きて宮中より退け、仲成を佐渡權守に貶黜せられたり。

宣に云く。尙侍正三位藤原朝臣薬子は、掛まくも畏き柏原の朝廷の御時に、春宮坊の宣旨として仕ひ給ひき。然るに其人となりの善からぬ所を知し召して、退け給ひ去り給ひてき。さるものを百方に趁遂げて太上天皇に近き奉つる。今太上天皇の國を譲り給へる大なる慈しみ深き御志を知らずして、己が威權を擅になさ

んとして、御言にあらざる事を御言と云ひつゝ、褒貶を心に任せて會て恐れ憚る所なし。此の如き悪事くまゝ、われども、太上天皇に親き仕へ奉るに依りて思ひ忍びつゝ御坐ます、然るに尙ほ飽足らずとして、二所の朝廷をも言ひ隔て、遂には大なる亂起るべし。また先の帝の萬代の宮と定め給へる平安京を棄給ひ、停め給ひてし平城の古京に遷さむと勅め奉りて天下を擾亂り、百姓を亡ぶ。また其兄仲成、己が妹の善からぬ所をば救へ正さずして、却て其勢ひを待みて、虚詐事を以て先の帝の親王夫人を凌ぎ侮りて、家を棄て路に乗りて東西辛苦せしむ。此の如き罪惡敷へ盡すべからず、理のまゝに鞠へ給ひ罪なへ給ふべくあれども、思しやる所あるに依りて輕しめ給ひ宥し給ひて、藥子は位官を解きて宮の中より退け給ひ、仲成は佐渡の國權守に退ると宣り給ふ。天皇が詔旨を衆聞しめさへと宣る。

尙ほ此の宣旨を齎らして、桓武天皇の山陵にも奉告し、やがて左近衛將監紀朝臣清成、右近衛將監住吉朝臣盛綱等を遣はし、仲成を禁所に射殺さしめ給ひたり。

太上天皇は藥子と、もに、葛野麻呂等の諷めを御けて、大和國添上郡越田村まで御進發在らせられしに、夥多の兵前途を遮り奉つると聞し給ひて、幾ど行かせ給ふ所さへも知し給はず、明る十二日に急ぎ裾を還して平城の宮に入らせ給ひ、御髪を剃ちて入道させ給ひしかば、藥子は事の成らざるを見て、毒を仰いで立どころに自殺を遂げ、さしもの亂も須臾にして治まるを得たり。

是れより前つ方の事なりき。主上には此の亂を甚く軫念あらせられ、かゝる折にこそ眞言秘密の神變不可思議を信じて、天下の大亂を靖んじ、實祚の長久を祈禱せしめなば、いかに利益あらんも知るべからずとの寂慮を以て、内々密使を遣して空兼阿闍梨を高雄山寺より召させ給ひけり。

空兼は何事とは知らざれども、密勅を畏みて、時を移さず山を出て參内したりけるに、主上殊の外御喜びあらせられ、今朕が代となりて國家に亂れの出来んこと、誠に憂慮に思し召さる。殊に夫が爲め實祚を危うする事もあらば、いかにして皇祖皇宗に謝し奉つるべき。願はくは阿闍梨が不思議の法力に依つて、事を未然に鎮め、實祚を

長久に維持せんことを、深くも頼み思し召すよし、御親躬ら仰せ付けられけるなり。事態なかく、容易ならず、捨て置く時には天下大亂の基ともなるべく思はれしかば、空兼は愁ひに辭讓謙退すべき時機にあらざる事を思ひて、言下に大命を拜受し奉つりたり。主上は阿闍梨の快諾を聞食されて、斜ならず宸襟を安んせさせ給ひ、さらば、東寺に壇を築きて、疾く寶祚長久國家鎮護の懇念を凝すべき旨、即坐に宣旨を下されたるなり。

法の奇特を現はすためには、誠に願ふてもなき好時機に際會したりしなり。此の御祈禱にして成就せんか、密教の光明は自から海内を照被して、濟世利民の宿願を立どころに遂げ得ること、宛然これを掌に指すが如けん。若し之れに反して一朝靈驗の現はれざらんか、神變加持經の威徳は、永劫に地に墜るに至るべく、空兼阿闍梨の生命は、悠久に法界より葬らるゝに至るべきこと、鏡にかけて見るが如けん。平城の太上天皇がよしなき御謀叛は、昔に平安京の浮沈のみならず、吾が教法の存廢の瀬戸とはなりにけり。

末資末弟の沙彌等は、傳へ聞くを等しくかゝる杞憂を抱きて、今にも乾坤轉覆の活地獄を現出するが如く懼れしが、この至大至切の際に臨んでも、空兼阿闍梨は只願護持する教法に信頼して、聊かも踏躰逡巡する色なく、泰然として御修法の準備を指揮する沈靜なる態度と、温乎たる相貌とは、大阿闍梨の心中既に十分の成算あるもの、如く、最も人意を強からしむるものあり、實慧、堅慧、智泉、眞紹等の上足は、心に順て來るべき榮光を望みつゝ、師に隨つて八條大路大宮の東寺には赴きたるなり。

東寺は桓武天皇の御願に依つて、去じ延暦十五年、新都鎮護の爲めに建立せられたる名利にして、王城の坤に位せり。金堂を以て御修法の道場に宛てられたれば、空兼は先づ大行事、承事、驅使等の諸役を命じ、之を指揮して壇場を裝置せしめ、自ら之れが大阿闍梨として、息災護摩師を實慧に、増益護摩師を堅慧に、咒頭を智泉に、五大尊供、十二天供、聖天供、神供、舍利守の諸役を夫々に命じて、嚴かに各種の壇を築かしめたり。

今その築略を伺ふに、外陣の北の廊には、東北の角に向けて神供の壇を設け、外陣

東南角の出入口より、第三重の内陣に進めば、四方に白晒布の帳を垂れたる第二重の内陣ありて、先づ人の心をして清浄ならしむべし。第三重の内陣は、東北の一角を明屏風に劃つて、此處に聖天供の壇を建て、東の格子には南向きに十二天の尊像を掲げ列ね、一天毎に高卓を置きて之れに供物を奉つりぬ。南の格子には白木の案を列ねて、これに一帖の盤を一例に敷き、以て供僧衆の座となし、西南の一角には、北向に護摩壇を建き、禮盤脇案式の如く繕へたるが、其の火爐の圓形なるは、即ち息災の護摩壇なり。北西の一角にも亦、東向に方形の壇を有する護摩壇建かれたり。是れ即ち増益の護摩を修すべき壇なりとす。東南の一隅なる帳を襲げて第三重の内陣に入れば、正面北の帳には不動明王を、中央に東へ降三世明王、金剛夜叉明王、西へ軍荼利明王、大威德明王の順にて、五大尊の影像を掲げ列ね、一尊毎に高卓を置きて、火舎を中央に、其左右へ關伽、塗香、華鬘、食供、燈明の順に配列し、食の前に瓶を安排して莊嚴せり。此の次に、金胎兩部の大壇は建かるゝなり。西の帳には金剛界九會大曼荼羅を掲げて、之れに對して建きたる大壇には、四楹に白布を纏ひて是れより五色

の線を引わたし、四隅に銅磨を置き、中央に中瓶、次に金輪を安置し、其前に鈴を中に獨結、五鈴、三鈴の金剛杵を排置し、四方には火舎を中心として、左右に關伽、塗香、華鬘、色佛供、白佛供、色佛供、瓶の順序にて莊嚴し、禮盤の右の脇案には、金と打棒と、箱入の柄香爐とを備へ、左の脇案には、灑水、散杖、塗香と、据箱とを備へたり。之れと相對したる東側にも、大悲胎藏曼荼羅の大壇は築かれたり。其の莊嚴は凡て金剛界と同一なりき。

御修法は即夜を初夜として行はれたり。大阿闍梨空兼供僧を率ゐて堂に入り、進んで金剛曼荼羅の壇に登るや、舍利守は恭しく如意寶珠を捧げて、之を大壇の上に安置し奉つり、供僧全く着座し了れり。時に大阿闍梨鈴を把つて一振すれば、聖天供師は徐ろに座を立つて明屏風の内に入り、懇慫に花水供を修す。次に大阿闍梨は承事の捧ぐる表白文を披きて、謹嚴に莊重に之れを捧讀するに、吐音朗々伽藍の隅々にまで反響して、神明雲際に遙降し、菩薩壇上に出現して、詳らかに開食すべくぞ思はれぬる。夫れより五悔、勸請五大願を普く供養し、三ヶの金を鳴らせば、智泉は兎頭と

して眞言を唱へ始め、供僧之れに和して同音に唱ふる聲、鬼神も爲めに感奮すべく、異香芬芳として薫じ、鈴鏝鏝々として響き、諸天も爲めに靈驗あるべく、恭敬の心肝より湧き出づる時しもあれ、實慧は静かに座を立つて、息災護摩の壇に登れば、堅慧も増益の壇に就き、五大尊供師、十二天供師、孰れも其處に立て、一齊に供養を行ふ。其の儀式の嚴肅なる、其の修法の悽愴なる、是れや密教本來の面目にして、我が邦未だ曾て有らざる所なれば、其の光景は刻一刻に内裏へ奏上せらるゝなりき。

かくて護摩の世天段に入る時、承事は之れを神供師に通じたり。神供師は報を得るとともに、座を立つて、内陣を出で、外陣に設けたる神供壇に就て法を行へり。頓て護摩の火滅し、實慧、堅慧の本座に復する時、五大尊供、十二天供の兩師も順次に復座す。此の時大阿闍梨の一字の金は聞えぬ。智泉は嚴かに、一字金輪の咒を誦して、是れにて初夜の供養了り、大阿闍梨禮盤を下るを見て、舍利守は如意寶珠を持して之れに隨從し、別所に之れを奉安するなりけり。

次の日より、日中初夜の二座つゝ、之れを修し來りて、既に結願の初夜となり

ぬ。二座の護摩全く了りて、一字金輪の咒に移りたる時なりき。空葉は火舎に煙らす塗香の煙の朦朧と立ち騰る處に、渾身の血を漲らして秘印を結び、一心に咒を誦しつつ、吾にもあらで香の煙の捲めきたゆたふ末に目を辿らするに、香烟は長く灣曲して、其處に人影の如き輪廓を繞せるを見得たるなり。奇しとばかり更に目を凝らして仰ぎ見るに、あら尊しや、八幡大菩薩の武内宿禰を具させ給ひて、香烟摸糊たる間に、畏くも神影を出現せさせ給ひしなりき。

空葉は思はずも身を振はせぬ。更に香を炷いて神影を禮拜しながら、心に深く御影を銘り着けし時、清風來つて香烟を吹き拂ひ、神はかくして上らせ給ひてけり。

御修法結願とも、空葉は壇上遙降の神影を謹寫して、之れを携へて參内したりき。此れと同時に仲成は鐵に斃されぬ。藥子は毒を仰いで自害しぬ。太上天皇は皇太子とともに御落飾在らせられぬ。さしも天下の大亂となるべかりつる御謀叛も、互ひの鋒に軋らずして、事全く熄むことを得たりしは、偏へに空葉が祈禱の感應なりとて、御威殊に深厚にわたらせ給ひたり。

傳に曰ふ、東寺鎮坐の八幡宮は、此の神影を靈木に刻み奉つりて、皇祚長久、天下

安穩の鎮護のため、これを神體として祭祀せるものなりとや。

既にして亂は平らぎぬ。天皇は勅を下して、須らく流罪に行ふべしと雖も、朕が兄
たるに依て之れを免除す、早く元の如く大和國に住ましむ可しと宣せられ、高岳親王
の皇太子を廢し、皇弟中務卿大伴親王を立て皇太子とし、大同五年を改元して弘仁
元年とし、かくて加美野天皇が御宇は、動ぎなき礎の定まりたるなり。

天皇深く空叢を徳とし給ふより、擲で、東大寺の別當に補されしが、空叢は官職
に意なきを以て、依然として高雄の禰園を閉し、請ふて國家の爲めに仁王經の大法を
修しなごしつゝ、深く法力の修養にのみ努めたりしなり。

第廿二 入木の道

東寺に於る神壇の修法は、空叢阿闍梨の法徳をして中外に顯揚せしめ、眞言秘密の
教風をして朝野に宣傳せしむるに、最大偏竟の靈驗を著したりしなり。再來已還歸
依の道俗腫を接して、密教の宗義漸く天下を靡かすに至り、皇家の恩寵將に他宗を凌
がんとするの光榮に浴せり。されど、阿闍梨は超然として四衆渴仰の外に立ち、餘妨
を排けて仁王の大法を修したるより、深く高雄の山陰に隱棲して、更に院外に出るこ
となく、東大寺の寺務を執るにさへ、儼々の日子を限りて、急行往復するに過ぎざり
き。矧んや、蕙帳錦茵に意なき身は、帝王數々優詔を下して、召して道風を覽はら
んとすれども、固く禰園を閉して、絶えて白雲を出んとせず。幾ど一身を獻げて法を
講じ、弟子を養ふの外、一の望みだもなきもの、如くなりしなり。

主上は深く憧憬の御感に勝へさせ給はず、小内記大伴をして空叢の唐より齎らし來
りし劉希夷集を書寫せんことを命じ給へり。阿闍梨もさすがに文雅の命は拒むによし

なく、乃ち命を奉じて集四巻を謹寫し、猶ほ蔡邕の會て門下の史の聖帝を以て字を作るを見て創めしより、大唐にては往々其の體を用ふる者ある飛白の書(散練とも)を試みて之れを獻じ、別に王昌齡詩格一卷、褚遂良書貞元英傑六言の詩三卷をも寫して、實慧を使者として進獻したりき。其後、徳宗皇帝眞蹟一卷、歐陽詢眞蹟一首、張道眞蹟一卷、大王(羲之)諸舍帖一首、不空并に岸和尚碑文、徐賓即寶林寺の詩一卷、釋令起が八分の書一帖、謂之行草、鳥獸の飛白各一卷を獻じて丹誠を表したりしかば、叙慮聊か慰じしなきにあらざりしかど、其の筆迹を御覽せらるゝに就けても、慕しきは阿闍梨が高風にぞあると思召されつ。遂に有司に命じて、宣を下して強て空兼をして山を出るの餘義なきに至らしめ給へり。

太政官符

僧 空 兼

治 部 省

右檢一案内、太政官去十月廿七日、下彼省符一箇、件僧住山城國高雄山寺、而其處不便。省宜承知令住同國乙訓寺者。今被右大臣宣一箇、令別當彼寺。

永預修造事者。省宜承知依宣行之。寮宜承知依件施行。

弘仁二年十一月九日

符は既に下りぬ。阿闍梨は今は坐禪の房を開らかざるを得ず。乃ち果隣と實慧とに山寺の留守を託して自らは東大寺に赴き。南院の工事を董し、寺務を處理してのち、明る弘仁三年正月を以て、件の乙訓寺には入住したりしなり。

この寺は、故の長岡の京の西、今里といふ處にありて、聖徳皇太子の開基し給ふ淨刹、推古天皇の勅願寺なり。近く崇道天皇を幽し奉つてのちは、寺域自から荒廢したれば、かくて阿闍梨を移し住ましめて、修造の事に預らしめよとは宣せられたるなり。空兼は命を拜してより、直ちに修造の箇所を檢して、其の事に當りしかば、日ならずして輪奐の美前の日に倍し、寺觀の規模面目を一新して、洛西の一大寺となりてけり。

主上のかく空兼を崇信し給ふには、東寺御祈禱の立どころに靈驗ありし外、猶ほ歴

へ難き叔威の發動に因るなり。橘夫人嘉智子は、父清友は未だ願はれざるに歿し、兄逸勢は官位ともに尙ほ高からざれども、御寵勝れて深く在りましたに、三年前の冬皇子一柱この腹に降誕あらせられしかば、三千の粉黛顔色なく、天幸は一向嘉智子夫人と、この若宮の御上に集りたり。夫人はいと畏き事に覺えて、正良親王（後に仁明天皇）の御健やかに育し立せ給ふにつけても、普賢菩薩の冥助こそ難有かりけれと、偏へに彼の菩薩を信心してありしを、主上訝かしてみても、願ふ心の切なりしは包むべき事にもあらねば、いかで吾が腹に一柱の皇子をがなと願ふ心の切なりしを、逸勢のそれと推して、竊かに談合の上、高雄の阿闍梨に欺き聞えたり。阿闍梨も實祚長久の爲なればとありて、弟子智泉をして當の尾の山院に住ましめ、靈木を以て普賢菩薩の尊像を彫り奉つり、こを本尊として懇念を凝らし、かば、菩薩感應まじまじして、遂に宿願成就せしめられ、この皇子を授け給ひしなりとぞ奏間に及びける。主上も菩薩の徳の炳然なるを知し召すと共に、智泉といふ若僧の法力の侮り難きをも叔威在らせられ、弟子にすらかゝる名僧を有する其の師空葉は、決して人の胤にはあ

らざるべしとぞ崇信在せられけるなり。

正良親王の御愛らしく御成人まします程、主上の御寵はこの皇子とこの夫人とに専らになりぬ。この皇子この夫人に御寵の高まる程、阿闍梨とその弟子との非凡なる法徳を深く崇めさせ給ひぬ。かくて數々空葉を延いて、篤く信じ思召す大御心を、阿闍梨の心に彫り着けまほしく思はし召して、幾たびとなく内使は乙訓寺に賜はりつれども、兩寺に別當たる身は、寺務を視るに閑なきが上に、二院の修造に日も亦足らざるの故を以て、固く命を辭しまつりしが、互ひに落慶の式も果し、かば、今はとて遂に召しに應じて參内するに至りしなり。

主上は御威斜ならず、清凉殿に召して謁を賜ひぬ。殿上には東宮大伴親王在せり。東宮大夫閑院參議冬嗣祇候せり。皇弟にして今人臣の列に在す左衛門督良岑朝臣安世侍せり。玉座の此方には山科大納言園人も勤仕したり。遙かの末には橘木夫逸勢、小野大内記美材も侍りて、主上も公卿もいとうち釋けて見え給ひ、玉座の下にはくさの墨蹟、拓本の類、巻に、帖に、いと衆に散亂されてあり。中には過る日寫して

奉つりたるものさへも雜れるを認めたりき。
 宣旨とはなくて、玉音は晋唐の書によりて發せられたり。東宮も斯の道には堪能に在し、良岑朝臣また能書の聞え高く、園人大納言、冬嗣參議又詩に文に書に達せざるなく、逸勢と美材とは臨池の爲に才能の蔽はれたる名家にぞある。申すも畏れども、主上は文學に於て列聖に超えさせ給ふのみならず、宸翰の超絶に至つては、殆ど本朝無二と稱せられ給ふ。されば、教行の高邁にして、修法の神變に於ては、深く空兼に歸依し給へども、墨油の妙技に至つては、をさく此の僧に譲るべしと思召さざりしなり。素より深く好ませ給ふ藝能なれば、漢、魏、六朝の碑板より、晋、唐の劇蹟に至るまで、序ある毎に彼の國より徵させ給ひて、御鑑識に於ても誰れ及ぶべき者なく、實に希代の名筆にて在します。今視させ給ふ所の書に對しても、主上の御甄別いつも正皓に中りて、唐人の間に交はつてさへ、輕々しく下らざりし逸勢すら、常に一步を後れて、主上に先を譲り奉つるの已むなきに至れり。
 主上は園人の奉つる一卷を採らせ給ひて、之れを阿闍梨に視させ給ふ。

「公は唐朝に於ても五筆和尙の名を得たる能書なれば、定めてこの書を鑑するは易かりなん。抑誰か鑑する。」
 阿闍梨は膝行り進んで、視させ給ふ卷を拜受し、恭しく細きて一見したるが、事の

奇異に驚きて、思はずも首尾に眼を走らせたり。
 其の述だしき舉動には、明らかに駭目驚心の歎美を現はしたるにぞ、祗候の公卿は

申すも更なり、皇太子にも空兼がいかに之れを鑑すらんとて、いと樂しみて待ち受け給ひつ。別て主上には、此の鑑定によりて、入木道に於る空兼が鼎の輕重を定めんと思召し給へば、そいろに御膝の前を覺えさせ給はず、

「唐にてもかばかりの名蹟は、其例多かるべしと思ほへず、晋人としては紙の質較や新らし。公はいかに鑑しやらん」

重ねて問はせ給ふ御唇には、微かながらも御笑みをさへ漏し給へり。

空兼は謹んで卷を收めて、恭しく還し奉つりしまゝ、何事をも奏上せずして、退いて故の座に就きたるなり。

主上は更に御手に播かせ給ひて、いと飽で眺めさせ給ひしが、
 「垂露の點、懸針の畫、甚だ歎美するに堪えられども、惜むらくは無名氏なるを」
 とて、深く御目に其の卷に落させ給ひき。
 餘りに刷賞せさせ給ふに、空葉は少しく根顔みて伏し居たるが、恐るゝ面を擡
 げて、

「御戯れとは存じ候へども、古今の御賞美は却つて深く愧ぢ入りて候ふ」

「否とよ、空葉。かばかりの名蹟に名の無きを恨みて、逸勢に謔ぬれども、彼も知
 らずといふ。此の上は公ならでは誰か鑑せんと思召し、此の程より參朝の折を待ちに
 しなり」

「畏れれども、陛下には誠にて其の筆者を知し給はん敬慮に在し申し候ふにや」

「さればとよ、空葉」

「然らんには何とて奉答を辭ひ申すべき。是は臣僧の長安青龍寺に在りし時、書く
 所の筆すまみにて候ふなり」

「いかに此の書は公が墨蹟とや」

「いかにして天覧には入りけん、誠に恐懼の至りに候ふかし」

主上は再び書を御覽じて、敬慮太だ憚らせ給はぬげに拜されけり。東宮を御始め御
 前に侍ふ公卿も、聲を飲み口を嚙みて控ゆれば、殿上殿下寂として人なきが如く、微
 風にそよぐ淡竹吳竹の葉すれさへも、荒海の御障子に濤たち騒ぐかと疑はるめり。

主上は重ねて阿闍梨を御覽じて、

「是書公の作る所ならば、疑ふべくもあらざるべし。去りながら、何を以て公の書
 たるを證すべきにや」

「恐れながら、軸の尾を解かせて御覽せさせ候らへ。そが縫合せの處に、自から臣
 僧の落款こそ候はゆ」

主上は御手づから軸を脱させ給ひて、紙中と裝潢との間を解き放ち給ふに裝潢の相
 の別るゝに隨つて、

貞元元年某月於長安西明寺日本學法沙門空葉書

の款字は、遺子なく顯はれ出でたるなりき。
 主上は赧然として龍顏を染めさせ給ひ、人君として、須臾にても世外の聖人を疑ひし事を耻ぢ思はれたるなり。殿上の人々は、今更ながら阿闍梨の筆蹟に精妙なるを歎稱して、少時はごよみを打ちたりけり。
 主上重ねて御下間に及びぬ。

「此の書を見れば、朕が如きは遠く及ばざる所にこそ。さるにても、今日の書風と
 いかにか斯くは絶異たるやらん、問はまほしうよ」
 空兼は少しく席を改めて奏問しぬ。

「書は其の地の宜しき所に從ふて、其の勢ひを異にすべし。唐國は四百餘州の大國にして山河の姿も亦随つて悠々たり。されば、唐に在りては此の如く書かざるべからず。本朝は四面海を環らし、島は八洲、國は六十餘州、其の書の勢ひも亦當にかれの如くなるべし。臣僧の書に對する愚見は、略しかくな候ふ」
 主上は深く聖心折れて、始めて書に於ても此の阿闍梨には及び難くやに思召しけ

ん、殊の外天顔も和らぎて見えさせ給ひ、尙ほ筆によりても書體の變すべきよしを語ねさせ給ひき。

「そは誠に叙慮の如くにて候ふ。本朝には羊毫、兔毫を以て、雀頭に結ひたる筆のみに候へば、字に肉多くして骨は自から衰まれ候はん。彼國にては專ら狸毫を用ひて、長鋒に作りたる筆あり。其の製も精しくして、大小あり、長短あり、強、柔、齊、尖、いづれも其用を殊にし、眞書、行書、草書、八分、小書、寫書、踊書、臨書の式、各別に備はりて候ふ。臣僧少しく製筆の法をも學び得て歸り候ふ程に、いつかは献納仕つるべき心得にて、陛下の御爲には、筆生坂井清川に、東宮の御爲には、筆生根本小泉に教え授けて、良工を選んで謹製中にて候へば、聖愛に入るや否やを知らず候へども、不日にして進獻仕つらばこそ存じ候へ」

「阿闍梨に於ては、筆道の如き瑣々たる末技にこそおはすべきに、書法に精通し給ふのみならず、製筆製墨の末までも究め給ふ事、唯だ驚くの外は候はず。我等も好んで惡書を弄ぶ一人にて候ふが、庶幾はくは阿闍梨の指道を得て、自ら樂しむの境ひ

に到らばやと存じて候よ」
かく言ふは良岑安世なりき。空葉は兄弟にも並ばるべき安世が筆跡を稱へて、さて逸勢を顧みたり。

「橘太夫が書れたる加茂の齋院の御願文を御覽せらるべし、行書の秘訣悉く備りて、張旭の鋭鋒、柳宗元の骨肉、實に本朝には無二の寶簡とこそ存せらるれ」
逸勢はいつもの調子にて、

「そは大徳が言ひ損じなるべし。有智子内親王が天來の御名文をこそ、本朝無二と稱ふべけれ。書は文の臣ならずや」
呵々としてうち笑ふに、主上、東宮を御始め、一同興じて笑ひ崩れたりき。

飛禽もまた思ひ發を識り、猛虎もなほ惠と仁とを知れり。……性靈集

第廿三 二星の會

満園の柑橘は枝もたわに果を結び、其の果熟して黄金の色を照らし、累々として青葉を掩ふ所、既に八分の霜氣を看るべし。初冬將に盡きなるとして、僅に四日を剩したる廿七日の夕なりき。乙訓寺の本坊の一室に、爐を隔て相對したるは、今東瀛の佛敎界に日月と光を争ふ、顯密二敎の大威力なりとす。即ち一は一乘止觀の座主、妙法蓮華經の護持者、天台圓頓の高祖、叡山の靈澄和上にして、一は三密四曼の阿闍梨大毗盧遮那經の傳燈師、眞言秘密の八祖、雄嶽の空葉大徳なり。

久瀨は既に叙し了りぬ。款情は方に絨を發きぬ。新佛敎の二大棟梁が眉宇の間には、無私の清笑の満ゆるを見るなり。

靈澄和尚は薦められたる一盃の茶に、渴きたる咽喉を濕して、香ばしき氣を吹きぬ。
「こは珍らし、茶の味を覺えてより、既に幾歲にかなりけん。當に忘れんとして、圖らずも甘露の恵みに値ひけるものかな。久しき歲月を香味ともに變せずして、善く

も貯へ給ひけるよ」

「是れとても今は残り少になりつるかし。彼地にて初めて味ひたる時、既に我が國にも傳へんものを、心を籠めて栽培の法より、煎茶に製する順序まで、大凡は習ひ得て候ひしも、歸朝の、ちは法務に逐はれて、種子を播くに遠なく、齎らしたる製茶すら、多くは不用に屬して候ひき」

「さるにても、阿闍梨は多能多藝にて在するよ。法弟は在唐僅に九ヶ月にして、天台の玄底を叩くのみならず、順曉阿闍梨に善無畏相承の密軌を享け、また脩然禪師に南宗の禪を聴きたれば、習ふ所多くして得る所却つて少きに似たり。今日に及んで悔うる所は、密教の造詣の遠からざりし事にこそ」

和尚は度す所なくして自己を告白しぬ。此の濃きこそ水の如きには、阿闍梨も只願に推服を禁せざりき。されども、最澄が各宗を包括して、之れを顯密兩部の天台に打成せんとするには、いかにしても替辭を呈するの勇氣を有せざりき。空襲とても固より唐の密教をそのまゝ、廣布せんとにはあらず、能うべき限り我が國體と同化せしめ、

古來の歴史を遷滅せず、傳來の民情を破壊せず、渾然たる新密教を建設せんことに腐心し、夫れが爲めには、一たび聖德皇太子に由つて試みられ、更に行基菩薩に由つて紹述せられたる本地垂迹、即ち神佛一體の説に基きて、神道者流と手を握り、兩部習合を絶叫するをも辭せざるの決心を有したりき。併ながら空襲は南都七大寺の大徳とも争ひたることなきが如く、最澄に對しても別に論争すべき意志を有たねば、こゝに自説を主張することはせざりしなり。

「貧道常に思ふに、貧道の和尚に於る、膠漆の交りは松柏と與に凋まず、乳水の契りは芝蘭と將に香しかるべく、共に多寶の座を分つて釋尊の法を弘めん、何事か成らざるべき。さりながら、顯教一乘は、公にあらすんば傳らず。秘密の佛藏は唯だ貧道の窟ふ所、彼此法を守つて互ひに境ひを侵さざらんには、天下の事なごか難からん。公は何ぞか思ひ給ふぞ」

和尚はこの一語に太く心を衝動かされけん、夥多たび點頭きてきて言ひぬ。
「兩家の傳方其の境ひを正さんことは、詢に貴論の如くなり。されど、今の世の人

を心より教へんは甚だ難く、度するには自から法あるべし。但だ遮那宗と天台とは、融通疏宗する所も亦同じければ、彼此志を同うして俱に究めんとは思ふなり。先にも申すが如く、法弟の學びたる密教は、龍猛相承のものにあらねば、自から變則なるべし。願ふは阿闍梨大悲の心を起して、當來の因を結ばせ給へ」

「さては貧道に就いて、再び灌頂の境に入らんとは望み給ふよな」

「然なり、阿闍梨よ。是れ最澄自らの利益にあらず、四衆請益の爲めぞかし」

「なりながら、和尚は是れ山門の座主、内供奉十禪師の國師には在さずや」

「實に法弟は阿闍梨に長すること八歳、阿闍梨に先つて供奉の員に列なりたり。されど、法弟は世に大法あるを知つて、師資に長幼あるを知らず。阿闍梨にも室山の堅慧、東大の果隣の如き、年長の弟子を教へ給ふにあらずや。敢て傾瀉を惜み給ふ勿れ」

「教法のために忠實なること、最澄和尚の如きは多く匹儔あらざるべし。空葉は殿上にこそ出入すれ、今尙は一介の凡僧にして、唯だ東大乙訓の別當たるに過ぎざるなり。」

ざるを、自ら屈して師資の禮を執り、會て自ら傳へたる五智の寶水に浴せんとは希かふなり。

「權者の胸懷は虚空の如し。己を虚うして津梁を求めんとし給ふものを、空葉何とて瀉瓶の勢を厭ふべき」

阿闍梨も遂に快よく諾なひたり。和尚は歡喜に勝へざるもの、如く、恭しく阿闍梨を二拜しぬ。

「慇懃なる教誨を賜ふのみかな、素望を納れて灌頂に入らしめ給はんこと、深く感謝する所にて候ふ。さては、何日より其の準備へ仕まつるべうもや」

「貧道も近きにこの別當を辭して、山に歸らんこそ思ひ候へ。兩部ともに今年のうちには付法を了し候ふは如何」

「そは願ふてもなき幸ひなり。さらば、阿闍梨に先ちて彼の山へ登るべく、今より東嶺に還りて、月の内に調度を備へ申すべし」

「既に一たび三昧耶に入り給へば、二部の尊像、四部の曼荼羅は知らせ給ふらん。」

さりながら我が眞言の像圖をも、一見し給ふも可からずや」「
「そは願はまほしき筋なれども、聊か遠慮せる所なりき。さらば、參拜を許さ給
はんか」

この時は日全く西の山陰に落ちて、背闇の黒き帷は、寺の内外を悉く包めりしな
り。空舞は手づから燭を乗つて眞言院の道場に進めり。最澄は身を淨めて之れが後に
随ひつゝ、二部の尊像の寶前に進めり。法界の二大明星は、燭に照らして惠果付屬
の秘密圖を拜しつゝあり。

座に復りてのち阿闍梨は言ひぬ。

「吾年明れば四十歳の半期に達しなん。命の盡るも選からざるべう覺ゆれば、一心
に佛を念ずるため、彼の山に住して東西せざらんとは思ふなり。因て吾が持する所の
眞言の法、和尚に付屬し參らすべければ、來る十一月十日を以て、先づ金剛界大法曼
荼羅に對ひ給ふべし」

最澄いかに此の命に差ふべき。成るべくんば、山門の上足圓澄、泰範、長榮及び

こゝに召具したる光定をも、俱に入壇せしめたしなごうち語りて、彼一句、此一
句、清談水の流るゝ如くにて、冬の夜ながら更くるをさへに知らざりけり。

是の日山科に維摩會ありて、最澄和尚は自ら之に臨むべく山を降り、更に平安京を
過ぎて、この長岡の乙訓寺に空舞阿闍梨を訪問し來りしなりき。

爲さる事を語らざりしは、空舞阿闍梨が人格の美點の二つなりき。最澄和尚を門
外に送りたる詰旦、則ち月の二十九日を以て、乙訓寺産する所の柑橘千顆を摘み採
り、これを十箇の櫃に修めて宮中に獻するとて、

桃李雖珍不堪寒。 豈如柑橘遇霜美。

如星如玉黄金質。 香味應堪實蜜蜜。

大奇珍妙何將來。 定是天上王母里。

應表千年一聖會。 攀摘持獻我天子。

一首の詩に表文を添へて奉つり、同時に乙訓寺の別當を辭し奉つりて、再び還つて高
雄山寺に住したるなり。

灌漑和尚は十二月十三日を以て、函丈の智泉に宛て、薯蕷、薯蕷子、海藻、砂糖を寄贈し來り、員外弟子の例と成りて、灌漑壇場に參入せんことを請ひ置き、翌る十四日を以て山に登り來り。續いて和氣播磨大椽真綱、同じく大學大允仲世、美濃種人等も、法水に浴するため來りて、高雄の山は俄かに賑はひを倍しにき。

愈十五日を以て先づ金剛界大法曼荼羅に向はしめたるに、灌漑は因菩薩を得、真綱は金剛菩薩、仲世は喜菩薩、種人は寶菩薩を得て、進んで灌漑を受け畢ぬ。大悲胎藏曼荼羅に臨む日は、十二月十四日と定められたれば、灌漑和尚はこのまゝ山に還りて、修法に就かん事とし、泰範等の法務を卒へて疾く來らんことを促したり。然るに高雄は固より一小山寺にして、叡山の崇高雄大なるに比すべくもあらず、山中甚だ食に乏しかりければ、灌漑等は付法未だ卒らざるに、早く已に命を繋ぐによしなきに至れり。是に於て灌漑は書を泰範に飛ばして、山寺に食料都て無ければ、米を乞ふて早く上り來れ、更に餘の物は寛むるの要なければ、米穀のみ速かに致されたく、他米を借りなば、五斛ばかりを至急に頼むよし懇請しやりつ。更に左衛門督藤原

冬嗣に書を致して、灌漑頂を受くるに其の具備り難ければ、伏て恩助を仰ぐとぞ請ひ求めぬ。

空栗阿闍梨は、大悲胎藏界灌漑頂の壇を開くに先ちて、此の高雄山寺に三綱を置きたり。乃ち果隣を上座に、實慧を寺主に、智泉を悅衆に任じて曰く、

今此の高雄の伽藍未だ三綱を補せず、人の維持するなし。細林醇茂し、近童駢羅す、指車に囚らすんば誰か曉暮を知らん。所以に近る衆簡に隨つて遠く渤海の遺訓に應ず。禪師果隣を抜で、以て上座と爲す。果は雲霧を大虛に除き、光明を法界に滿し、隣は徳を法雲の震宮に養ひ、位を大日の覺殿に紹ぐ、名此の徳を合み實當に合契すべし。人皆具瞻し、上下同じく讓る。苾芻實慧を擡で、摩訶帝に除任す。所謂實は虚を棄て偽を掃ふの義、慧は愚を剪り暗を破るの稱、實相の三昧に遊び金剛の妙慧を證す。斯德斯に在り、名を省し理を會し、衆心共に許し、余亦印可す。僧智泉を擇び羯磨陀那に任す。金剛の智。大悲の泉、既に自行化他の二徳を含めり、必ず須らく緇素二衆を調和して同じく眞俗の二諦に入るべし。

此の三仁を選び彼の三徳に稱ふ云々。

斯く内外の伽藍を護持し、法雷を五趣に震はんとするも道理や、灌頂の壇開かるべしと傳へ開きて、山に來る道俗引きも切らず、寂澄和尚の催促に應じて、秦範先づ、根米を負ふて來れば、圓證、長策、光定等の東嶺の龍象も先を争つて來りて、大僧衆の數三十二人に及び、沙彌衆また卅八人に上れり。この外、大唐より船を同うして歸りたる民部少輔高階真人遠成を始め近士衆の數は四十一人、童子等また四十五人に達し、かば、十四日の大悲胎藏界の灌頂を受くべき人數都合二百四十五人とを計上せられる。

獨に實慧の爲めに傳法灌頂を開きたるより以來、公けに道場を開きて、普ねく灌頂を授け、得佛結縁せしめたるは、實に此の時を以て濫觴とはするなり。

寂澄和尚は既に兩部の灌頂を受け得たり。是れよりは進んで眞言を學修し、大法の儀軌を受けされば、傳燈の壇には入り得ざるなり。乃ち胎藏灌頂の事果てのち、師禮を執つて、今より幾月をか修行に費しなば、悉地の付法を受け得べきかを尋ねた

るに、空舞阿闍梨は事もなき體にて答ふらく、

「先づ三年ならば必ず功を畢らるべし」

「いかに今より三年とや」

最澄は少しく意外の顔色にて、姑らく小首を傾けて在りしが、何をか思ひ得たらん態にて、自から微笑を帯び來りぬ。

「本來一夏を期して學教の志を立つるなり。若し數年を経べくんば、暫らく本居に還りて本宗の事を遂げつる上、後日來りて眞言道を學ぶには若じと思ふ、此の度灌頂の壇に入りたる圓證、秦範、賢榮の三法師は、孰れも修行滿位の僧にして、深く密教を仰ぐ者なれば、明年正月を以て大阿闍梨に付屬し奉つるべし。伏て乞ふ、子地の哀みを垂れて、受法の庭に侍せしめ給はんことを」

阿闍梨の莞爾として快諾を與ふるを見て、和尚は重ねて言へり。

「こは其の砌改めて三綱政所に申し出べきにこそ。尙は一面には蘭惠の友たり、一面は法の師資たれば、今日までの例に因つて、諸經論の恩借を請ふことあるべし。

「これは特に法のために秘惜し給ふ勿れ」
是れをも空乘は快よく諾ひぬ。叡澄は素志の八分までを達し得て、欣然として西山を下り去りぬ。斯くして此の歳も暮れぬ。

僧伽は梵名なり、翻して一味和合といふ。意を等うして上下評論なく長幼次第あり、乳水の別無きが如くにして、佛法を護持し、濁塵の序あるが如くにして群生を利濟す……性靈集。

第廿四 晴天の雷

弘仁四年は東大寺別當の秩満する歳なり。南院、眞言院の造立も既に成りたり。一山の儀軌も亦嚴かに整ひたり。此の際に得たる諸弟子も、便宜に應じて歸住する所を定めしめたり。空乘に在りては、今其の職を辭するとも、些の遺憾とては存らざるまでに、何事も整頓したりしなり。

彼の叡山より付屬せられたる禪師には、既に金剛界曼荼羅に入らしめ畢んぬ。叡澄和尚より頻々として來る借經の請にも、其都度毎に快よく應じ來たりぬ。其の法契に於ても遺憾なく温和に進みつゝあるなり。

空乘阿闍梨がこの半歳ばかりの事業は、かくの如く爾く圓滿に、かくの如く爾く平和なりしなり。唯だこゝに其の齡人生の半に達して、四十歳の期を迎へたれば、遺誠を垂るべき必要あるを感じ、五月晦日といふに、諸弟子等の爲めに教誡の文を作り、懇ろに出家の道を修むるは、本より佛果を期するたためにして、輪王と釋梵家を要せ

ざる所以を論し、一心の性は佛と異るなく、我心、衆生心、佛心の三差別なくして、此心に住するが、やがて是れ佛道に住し、即身成佛に至る徑路なるを説き、師資の道は父子の如く相親しむ、父子は骨肉相親なりと雖も、但是れ一生の愛、生死の縛なり。師資の愛は法義相親にして、世間出世間、拔苦與樂、何ぞ能く比況せんと教へ、我が教に違へば、即ち諸佛の教へに違ふなり。是れを一闡提と名づく、永く苦海に沈み何れの時か得脱せん、我も亦永く共に住留せず。往き去れ、住すること莫れ。往き去れ住すること莫れとぞ戒めたりける。

前の半歳は、かくして経過しつ。後の半歳に至りては、多少の曲折なきにあらざりしかども、多くは山を出ざりしを以て、昔な文書の働らきに過ぎざりき。

特に阿闍梨を窘めたるものは、山居修禪の身に、屢飢餓の難の逼り來る事なり。根米の缺乏する事なり。燈油の盡くる事なり。筆紙の給せざる事なり。阿闍梨が眞言法の學行は、宮廷に知らるゝよりも、より多く僧侶の間に知られたり。其の祈禱、其の加持は、雲上に重せらるゝよりも、より多く教海に重せられたり。されば、空策は唯

だ課役を免除せられたるのみにして、未だ十禪師にも墜らざるに、受戒の弟子は風を望んで座下を集り、今は他宗の法師をさへ養ふに至りても、給するものは寺領の産のみにして、一粒一錢の喜捨をも仰がざれば、かくは米鹽の資にだも窮するには至れるなり。

若しこの阿闍梨にして、一ひ禪關を出て四方に化を行はんか、善男善女雲の如く聚り霞の如く環つて、淨財淨穀にも乏しかるまじきに、意は唯だ練行に急にして、山住山修に他念なければ、今尚ほ多くの歸依者を有せざりしなり。唯だ寒暑の存間に幾分の志納を表する者としては、中納言藤原葛野麻呂、民部少輔高階遠成、太宰少貳田中八月麻呂その他二三の士大夫に過ぎず。偶々法衣の新らしきを得るは、智泉に賜る橘夫人の法施に由つてなりき。この山の物に乏しきこと、誠に案の外なりけり。

幸ひにして八月麻呂入京の報を得たり。阿闍梨はこの大檀那に謀りて、修禪の資を得ばやと思ひしかば、一別以來已に七年、恨戀已み難き所に、此日入京を傳ふものあり、急ぎ謁せんと欲すれども、私願あつて山房を出で難し。貧道聊か三寶に供せんと

だ課役を免除せられたるのみにして、未だ十禪師にも墜らざるに、受戒の弟子は風を望んで座下を集り、今は他宗の法師をさへ養ふに至りても、給するものは寺領の産のみにして、一粒一錢の喜捨をも仰がざれば、かくは米鹽の資にだも窮するには至れるなり。

若しこの阿闍梨にして、一ひ禪關を出て四方に化を行はんか、善男善女雲の如く聚り霞の如く環つて、淨財淨穀にも乏しかるまじきに、意は唯だ練行に急にして、山住山修に他念なければ、今尚ほ多くの歸依者を有せざりしなり。唯だ寒暑の存間に幾分の志納を表する者としては、中納言藤原葛野麻呂、民部少輔高階遠成、太宰少貳田中八月麻呂その他二三の士大夫に過ぎず。偶々法衣の新らしきを得るは、智泉に賜る橘夫人の法施に由つてなりき。この山の物に乏しきこと、誠に案の外なりけり。

幸ひにして八月麻呂入京の報を得たり。阿闍梨はこの大檀那に謀りて、修禪の資を得ばやと思ひしかば、一別以來已に七年、恨戀已み難き所に、此日入京を傳ふものあり、急ぎ謁せんと欲すれども、私願あつて山房を出で難し。貧道聊か三寶に供せんと

欲すれども、山厨洗ふが如く、毎事辨じ難ければ、伏して米油等を濟はれんことを乞ふ。又、唐より將來る經疏文書等、數年寫取りて普ねく天下に傳へんとするに、紙と筆とを得難し、是も亦惠みを垂れられんことを望むとの一書を認め、之れを彼の少貳に致さしめたり。

この書に接して、八月麻呂はいかに阿闍梨に同情したりしぞ。便ち米油等の料を齎らして山寺を訪ひ、料紙の類は後より送らんと約し、が、其後二千張の紙と、四十管の筆と、二十挺の墨とを同封して寄進來れり。空舞はいかに之れを驕ひしぞ。「開封燦然、手足無厝、悚愧佩銘、何以爲、喩矣」といふもの、寔に誇はりなき心の告白なりけり。

十月二十五日には、中納言藤原葛野麻呂の爲に願文を撰しぬ。こは入唐第一船に於て風波の難に遭ひし折節、一百八十七所の天神地祇を祈つて、神毎に金剛般若經一卷づつを書寫し奉らんと誓ひ、幸ひにして其の冥護に依り使命を果すことを得たりしかば、官の暇ある毎に謹寫し來りしもの、今や積んで其の員に満ちぬ。乃ち供養轉讀し願の、いつ遂げらるべきかをも知らず、さすがに汪洋たる前途の思はれざるにしもあらざりしなり。

この間にも頻々として絶えず來るものは、叡山より借經の使僧なりき。十一月廿三日を以て、頃日講法のために稿を下し、理趣釋經を求むるに至りて、叢澄和尚の經を寫すに念にして、法の文字の外にあることを忘れたるを慨き、一篇誓策の文を草して、彼の座主の反省を求めたるなり。

こゝに其文意を拾はんには、夫れ理趣の道、釋經の文、天も覆ふこと能はず、地も載すること能はざる所なり。塵刹の墨、河海の水も、誰か能く敢て其一句一偈の義を盡すことを得ん。如來心地の力、大士如空の心に非ざるよりんば、豈能く信解し受持せんや。余不敏なりと雖も、略は大師の訓旨を示さん、冀くは子、汝が智心を正しくし、汝が戲論を淨めて、理趣の句義、密教の逗留を聴け。理趣に三種あり、一には可

聞の理趣、二には可見の理趣、三には可念の理趣なり。若し可聞の理趣を求めば、聞
くべき者は則ち汝が聲響是なり。汝が口中の言説即ち是なり、更に他の口中に求むる
ことを須ひざれ。若し可見の理趣を究めば、見るべき者は汝の色なり。汝が四大等即
ち是なり、更に他の身邊に究むることを須ひざれ。若し可念の理趣を索めば、汝が一念
の心中に本来具有す、更に他の心中に索むることを須ひざれ。次に復た三種あり、心の
理趣、佛の理趣、衆生の理趣なり。若し心の理趣を究めば、汝が心中にあり、別人の
身中に究むることを用ひざれ。若し佛の理趣を求めば、汝が心中に能く覺る者あり、
即ち是なり。諸佛の邊に求むべし、凡愚の所に求むることを須ひざれ。若し衆生の理
趣を究めば、汝が心中に無量の衆生あり、其れに隨つて究むべし。又三種あり、文
字、觀照、實相なり。若し文字を究めば、則ち聲の上の屈曲なり、即ち是れ不對不碍
なり。紙墨の和合して文字を生ずる若き、彼處にも亦あり、又須らく筆紙博士の邊に
究むべし。若し觀照を求めば、則ち能觀の心と、能觀の境と、色もなく形もなし、誰
か取り誰か與へん。若し實相を求めば、則ち實相の理は名相なし、名相なければ虚空

と冥會せり、彼處には空のみなり、更に外に用ひざれ。夫れ秘藏の興廢は唯だ汝と我
となり。汝若し非法にして受け、我若し非法にして傳へば、則ち將來求法の人、何に
由てか求道の意を知ることを得ん。非法の傳授、是れを盜法と名づく、即ち是れ佛を
誣くなり。又秘藏の奥旨は文を得ることを貴しとせず、唯だ心を以て心に傳ふるに在
り。文は是れ糟粕、文は是れ瓦礫、糟粕瓦礫を受けば、則ち粹實至實を失ふ、眞を弃
て偽を拾ふは愚人の法なり、愚人の法には汝隨ふべからず、亦求むべからず。子若し
三昧耶を越えずして誰ること身命の如くし、堅く四禁を持つて愛すること眼目に均しく
教の如く修觀し、坎に臨んで積あらば、則ち五智の秘環璽を旋らすに期しつべし。況
んや乃ち瑩中の明珠、誰か亦秘惜せん。といふにありて、嚴厲策つが如き中に、春の
如き温情の言外に溢るゝを見るべし。

寂澄和尚はこの晴天の霹靂を迎へて、いかに感じけん。尙は一日を隔て書を泰絶に
送り、空策の時に和せんがために、禮佛の圖義と、其の大意を聞しめんことを請ひ
來りしを見れば、其の策勵を善意を以て釋き得たることは、いと觀易き次第なり。

かくてのち、阿闍梨は雪を踏んで山を出でぬ。直ちに平城の古京に赴きて、東大寺の南院に入りぬ。是れ四年の任期に満ちたれば、其の職を解きて、新に別當たるべき法師に、事務を引継いだりしが、一つにはまた、興福寺の南の一隅に、藤左衛門督冬嗣の建立したる南圓堂を、鎮壇せん法要も、此の行の中に衞まれたるなり。興福寺は鎌子内大臣の御爲に、其孫藤原不比等の建立したる藤氏の祈願寺なり。冬嗣の父右大臣内麻呂は去年薨去ありて、同じ北家の園人進んで右の大員とはなりしものから、良繼、百川より政權は式家に集りて、太上天皇、今上天皇、東宮に至るまで、皆な良繼の女乙牟漏皇后の皇子に在しませば、大臣の位も何となく預り奉つるやうにて、勢ひの振はざる心地するより、父の大臣の菩提を兼て、我が家の榮えを祈らんとめ、此の御堂は建立ありしなり。阿闍梨は師壇の契りあれば、冬嗣の意中を察して造營にも力を貸し、今不空羂索を本尊に安置して、懇ろに鎮壇の法を行ひ、尙ほ氏人住僧どもにも持念する事いと懇懇を極めたり。

さればにや、招かざるに群衆四方より會ひて、工事を扶け、法筵を賑はし、皆な口

口に

不多良久乃美奈美乃岐之仁須末比志天喜多能不知奈美伊摩會左賀由留

と詠ひはやしたり。誰が歌ぞと聞けども、誰知る者あらざれば、遂には春日の御神の神詠なりと傳へ崇むるには至りけり。

一身獨り生没す、電影是れ無常なり。鴻燕更
るく來り去り、紅桃昔の芳を落す。華客年
の賦に偷まれ、鶴髮賦祥ならず。古の人今見
えず、今の人那ぞ長きこゝを得ん。……性靈集

第廿五 高雄の嶺

間僧久住雲中嶺。

遙想深山春尚寒。

松柏料知甚靜歇。

烟霞不解幾千殫。

禪關近日消息斷。

京邑如今花柳寬。

菩薩莫嫌此輕贈。

爲救施者世間難。

這の七律一篇の詩は、今上天皇の阿闍梨を勅問あらせらるゝ御製なり。空襲は恭しく捧讀して、これを念持佛の厨子の壇上に置きぬ。かくて名香を炷いて禮拜しながら、徐かに首を回らす時、御使ひを奉りたる、内舍人布勢海は、賜りたる綿一百屯の目錄を呈して、奉はりたる口勅の旨を傳ふるなりき。

阿闍梨は天恩の優渥なるに感泣して、山中春尚ほ淺けれども、幸ひに聖徳の温光と潮脈の攝理とを以て、身は健かに心は寧らかに、朝夕實祚と國家と衆生との爲めに、懇念を怠らざるよしを復命し、更に硯を洗ひ筆を新にして、謹んで天韻を和し奉つりぬ。

方袍苦行雲山裏。

風雪無情春夜寒。

五緞持錫觀三妙法。

六年羅衣覆三蔬殫。

日與月與丹誠盡。

覆衾今見堯日寬。

諸佛咸護一子愛。

何須惆悵人間難。

これに副ふるに一篇の表文を以てし「總に天書を披くに字勢龍の如くに盤まり、再三詩を誦するに金の聲あつて玉の如くに振ふ、彼の魏武、唐文、豈肩を比ぶることを得んや。彼僧何の幸ひあつてか此の露帯に沐する、當に願くは之れを肌骨に銘じ、之れを日月に懸けて晝夜に精勤して、殊私を酬ひ奉つるべし。敢て布鼓を擧げて濫に春雷の響きを和し奉つり、輕しく聖覽を瀆す」とぞしたりける。

是は此れ三月の一日の事なりしが、閏七月に至りて、またもや布施内舍人を遣はされ、阿闍梨將來の雜書雜文にして、多少とも聖覽に入るものあらば、御覽せさせられん敬慮なる旨を傳へ來りき。去年も既に献つりぬ。篋底を搜るに、尙ほ古今文字讀三

卷古今家録文體一卷、梁武帝草書評一卷、王右軍蘭亭碑一卷、曇一律師碑銘一卷、大廣智三藏影讀一卷を得たりしかば、之れに會て御意を被りし事ある梵字悉曇の字母并に釋義一卷を添へ、清げに營繕して乙夜の覽に供する事としたりき。天皇と阿闍梨との間に通じたる文雅の交りは、詩書の唱和應酬の回を重ねるに隨つて、愈深厚になり行けども、空兼は深く自ら謙下して、「人は是れ瓦礫にして毎に金仙の風を仰ぎ、器は異許を謝して久く堯帝の雲に臥せり」となし、書の趣味を説いては、「窟觀の餘暇時印度の文を學び、茶湯坐し來つて乍ちに震旦の書を閱る。蒼史が古篆、右軍が今隸、務光が韭葉、杜氏が草勢を見る毎に、未だ嘗て野心愛ひを忘れ山情笑を含まずばあらず」といひ、茲に「奴の口に甘きは、郎の舌にも甜し」といふ事あれば「敢て斯の義に因て」献じ奉つるよしを奏し、此の韻雅の交りを以て傳導の縁を結び、一大飛躍を試みんとするが如き野心は、阿闍梨が心の何處にも、其の影だにもあらざりしなり。

然るにこゝに阿闍梨をして痛く心を惱せたる事ありき。そは一僧の女犯の罪に墮し

て、三衣の身を囚獄に繋がれたる出來事にこそありけれ。

平城の元興寺の故の賢璟大僧都の法弟に、圓璟といふ法師ありき。三年前の十二月に來つて大悲胎藏界の智水に浴し、虚空藏を得て眞言道を修めたる者なりしが、秋暑尙ほ熾くが如き炎天を冒して、親しく高雄に訪ひ來れり。請ふがまに「阿闍梨は座に延いて對面するに、彼の法師は流る汗を拭ひ、口重たげに請ふ所を語るなり

也。」「少祿が同法の沙門中環と申す者候ひき。既に傳燈法師位に上りて、法徳も無下に賤劣なる方には候らはざりしに、性として酒を好み、夫れがために戒行を破壊する事も、往々なきにしも候はざりき。然るに過る頃より化度のため平安京に參り居たるが、一期已に盡きても歸り候はず。消息とても弗に斷えて候ひしかば、寺にても皆な心を痛めつるものを、あら無殘や、身は國典を愼まざりし罪にて、嚴かなる國法に問はれ。苛しく堀川の獄に縛められしと承まはりて候ふ。いかならん罪かは知らず候へども、寺には寺の法ありて、夫々に執行すべければ、若し彼の法師が罪を宥めて、寺法に委

せ給はんには、自から故の大僧都が名をも顯がさず、自他の幸福之れに過ぎじと存じ候ふ。あはれ大阿闍梨、大悲の愛護を垂れさせ給へ」

汗は涙とより交りて、圓璟は大床に頬を摩り着けつゝ、其の情さすがに哀れとぞ見えける。

「そは嗚かし口惜しくも在すべし。さりながら、有司の嚴しく獄に繋ぐまでには、孰れに鞠問も重ね、罪跡をも糺しつべければ、沙門とて容易くは放つまじきぞ」

阿闍梨はかく言ひながら、心には早や救護の手續を思ひ運らすなりき。

「さん候ふ。執らはれし身の科を、救解かん事は難かるべし。唯だ三寶に仕ふる身なれば、寺法に付して罪すべくは罪しなん」

「夫れも一わたり理なり。さて中塚法師が犯せる罪科とは、いかなる事にて候ふぞ」

「されば、其事を大阿闍梨の御前に白さんは、尊嚴を顯し奉つる處あなれば——」

「そは無用の遠慮なるべし。其の罪の明らかならぬに、愁訴すべきやうもあらねば」

「御仰せ至極せり。其の罪過を明かに仕つりなば、死しても餘んの辜あるべく、碎

きても猶ほ他かじとこそ思すらめ。唯だ己の身を亡して名を喪ふのみならず、抑亦佛法を汚穢し、王法を違越すればにて候ふ」

圓璟は苦しげに胸を摩りて、深く愧ぢ厚く畏れ、いかにも言ふに難んするもの、如くなりき。阿闍梨も其の意を憐れみて、温顔に笑を含みつ。

「春は生じ秋は殺するを天の理とし、罪を罰し功を賞するを王者の常とはいへ、冬の天にも暖かき景なくんば、梅や麥や何を以てか華を生すべき。昔者秦の繆公晋の軍に圍まれし時、騎る所の善馬を亡ひしに、岐下の野人三百人、共に其肉を啖ひたり。吏大いに怒つて之を捕へ、將に罪に行はんとしたるに、繆公の曰く、君子は畜産を以て人を害せず、善馬の肉を食ふて酒を飲まざる時は、人を傷ふといへばとありて、三百人を赦して酒を賜りたり。されば繆公傷きて秦の軍危き時、岐下三百の野人、晋の軍に馳入つて遂に圍を解き、敵王を生擒りたる事ありき。今上天皇は仁は堯に至り、徳は舜を抜き給ふ、奚んぞ繆公の美に譲り給はんや」

この切實なる慰諭を得て、圓璟も始めて大旱に雲霓を望みたる心地したりき。

「尊論によりて稍や心の寛きを覺えて候ふ。大阿闍梨に對して白さんは、いかにも忍び難き事ながら、一むたり御怒りを鎮めて聞せ候へ」

眼をかすむる涙の露を拳に拂ひて、深く深く面を垂れぬ。

「此の事を聞きしより勝九回して睡れども夢圓かならず、魂消飛んで口に食味を忘れ候ひき。今あからさまに申さんも、心安からぬ事ながら、中環の罪科は、姦淫を犯したりと承まはりて候ふ」

満身を赤童子の如くに染めて、大床に平伏したる圓環を視やりつゝ、阿闍梨の眉はいと深く顰みつ。

「女人は是れ萬性の本にして、氏を弘め門を繼ぐものなれば、強ちに卑むべきにあらず。但佛弟子に於ては、親み厚ければ諸惡の根源となるより、六波羅密經にも、女人に親近すべからず、猶し親近すれば、善法皆な盡くどはいへり。若僧にもあらぬ身の、何とては心の迷ひけん」

「下愚は移らすとやらん、濁世の凡夫にもあるまじき事にて候ふ。殊に玉章を通は

して、戀慕の間に誘ひし女人は、宮墻深き九重の奥に仕ふる女房にて候ふ程に、有司の憤りは憎しみとなりて、遂には堀川に逐下し、役に驅使はるゝとこそ人の傳へて候へ」

圓環は屢嗚咽びつゝも、罪の次第を逐一に陳べ訖んぬ。

「いかに、宮女の戀に落ちしとや？」

阿闍梨が眉宇の間には、何とも知れぬ一種の笑を浮びける。平城佛教の形式の末に流れて、根本より腐敗し來れる事は、近士として石淵に出入したる頃より、親あたり見もし聞きもして、深く慨き歎てる所なりき。殊に東大寺に別當たりし際には、之れを矯め之れを正すを以て任としたれば、其の由來する所の、平城歴代の宮裏より發せる事をも究め得たるなりき。僧徒の墮落せしめらるゝが、宮女の熱せる戀情に基く如く、宮女の淑徳の破壊せしめらるゝが、僧徒の卑しき誘拐に基く事をも確め得たりき。宮闕のなくなりし後の平城は、自から墮落僧の數を減せしが如く、大伽藍なき平安京の後宮にも、此の種の宮女の眞を減せしは、自から明かなる理なり。然るに、今中

環が罪の宮女と玉章を通はし、にありと聞きて、此の罪案が甚だ臙臙として捕促へ處なき、浮草の戀なる事に想ひ到りしなりけり。
 其點に想ひ到ると、もに、或は宮女の間の憎惡偏執のために、既に飲酒の制戒を破したる中環の、これが傀儡は使はれたるものにはあらずやとも想ひ得たりき。斯く思ひ見れば、中環の罪にも多少恕すべき所あるやに考へられて、坐に哀憐の情さへも動き來れり。

「彼の法師の戒行を護らず、國典を愼まざりし罪は、大は則ち大なれども、帝堯の子にも丹朱が如き不肖あり、釋伽牟尼の御女にも普星比丘尼の如く、一箇一句一字の義を解せず、悪友に親近して四禪を退失せられたるあり。大樹仙人は翔若鞠國王の百女を見て、愛染の心生じ、阿難は婬室を経歴して婬席に誘はる。これに比ぶれば中環は凡夫なり。よし、よし、必らず罪を請ひ有めて得さすべきぞ」

この一語圓環は深く心肝に徹して、更に感謝の涙に咽びつゝ、幾たびか伏し拜みき。「申すも長き御事ながら、今上天皇は慈しみ春の風に過ぎ、恵み夏雨の雨に踰えさせ

給へり。奚んぞ秦政の必罰を取つて、周成の措刑を去り給はんや。空罪身に代ても、必らず刑を緩うし責を有むるの赦を請ひ得せんぞかし」

言ひ訖ると等しく、早や筆紙を呼びて表文の案を削するなりき。

閏七月廿六日、中環が罪を赦されんことを請ふ表を上つりしは、是れ阿闍梨が初めの請ひなりしなり。朝廷にも此の阿闍梨が燃ゆるが如き温情に動かされて、旨を有司に下して、中環を獄より出さしめ、元興寺の僧圓環が手に引渡しを了せられける。

是歳も亦固く禪房を閉して、敢て山を出ざりしが、白雲深き處飛禽尚ほ來往して、常に禪關を叩く者絶ゆることなし。仲秋の頃なりけん、博士伊豫部連眞貞の、下野守の任滿ちて京に歸りしとて問ひ來たりしが、東國の國情など細々と物語りて道ふやう、下野國芳賀郡の人に勝道法師といふが有る。同國の補陀落山は、菴笹銀漢を挿さんで白峰碧落を衝き、魑魅も通すること罕なれば、人蹊絶えて古より未だ攀ち躡るものあらざりしを、法師勇猛を仰いで意を策し、遂に去じ神護景雲元年四月、深雪を踏み峻巖を攀ち半腹に達し、住ること三七日にして却き還り、又天應元年四月攀陟を企

てしも果さず、二年三月諸神祇の爲に經を寫し、佛を圖し、命を棄て登攀し、信宿にして、終に其頂を見たりとて、審らかに山の狀を語り、勝道法師は此の勝地に華嚴の伽藍を建て、神宮寺と名づけて修道したりしが、去じ大同二年雨を祈つて驗あり、是より法徳天下に著はれぬ。然るに此の勝境にして記なきを歎き、伊博士に託して空飛阿闍梨に文を依頼せんとする事なりき。

阿闍梨も一旦は固辭したるも、上人の偉績を思へば、文情自から湧き出て、遂に「沙門勝道歴山水一盤玄珠一碑并序」の一大雄篇を得たりき。乃ち龍管を揮つて綾絹に書して與へしかば、博士は斯の文と彼の山と、孰れか偉、孰れか雄とて、寡ならず感謝の意を表したりしなり。

翌る歲に至りて、阿闍梨は愈秘藏を書寫して之れを世に廣め、大いに密教弘通の道を講じて、以て「早く郷國に歸つて國家に奉じ天下に流布し、蒼生の福を増せ」とありし惠果大阿闍梨の遺誨を果し、佛恩師恩を報せんものとの大誓願を發したるなりき。今や諸弟子を勵し、一身を擧げて事に當らんとするに、先づ第一に心を傷しむる

ものは、紙、筆、墨の料に窮する事にぞある。

鉢を持って城中に食を乞ひ、足を洗つて跏趺して法を説くは釋尊の志なり。今金剛一乘の法を流布せんとするに、衆機の緣力に乗じて、神通の寶藏を書寫するは、正しく沙門の執るべき道なるべしと思惟し、金剛子康守を東國に遣はして、下野の廣智禪師、同國補陀落山の勝道上人、常陸の徳一菩薩、萬徳菩薩に、法の爲めに助力を垂れんことを請ひ、また安行をして、甲斐守藤原朝臣眞川、常陸按察使藤原朝臣福當麻呂の方を歴訪せしめ、懇書を齎らして、冀がはくは一言の風を垂れて、秘藏の教を勸寫せんことを請ひ遣りつ。されど、有縁の力は厚くとも、及す所に限りあれば、更に一大勸進の文を草して、若し神通衆機の善男善女、若くは緇、若くは素、我と志を同うせんとする者あらば、此の法門に結縁して書寫讀誦し、父母所生の身をして十地の位を超越し、速かに心佛に證入せしめん。今弘法利人の至願に任へず、敢て有縁の衆力を煩らはすと結び、康守安行二人をして、途すがら勸化せしむる事となしぬ。

是歳、橘夫人嘉智子は、正良親王の故を以て、立つて皇后宮の位に陞り、智泉が

法力は愈篤く宮廷の信敬を得るに至りたり。この嘉聞の傳はる頃高雄山寺にはまた得難き少年の學匠を得度せしめたり。

左京の人、巡察彈正大弼正六位上紀朝臣御園は、武内宿禰十八世山城守由長の子にして、家に二人の男子ありき。兄を御豐といひて神儒の學に精しく、石清水の神主となり、弟を眞濟といひて、機悟敏慧并なく、幼より家學を修むるに、世典に粹しく詩賦に長じ、所謂咳唾も珠を成すの秀才なりしが、志學の年に至りては、更に先氏の風を喜ばず、寂歴を樂んで、家學を辱しとせず、幽人の幽行を仰ぎ、大道の大妙に耽けり、遂に儒冠を脱して阿闍梨の室に投じ、再拜して言ひぬ。

「弟子久しく清塵に渴して、恭しく下風に到る。鐘磬相響きて、新に控くこと舊きが如し」

阿闍梨も一見して其の器の大なるを知り、専ら大小乘を習はしめ、眞濟の名をそのまゝに、沙彌眞濟とは稱びけるなり。時に歳十六とぞ聞えし。

第廿六 高野の原

卯の花垣に袖觸れて、時ならぬ小雪のほろほろと零れかゝるを、拂ひもあへず山路行く斗敷の姿は、一鉢一盞に身を託して、宿願のために行脚する阿闍梨空兼になんありける。新樹に晴る、吉野山を見わたせば、響き風靜かに法衣を吹いて、心の塵も自から洗はるゝ心地をする。雲につらなる金峰を眺むれば、氷を席とし雪を被として、極寒を葛の衣に過しつる昔の苦行も思ひ出の科なりけり。

空兼は錫を留めて彼の嶺を飽す眺めたるに、傍らにも亦人ありて、是れはまた空兼がやつしし斗敷の装ひを、いと訝かしげに目成り居たりき。

志ざす處は、此處邊の山にはあらざれば、いさや路を急がんと、峽の細道を歩まんとするに、件の男は却つてつかつかと進み寄り、

「大徳は神靈の宿る高山を究め給ふにはあらずや」
言ふうちにも絶えず阿闍梨が面に眼を凝らしたり。

空葉も始めて其の方を見るに、こは此の邊りの獵者なるべし、皮膚の色は他までも緒くして、身長は八尺にも餘りつく、骨高く筋太く、見るからに逞しげなる男の、青き色の小袖を着して、弓箭を身に帯したるが、大きな黒犬と、小さな白犬とを網に繋ぎ牽き随へたるなり。

「いかに靈山聖地を尋ねるものなるが、御身は何處の人ぞ」

「我等は今この大和の宇智郡を、狩りせんとて求るものなり。大徳は何れの山を好み給ふぞ」

空葉は獵者の言容不審なれば、踟蹰して素志を告げず、却つて獵者を訊さばやと思ひたるに、彼方は疾く其の氣を察しけん、緒き面に一杯の笑を堪えぬ。

「我は是れ南山の犬飼なり。常にこのあたりの山々を徘徊すれば、凡そ吉野より南山にて私の知らざる嶺とてはなし、抑大徳は何の爲めに高山を求めんとはし給ふ」
面がまへこそ怖げなれ、心の優しげなるは、語の端に隠れなければ、阿闍梨も今は踟蹰する所なく、心當なる白雲の彼方を指さして、尋ねる嶺を物語り聞えぬ。

「少年の頃なりしかば、今は能くも覺えねども、彼の白雲のかゝるあたりに、我邦の妙高山ありと覺えたり。聊か修禪の草庵を引き結びて、心靜かに住まばやとは思ふなり」

「さては然る微妙き心願に在するにや。大徳の昔て覽給ひし靈山は、是れより猶ほ南の方、紀伊國伊都郡の内なるべし。其の山地は萬許町にわたり、其の中に於て幽平の原あり。誠に靈瑞の多き處ぞかし」

阿闍梨ははたと膝を打てり。

「實にそれよ、儘か高野の原とやらん言ひつるよ」

「夫れなり、夫れなり。和尚來り隔んで住み給へ。我また自から助成し參らすべきに」

彼の獵者も亦膝を打つて應じたり。

空葉はこの奇しき獵者より、奇しき指導を得て、心自から勇み立ちたり。今その處を示されて、二十年前の足跡、新たに心を照し來たるばかり、總ての記憶は明らか

になりぬ。

「頼みある事を承まはるものかな、貧道は太く行旅を愛したりしかば、名山大川略ぼ跋渉したれども、我が一期を終らん處は、彼の山ならではこそ思ひつれ。さても此の處は何といふ地ぞ」

「こゝは尚ほ大和の宇智郡にて、二見となん呼べる地なり、彼處に小高く茂りたるを、亦打山と申して、大和と紀の路の國境ひにて候ふかし。吉野川も彼のあたりにては、隅田川といふよしは、萬葉集に入れられたる、亦打山夕越行支天廬崎乃隅田川原爾單身加茂廢牟」の歌にて知られけん」

「さらば一足も急ぎて行くべけれ。縁あらば重ねてこそ」

阿闍梨は直ちに錫を進めて、歩み去らんとしたりしを、彼の獵者はしばしと呼び留めて。

「此處邊は樹立ものふりて、通路とても定かならじ。我大徳のために東道を參らすべし」と言ひながら、二頭の犬の綱を解き放つに、犬は欣しげに尾を掉りつゝ、阿闍

梨を顧みては、先に立ちて馳けり行くなり。

獵者の好意を厚く受けて、犬の行く跡に附て歩みつゝ、偶然來し方を顧みるに、件の獵者は何處行きけん、はや其の影だも見えざりけり。訝かしきこと言はん方なければ、犬を見失はんことを虞れて、心ならずも行く方をのみ急ぎたりき。

日の昏る、頃紀の大河を渡りて、其の河邊の民家に宿を求めたり。こゝに一人の山の民ありて、いと懇ろに來意を尋ぬるに、阿闍梨も今は包みて何かせん、明らさまに仔細を告ぐべしと思へば、夕の勅行果たるのち、件の山民を招き寄せて語らひぬ。

「貧道は是れ高雄山寺の空無なり。貧道大唐より還る時、風波起つて數漂蕩したりしかば、聊か少願を發して、歸朝の日には必ず諸天の威光を増益し、國界を擁護し、衆生を利濟せんが爲めに、一禪院を建立して、法に依つて修行せんに、願はくは善神誰念して、早く本國の岸に達させ給へど、懇ろに祈願し奉つりに、神明昧からずして安らに本朝に歸るを得たりき、然る後、日月は流るゝ如くにして忽ち一紀を経たり。若し此の願を遂げずんば、恐らく神祇を誑らん。是を以て少年の頃地の靈に感

じたる事ありし、高野の原を究めたる上、若し公けの免許を得ば、こゝに一草堂を營みて修禪の院とせまほしさに、城外には出来しなり」

山民は耳を傾けて聴き居たりしが、深く其語に感じたらん氣色にて、群らかに其の地勢を告ぐるなりき。

「實に菩薩の仰する如く、此より南方の山上に平々たる原野ありて、三面は峰連なり、山門巽の方に開けぬ。萬水は東に流れ、末派は一水に聚り、晝は常に奇雲聳え、夜は常に靈光現すと申す。菩薩若し彼の靈區を相給はんとならば、我東道し奉つるべし」

乃ち明朝に至りて彼の山民を隨身し、黒白の犬を伴ひて山に登るに、二十年前に於て、修禪の所この外になしと思ひしに差はず、巡見するに隨つて、地の靈なることは比叡に超え、山の美なることは補陀落にも勝りつべく、寔に國城を建立せしめんため、山神の我を待ちにしものとぞ思はれける。

時に隨身の山民は、つかくを身を寄せて、密め告ぐるやう、

「吾は是れ此の山の主なり。則ちこの領地を擧げて菩薩に獻じ、以て威福を増さんかな」

「我も亦仁の尋常の山民ならざることを知んぬ。この山の主とは、抑もいかなる神に在ますやらん」

阿闍梨が靜かに問ひ申すに對して、件の神は益々恭敬の意を表はしつゝ、

「吾は正しく伊弉諾尊の子、丹生津媛命の十二の御子の長子にて、高野明神とは稱ばるゝなり。其性山水に狎れて極めて人氣に飽なるに、今幸ひにして菩薩に逢ふ。是れ吾が徳の至れるなり」

欣然として阿闍梨を禮拜したるが、降るべき道を指し示しつゝ、姿は忽ち木隠れて見えすなりけり。

阿闍梨は深く妙機の熟したるを悦びて、木立らを潛りて山を下り、再び元の河邊に出んとするに、彼の犬は何處にか行きけん、其の影だも見えざるより、端なくも山路を踏み迷ひて、天野といふ山に入りぬ。山林に狎れたる身なれば、敢て狼狽へ騒ぐこ

となく、心當に細き徑を辿り行くに、日はや西に没して、木の下は小暗くなりぬ。よく繁茂りたる山なれば、星の光りも仰ぐによしなく、足に任せて分け行くほどに、忽然として十町許の澤の畔に出でたり。

尙ほ暮れ残る殘光に透し見るに、岸邊には炎赫いやが上に生ひ重りたるに、若菰の緑の芽を抽でたれば、水の色さへ蔽はれつべし。暮色黯慘として物凄ければ、阿闍梨は彼の澤に近づかずして、少しく迂回して歩むほどに、こゝに一字の神社あるを認め得たり。進み寄りて拜殿に頼れば、微かにも燈明の光りさして、内殿の額を認め、「丹生津媛命社」とぞ讀まされる。是れぞ正しく高野の鎮守の御神よと思ひ合はるれば、暫し祈念して、結縁空しからず、吾が宿願を成就させ給へと念じたりき。

祈り果て首を擡ぐる處に、一人の巫祝ありて、今宵のあるじし侍らんに、此方にて憩はせ給へといふ。阿闍梨は請せらるゝまゝに、巫祝が家に宿りつゝ、此の神の縁起を聞くに、丹生津比咩命、一の御子高野明神を始め十二子、一百二十の眷屬を將て伊都郡に天降り、この天野原に宮柱立ちて鎮り坐まし、譽田天皇(應神)の御宇にこの山

の周圍万許町を寄せ奉つり給ひしとぞ物語りぬ。

時に巫祝に神憑り給ひつ、乃ち託して宣はく

「妾は神の道に在りて威福を望むこと久しかりき。方に今菩薩此山に到り給へり、妾が幸ひなり。弟子昔現人なりし時に、食國龍命家地を給ふに萬許町を以てす、南は南海に限り、北は日本河に限り、東は日本國に限り、西は應神山の谷に限り。冀くは永世に獻つりて仰信の情を表はさん」

巫祝はかく告げ訖るともに、夢の覺めたらんやうになりて、いと老實て接遇にいそしみたりき。

阿闍梨は親しく奇瑞を迎へつ。現たり神の冥護を仰ぎつ。寔に密教相應の地なることを、いと切めて感じたりしかば、直ちに高雄に還りて、一篇の表文を認め、今は主助たる布勢海に託して、之れを傳奏せしめたり。

沙門空無言す。空無開く、山高ければ則ち雷雨物を測し、水積るときは則ち魚龍産化す。是故に晴雨の岐嶺には龍仁の迹休まず。孤岸の奇峰には觀世の蹤相續ぐ、其所由を尋ねるに、地勢自から爾なり。又

嶺の五寺には禪窟用を比べ、天山の一院には定僧寮を遣わるとあり、是則國の貧民の粟なり。伏して惟れば、我朝歷代の皇帝心を佛法に留めたまへり、金剛經變論のごとくに朝野に及び、義を映する龍泉寺毎に林を成す、法の興隆是に於てか足んぬ。但恨むらくは、高山深嶺に四顧の客乏しく、幽寂窮處に入定の資希なり。曩に是禪教未だ傳はらず、住處相應せざるの致す所なり。今禪經の説に准ふるに、深山の平地最も僧禪に宜し。空羂少年の日好んで山水を滂覽し、に、吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地あり、名を高野といふ。計るに紀伊の國伊都郡の南に當れり。四面高嶺にして人蹤絶たり。今思はく、上は國家の奉爲に下は諸の修行者の爲に、荒蕪を更り夷けて柳か僧寮の一院を建立せん。經の中に説くあり、山河地水は悉く是國主の有り、若し比丘他の許さるる物を受用すれば、即ち盜罪を犯すといへり。加以ならず、法の興隆、悉く天心に繫れり。若くは大若くは小、敢て自由にせず。望み晴らくは、彼の空地を賜はることを願つて、早く小願を遂んご。然らば則ち四時、勤念して以て雨露の施しを答しめん。若し天恩允許せば、請ふ所司に宣付したまへ。輕しく成度な塵す。伏して深く悚越す。沙門空兼 誠惶誠恐謹言。

弘仁七年六月十九日

沙門空兼上表

朝廷にても有司に付して評議の末、遂に其の請ひを容るゝこととなりて、直ちに符

を紀伊の國司に下したり。

太政官符

紀伊國司

空地壹處在伊都郡以南

四至

東限三生川和上峰

南限三當川南長峰

西限三應神山谷

北限三紀伊川

右得三僧網膳。偶

十禪師空兼 牒云

者。右大臣宣奉勅依請國宣承知依宣賜之符到奉行

參議從三位行左大辨

秋篠朝臣安人

左小史正七位上村主

豊田麻品

弘仁七年七月八日

紀伊守藤原朝臣文山は、此の官符に准じて、同じく廿八日を以て國符を伊都郡賀在田の三郡司に下して、こゝに此の靈山は空兼阿闍梨の禪院に免されたるなり。阿闍

梨は秦範、實慧に命じて彼山に上らしめ、先づ二の草庵を造るべく、郡司に宛て載したる親書を、齎らして發向せしめたりき。

夫れ境は心に随ふて變ず、心知るゝときは境濁る。心は境を逐ふて移る。境閑かなるときは心明かなり。心境冥會して道徳玄かに存す。

性靈集

第廿七 加持の水

禪居を高雄の山嶺に卜してより、既に八年の春秋を経たり。勅を奉じて一夏を乙訓寺に送りたる時、時に任に東大寺に往復したるの外は、幽居を閉して秘教の書寫に丹精し、子弟の教養に盡瘁したりしかば、精進の致す所其の効果空しからず、修道の門侶山林に充ち、經王の光明朝野に輝きて、遂にその師勤操僧都をして、一旦勅簡に應じて寮浴より灌頂を受けたる身にも關はらず、尙ほ六十三の老軀を高雄の山門に運びて、更にその資空兼に就いて、三昧耶の灌頂壇に入らしむるに至りしなり。高僧灌頂の事果てのち、阿闍梨は更に天皇の天命を拜しぬ。天皇の寶翰の年とともに圓熟せさせ給ふとも、入木道の御趣味はいよゝ深くならせ給ひて、主殿助布勢海を御使ひとして、五彩の吳綾に錦の縁を取りたる五尺の御屏風四帖を將ち來らせ、右今詩人の秀句を書きて奉つべきの旨言をぞ下されたりける。天意の在る所は阿闍梨こそ善く知り奉れば、強ちに辭し奉つべきにあらず、書意

の勤く時を埃つて、謹書して奉つらんことを御受けに及びたり。されば、勤行の餘暇ある毎に、詩集を繕きて秀句を拔萃し、數次書體を練り居たるが、夏より秋にうつる天の常として、雨多く晴るゝこと稀なるに、況して山中は雨濕の氣絶えずして、綾を伸べて管を揮ふべき好き日とてもなく、空しく一月餘りを費したるなり。

八月十五日の朝なりき。晨起して窓を排くに、雲晴れ霧收まりて爽快なる秋露に對することを得たり。待宵の月には尙ほ白雲のたゞよふを恨みしが、此の仲秋の名月こそ、いかに曇れる世の人心を、清けくも照らすらめなど、且にして夕の思はるゝまで、天の色は美しくかりけり。阿闍梨は寛の水を手にとりて、清淨に身體を拭ひつゝ、直ちに朝の勤行を終しが、一室を掃ひて甃を展べ、沙彌眞明をして名研に墨を磨らしめつゝ、拔萃せる秀句の本詩を一卷に寫し、頓て龍管に墨を銜まするや、忽ち眞綫の面に灑ぎて草蛇を走らすに、瞬間にして化して龍となり、或は雲氣仙風を起し、或は垂露偃波に列なり、鱗鳳瑞芝筆下に生ず。一點一劃目にも留らざるばかりなれば、眞明等は磨る墨の手自からたためたひて、惘然として目を駭かすばかりなり。

就中眞濟と眞雅とは、この超人的の筆勢に心を留めて、虚實の妙旨、擒縱の秘訣、聊かも意を用ふる所なくして、自然に法格に入り、天馬の空を馳する如き處、却つて萬斤の重きを要するあたり。目を凝らし神を鎮めて、細心に看取せんと努むるなり。實に阿闍梨が筆は神なりけり。剛柔如意にして活潑自在なれば、常に師の筆迹を學んで、多少得る所ある身にも、其の妙更に端倪すべからざるなり。殊に神旺にして眞高、筆もなく手もなく、心直ちに字を現はすの三昧に至つては、眞濟も眞雅も、更に眞明と違ふ所なく、殆ど夢に遊んで幻影を見る心地のみぞする。

阿闍梨は秀句を書き終つてのち、姑らく筆を案じて綾の餘白を諦視めたり。眞濟と眞雅とは、彼の餘白をいかにし給ふらんと、師の面と屏風の面とを見比べてありき。阿闍梨は目を瞑りて句を練るものゝ如くなりしが、筆はいつしか墨池に浸されたり。開かれたる眼は屏風の餘白に注がれたり。莞爾として筆を役すれば、咄嗟にして一篇の詩は成れり。

蒼嶺白雲觀念人。

等閑絶却草行眞。

心遊佛會不遊筆。
 豈謂明皇交染翰。
 祥雲濃淡御邸出。
 青山翠嶽見翔鳳。
 更有懸針與倒韭。
 龍管隨池調深墨。
 異風驟雨莫來汗。
 松殿敷霧庵中濕。
 畫虎畫龍都不似。
 翰墨の妙は言はずもかな、咳唾も珠を成す韻華の致に至りては、斯道に深き興濟も、只願鬼工とするより外はなかりき。阿闍梨は揮灑了へたる墨の乾く間に、又一篇の表文を舂して、直ちに之れを献じ奉つりぬ。

不願揚波爾許春。
 鵝頭龍爪爲君陳。
 瑞草秋冬感帝仁。
 華苑瓊林望走鱗。
 切思相伴竭丹宸。
 烏光忽照點豪賓。
 此是君王所愛珍。
 恐汗望晴經月旬。
 心寒心暑幾逡巡。

天皇はいと待ちわびさせ給ひける御時とて、之れを清涼殿に建てさせて御覽せさせ

給ふに、淋漓たる墨痕今にも流れ出ん如く、筆端看るく風を發さんばかりにて、其の精絶妙絶、寔に筆も言も及ばざりけり。さすがに寶翰に於ては古人にも譲らじと思召す天皇ながら、是れには所詮及ぶべからじとて、只願御感在らせられつゝ、空葉が奉つる表文を、御手づから御覽あるに、

空葉聞く、物類形を殊にして事群體を分つ、舟車用を別にし文武才異り、若し其能に當るときは、事則ち通じて快く、用其宜きを失ふときは、勞すと雖も益なし。空葉元觀牛の念ひに耽り、久しく返鶴の書を絶つ、遠夜數息す誰か穿被を勞せん、終日修心す何ぞ墨地に能へん、人曹喜にあらず讓つて漢王の邸に對へり、辭せんと欲すれども能はず、強て龍管を揮ふ。

古人の筆論に云く、書者散也、但だ結綯を以て能と爲るのみに非ず、必ず須らく心を境物に遊しめ、懷抱を散逸して法を四時に取り、形を萬類に象るべし、此を以て妙と爲すと。是故に蒼公(蒼顔)が風心は鳥跡に擬して翰を揮ひ、王少(羲之字逸少)が意氣は龍爪を想ふて筆を染む。蛇字は唐綜(唐終)より起り、蟲書は秋婦(秋胡妻)

に發す。軒聖(軒轅)雲氣の興、務仙(務光仙人)風非の感、垂露懸針の體、鶴頭偃波の形、麒麟鸞鳳の名、瑞草芝英の相、是の如き六十餘體は、並に皆な人の心物に感じて作れるなり。

或の曰く、筆論筆經は、譬へば詩家の格律の如し。詩は是れ聲を調へ病ひを避るの制あり、書も亦病を除き理に會ふの道あり、詩人聲と病とを解せずんば、誰か詩中に編まん。書者病と理とを明めずんば、何ぞ書評に預らん。又詩を作る者は古體を學ぶを以て妙と爲す、古詩を寫すを以て能と爲さず。書も亦古意に擬するを以て善と爲し、古跡に似るを以て巧なりと爲さず。所以に振古能書百家體別なり。蔡雍(世字伯喈)大いに笑ひ、鍾繇(字元常)深く歎く、良に以あり。

空兼備解書の先生に遇ふて、粗口訣を開けり、然りと雖も志す所道別にして會て心に留めず。今聖雷の震響に頼つて心地の整字を抜く、六書の筆意を折り、八體の英華を摘む。轉筆を鼎鼐に學び、超翰を草聖に擬す、山水を想ふて擺撥し、老少に法つて終始す、君臣風化の道、上下の畫に含み、夫婦義貞の行ひ、陰陽の點に藏

めたり。容主揖讓し、弟昆友悌あり、三才變化し、四序生殺す、尊卑愛敬し、大小次第あり、隣里和平し、寰區肅恭なり。此等の深義悉く字々に纏めり。功を書地に謝すと雖も、竊かに雅趣を庶幾ふ。

又、夫れ右軍功を累ねて猶未だ其妙を得ず、衆藝(善知衆藝童子)も沙を弄んで始めて已に其極に會へり。自外の凡庸何を點畫の奥を解せん。何に況んや空兼耳に其義を聞いて心に理を存せず、空しく筆墨を費して忝なくも珍屏を汗す、一ひは悚き一ひは懼れて、心魂飛越す。

于時美暎光を流して葵菴自から感ず。山に對つて管を握るに、物に觸れて興あり、自然の應、覺えずして吟詠す。輒ち十韻を拙て敢て後に書す。伏て乞ふ天慈其罪過を宥したまへ、幸甚幸甚、

.....
御覽の後あまたび御感存らせられしが、遂に御賞美の餘り、爲めに宸翰を染めさせ給ひて、御製の詩一篇を賜はりぬ。

深山居住振奇名。
 水玉顔容心轉清。
 世上草書言爲聖。
 天縱不謝張伯英。
 暫乘雲嶺一念纒。
 書得綾羅四帖屏。
 初見筆精驚鳳體。
 情看墨妙虬龍形。
 高峰墜石未動地。
 絕澗長松豈揚聲。
 亂點乍疑舞鶴超。
 相連遠似旅雁行。
 花苑正開春日色。
 月天遍照秋夜明。
 對之觀者目眩暈。
 共賞草書一笑丹青。
 絕妙豈能不可測。
 二王沒後此僧生。
 既知風骨無人擬。
 收置秘府最開情。
 心を眞如の明月に住して、世間の毀譽の外に立つ阿闍梨とはいへ、この御製を拜しては、いかで聖恩の隆渥なるに感泣せざらん。殊に二王没して後此僧生すと敬感在せられ、秘府に藏めて時に天情を慰め給はんと玉音を拜しては、是れ偏へに身三寶に

仕ふる佛徒なればこそ、此の榮寵を擅まゝにすることを得るなれ。否らすれば京貫にも膺らざる草莽の微臣の、いかにして天威に呎尺し奉つることを得べき。この至大至厚なる君恩に沐するも、偏へに佛恩の致す所なり、師恩の賜ふ所なり。この恩に報せんには、一日も速かに大毗盧遮那の光明を傳へて、上は君上の奉爲に、國家の奉爲めに、衆生の爲めに、萬生の爲めに、拔苦與樂の途を講せすばあるべからずと思ひ入りける。
 爾る時、天の一方より驚くべき機飛び來りて、したゝかに空籠の心を打ちたるなり。雲井を洩れて高雄の山に通ふなる風の便りに、弘仁天皇の聖體御不豫のため、重陽の節會を停め給ひしよし、明らかに聞えわたりしなりき。
 阿闍梨は心天主を失ひたらんばかり、痛く心を悩まし、が、加持祈禱はかゝる時の爲めなりとて、諸弟子を隨へて壇上に樂師瑠璃光如來を勸請し、十月八日より一七日を結期とし、護摩の火烟は晝夜に接し、持誦の聲響は間斷なく、懇念を凝らし、丹誠を抽んで、天窮の平損を佛陀の神護に祈り、己を剋めて肝を爛らしたるに、感應未

だ審らかならず、いと心許なかりしかども、十四日の朝に至り、加持したる神水一瓶を捧げて、眞朗を使ひとして宮中に参らしめ、この加持したる神水を以て、薬石を聞食させ給ひ、速かに不祥を除却させ給へと奏させたり。

阿闍梨が忠誠の心を佛陀の納受在しましてや、加持水もて聞食しつる薬石の、内外より病疫を攘ひまつりけん、一期の御祈禱畢りて、神水を薬石に添へて奉つりしより、さしもの御惱も漸次に勝れさせ給ひて、後の一七日には、早や後假床を拂はせ給ひけり。

大同の御祈りといひ、今また聖體除疫の御祈禱といひ、空兼が行ふところの行法は諸天善神感應ありて、靈験立ちまごころに顯れしかば、天皇の御崇信は、其の詩書に於るよりも、更に幾層の御恭敬を加へつるなり。されども、空兼の心は常に山居山修にありて、殿上に入出して威儀を飾るを喜ばざりしかば、天皇いかに御崇敬在らせらるるども、俄かに僧綱に任じ給ふべくもあらで、已むなく其のまゝにさし置かせ給へりしなり。

阿闍梨はこれをこそ上もなき垂恩とは感謝せめ、心には彼の高野の原の伽藍建立を畫きつゝ、寸を得れば寸を化し、尺を得れば尺を度し、偏へに秘密經王の基礎、確實に定まるをのみ樂しみ居たり。

曾ては秋の頃を以て、再び高野に登らんと思ひしに、未だ得果さるうちに雪已に彼の嶺を閉して、實慧泰範等は下り來れり。泰範は曾て叡山の上足として、叡澄の爲めに選ばれて眞言道を修せんため、高雄山には來りしなるが、學ぶこと愈深くして、密教の幽旨愈違きを感じ、斷然一乘顯戒の門を脱して、三密專修の行者とはなりしなり。之れがために叡澄の嚴責を受けたれども、阿闍梨の範に代つて復書を送りしより、澄上人も愠りを遣れて歸依の篤きを悦び、許して眞言僧とはなしくなり。されば、臘といひ學といひ、自から門侶の重んずる所となりて、三綱に續いて此の沙門を推し、阿闍梨も亦其の圓滿の法徳を愛して、實慧とともにかゝる役義をも命じたるなり。

次の歳の夏、漸く智泉を伴ひて彼の山に登れり。二三の草庵膝を容るゝに餘りあれ

ば、先づ四至を究め、次に山上の八峰を究め、中原の地を相して、こゝに伽藍建立の基礎を定めたる上、初めて結界の法を修して、東西南北四維上下七里の中、一切の悪鬼神は結界を出で去れ、所有一切の善鬼神等、利益あるものは随意に住せざるを啓白したる。更にまた壇場を建立する結界を修して、此の伽藍如来像の前に於て、諸佛子等同法一心に佛法に住持し、四恩に報じ奉つり、有情を饒益せよと啓白し、金剛軍荼利菩薩法に歸命して、七日七夜懺悔禮拜したり。是れなん後年高野山金剛峰寺の興るべき第一の起手なりける。

無邊の生死いかにして能く断たん唯願那ま
正思惟と有るのみ……………心經秘鍵

第廿八 以呂波歌

弘仁九年の春、いかにして天の時序狂ひけん、常ならましかは人は野遊に心も空なるべきに、寒き日は立冬の夜の如く、暑き日は三伏の晝かど疑かはる。殊に上下の心を寒からしむるは、時を定めぬ地震の災ひにて、氣も魂も身に添はぬは、天地に轟く霹靂の荒びなりけり。いかならん世の末にかと、營業も手に着かぬ折から、空むつかしくかき曇りて、日毎に夜毎に降りくらす雨は、宛然五月雨に異ならず、雨霽るれば炎暑燄くが如くにて、疫癘猖獗しく行はれつゝ、都の内外は死人道路に充ち満ちたりけり。

此の頃の例ひとて、疫病に罹りし者は、家の内にて病ひを養ふことを憚れば、孰れも浴外の野末に運びて、富めるものは小屋のさまも見よげに繕ひ、煮炊の世話より薬餌の通ひを勤むるものあれども、貧しき者は雨露を凌ぐ小屋とても得結ばず、僅かに一枚の菰を布きて露けき草の上に臥し、尙ほ一枚に身を蔽ふて、餓と病ひとに呻吟

き苦しむを常とす。假令眷族の者ありども、我が玉の緒の惜しければ、感ることを
 懼れて足近く訪ふものもなく、固より藥石にも乏しければ、病苦を緩ぶるやうもな
 し。死に瀕みたる者こそ、かくして死を速むるを易しとせめ、さまでに重からぬ者、
 若しくは病心の稍や癒りし者は、雨の旦、風の夕、死したる人、死せんとする人の周
 圍より、襲ひ來る穢しの物、奇しの香に、心地死ぬべう覺えつべく、疲せたる脚を力
 に、勞れたる身を運びて、枯枝を拾ひ、水を汲み、唯だ一盃の粥を煮るにさへ、幾干
 の辛苦は積むやらん。哀れなるは野末に朽つる疫癘する人の上なりき。
 阿闍梨空葉は、この世からなる地獄の慘狀を見て、哀憐の心禁めあへず、曾て唐よ
 り持ち歸りたる藥草を預りて、この人々を救はんとするに、病ふの人は其の數限りも
 なく、我が請來せる藥草には、固より一定の量あれば、所詮これにて救はんことは思
 ひも由らず、さればさて此の憐れむべき黎民を、見殺しにせんは尙忍ぶべき事にあら
 ねば、きこ心に決する所ありて、大納言藤原冬嗣の邸に訪れたり。
 歸依深き阿闍梨の、請せざるに山を出て來給ひし事なれば、家の人々うちも置かず

歎待し參らするに、阿闍梨は曇りたる面を和らげんとせす、圭の卿と膝を交へて、
 いとうち濕りて懇談するなり。

冬嗣は阿闍梨の意見を聽き果てのち、徐ろに涙を拭ひぬ。

「微妙も冬嗣に誨へ給ひつるよ。聖人には家の運命をさへ擧げて任せ候ふものを、
 いかで大慈大悲の御誓願を空しうすべき。冬嗣が力にたも及ばんには、如何も御誓願
 を果たし參らすべし」

「そは欣しき御誓ひを承はるものかな。情は人の爲めならぬに、疾く施藥院を開き
 て、癒えざらん病者にも、切めて一調の藥を服ませたまものにてこそ」

「施藥院を開かんことは易かるべし。いかにして多くの病者に施すべき藥草を得
 べき。難かしきは此の一件にこそ候らへ」

阿闍梨はさもこそ期しつれば、こゝに始めて堯爾としてうち笑めり。

「貧道にも聊か大唐將來の良藥の候ふが、是れとても限りあれば、衆くの患者を救
 はんこと思ひも寄らず。さらば、施藥院に於ては、藥のみ施さずして、請ふ者には煎

じて與らすべし。凡そ體内の病ひは藥石能く之れを癒さん、されど、心の病ひは唯だ加持のみ能く之れを癒すといへり。即ち貧道は山に在りて懇念に神水に加持し、之れを藥院に送るべければ、これにて藥を煎じて與ふる時は、一帖にして三人を癒すべし。斯して丹精を抽でんに、何とて志を遂げ得ざるべき。貧道が思ふ所は唯だ此れのみ」

「聖人の加持し給はんには、神水のみにて人を救ふに餘りあるべし。さらば、九條坊門の邸には、相應しき家もあれば、速かに彼處を開きて施藥救濟の悲院とは仕つらん」

阿闍梨は普ねく病者に代りて恩を謝し、眞濟をして此事に當らしめ、自らは持念の爲めに急ぎ山に還りたり。

天皇にも此の悪歳を痛く感れ思召され、朕に何の咎ありてか、かゝる天譴を被るらんと、宸襟安からず思召されるれば、陰陽博士に命じて占はせ給ひ、また「昔天平の年にも亦斯の變あり、因て以て疫癘宇内を凋傷す。前事忘せず取除遠からず。竊かに

惟みれば、佛旨冲奥大悲を先と爲す、又疾病を拔除するは、抑前典あり。宜しく天下に令して齋を設け僧を屈して、金剛般若經を轉讀せしむべし」と宣らせ給ひしが、猶ほ悲哀の御心切にして、遂に御親手から紺紙を展べて金泥を筆端に染め、一字三禮、一日にして般若心經を頓寫し給ひぬ。

乃て空乘を召して之れが慶讃を命せさせ給ひき。阿闍梨も主上の猥慮の難有きに感泣して、廣澤の池の畔、嵯峨院に於て開題供養し奉つる事とせり。

當日は、天皇にもいと御潜はせにて、嵯峨院に臨幸在せられ、便殿にて御休息遊ばさせらる。間もなく御供養始るべきよし、奏しければ、寢殿に出御遊ばさるゝに、此時阿闍梨は常の如く香の衣を着すして、金色の衣を一着し、徐かに壇上に對つて進めり。主上はこゝに左右を遠け給ひて、唯だ御一人のみ對の座に着御なり、玉笏を持して御聽聞在らせらる。阿闍梨は水瓶を前に置き、卓の上に宸翰の般若波羅密多心經を奉安し、始らく法衣の袖をかき合せて、契印を結びたるのち、右手に劍を執り、左手に念珠を持し、聲明らかに心經を讀誦し、更に開題供養に移れる頃より、磔を飛し

枝を鳴らしたる風聲も、いつしか静まりて、遂に進んで、

「我秘密真言の義に依て、略して心經五分の文を讀す。一字一文法界に遍し、無終無始にして我が心分なり。瞶眼の衆生は盲て見えす、曼儒般若は能く紛を解く。斯の甘露を瀧いで迷盲を蓋す、同じく無明を斷つて魔軍を破せん」

と、結びたる刹那、卓上の御筆より赫々として黄金の光りを發つよと見る間に、阿闍梨の金衣も亦光明を八散して、宸殿の裡は見る目眩ゆきばかりなりき。

時しもあれ、暗暝なりし黒雲は天の一角に凝まりて、麗らかなる春の日は、野をも山をも温かに照すなり。清き風は吹らかに人を撫て、疫癘の神を國の外に穢ふかと疑がはれ、人の心も自から勇み立つことを得たりしなり。

かゝりしかば、天皇の御願空しからず、遠からずして疫癘の地を拂ふべく思はれければ、叙感斜めならず、伴の金字心經と、阿闍梨の秘鍵とを篋に納め、一殿をこの嵯峨院の園中に營み、こゝに之れを安置して心經殿とは號け給ひてけり。

阿闍梨は水瓶に神水の良薬を満して、郊外の患者を見舞ひしに、稍や癒たりしもの

は、衣を改めて立つて之れを迎へ、今猶ほ枕に臥せるものは、首を擡げて再拜し、其の面上には、孰れも言ひ知らぬ喜びを浮べたり。阿闍梨は瓶より薬水を注ぎつゝ、陛下の御哀憐深く在し、宸翰を揮つて金字の心經を寫させ給ひたる御功德によつて、さしもの疫癘も今は跡を絶ちたりと説き示したりき。

天時順に復して、疫癘既に熄みたれば、久しく停め給ひし宮城十二門の修營を急ぎて、頓て其事も畢りしかば、新たに諸門に榜額を打たるべき事になりて、先づ殿閣宮門の號を選び、其の筆者を定めらる。則ち陽明、待賢、郁芳等東面三門の額は、主上親ら宸翰を揮はせ給ひ、安嘉、伊藤、達智等北面三門の額は、橘逸勢、談天、漢壁、般富等西面三門の額は、小野美材勅を奉じて之れに書し、殘る南面の三門、即ち美福、朱雀、皇嘉の三門、並に太極殿の前面に當る應天門の額は、空兼阿闍梨詔旨を畏みて筆勢を揮ひたるなり。殊に應天門は正殿の御門なれば、其體に心を注ぎ一稱の筆法を以て揮灑したりき。

天皇には一々に叙覽ありて、其の能書を賞させ給ひ、かゝる名迹を以て門額を打た

んには、渤海よりいかなる使節來朝すとも、彼を驚かすに足るべしと思召されけるが、特り應天門に至りては、結異の奇古なる、柘本に就ても未だ御覽せさせ給はざりし書風なりしかば、此の書態は何に倣ひしぞと勅問ありけり。其時阿闍梨は其の筆路を説き明し奉りて、是れを即ち抛筆の法にて候ふと奏問したりしに、主上は申上ぐるに及ばず、列坐る諸公卿も、今に始めぬ阿闍梨が筆の精妙さよとて、殿上殿下舉りて歎稱したりけり。

この事いつしか關外に傳はりて、高雄の空兼和上こそ、應天門の額を書かせ給ひしに、かみまろの點を忘れ給ひて、門に打ちて後見つけ給ひ、驚きて筆を濡して抛げ給ひしかば、その處につきにき。見る人手を拍らあざむこと限りなく侍りけれなど、詛りて言ひ罵しりたるなり。

十一月十六日、辛うじて宿志を果して高野の草庵に登り來れり。智泉、眞紹及び東大寺より附屬し來れる圓明、其外沙彌等の多く扈從して移り住まりけるに、今まで曾て人の住むものなかりし南嶽の冬は、時ならぬ人の香に春めきて、番匠等も小屋を列

ねて、丁々の音勇ましく、草堂には住侶聲を和して、梵唄の調嚴かに、降り積る深雪をも、襲ひ來る寒威をも、胃しに胃し、凌ぎに凌ぎて、苦もなく越年するを得たりき。翌年に至りて金堂の造營成り、新たに山を高野山寺を金剛峯寺と稱する事となれり。其の五月三日には、地主兩社並びに、百二十社を勧請して、先づ伽藍神を崇尊し、六月朔日には、大塔の心材を虎が峰の深林より伐り出して、同じ廿八日を以て、諸れを壇上に曳き運びしむる事とせり。是れ實に伽藍の根本なれば、假にも穢れあらせじとて、實慧をして之れが奉行たらしめ、柚大工十六人を選んで、これを一大法師、二大法師と稱び倣したり。此の如き役人等にも結縁の料として、面々に眞言を授けぬ、此の縁に依つて工事にも障礙あらしめじとの用心なりき。

一大法師の組に授けられたるは「梨留まを宿」にして、之れに「バ、サラ、ダト、バム」の假名を付け、また二大法師に授けられたるは「阿多のなを」にして、之れには「ア、ビ、ラ、ウム、ケム」の假名を付けられたるなり。十六人の大法師等は一心に其眞言を誦してありしが、夕方に至りてはたと此の眞言を失念し畢りて、いかに考ふる

ども、更に心に浮はざりき。

一 大法師も二大法師も、共に太く當惑したれば、恐るゝ實慧大徳が草庵に抵りて、阿闍梨より授け給ひし眞言を忘失したれば、何卒今一遍御教へ賜はるべし、這たびは心に銘つけて得こを忘れ候ふまじけれと言ふ。實慧は當惑の色を察して、其の賜りたる眞言を取つて見るに、「大法師に授けられたる『咒のまなび』には、何故にか『ハ、ナラ、ダ、ト、ハム』と假名を付けられ、二大法師の『ハ、ナラ、ダ、ト、ハム』には却つて『ハ、ビ、ラ、ウム、ケム』とありしかば、假名の付きやうを心得難く思ふまゝ、柚大工等を待たせ置きて、急ぎ阿闍梨が方に赴き、其の所以を問ひまつりしなり。

空乗は訝がる實慧を微笑して見やりつゝ、

「女にも骨あり、男にも肉あり」

實慧は立ちこころにして其の意を領解して、はつとばかりに叩頭き拜しつ。

實に金剛界は智を表して男に形り、胎藏界は悲を表して女に形れども、金胎兩部は寔に不二不離にして、金界にも胎藏を具すること男にして猶ほ肉あるが如く、胎藏に

も金界を具すること、女にして猶ほ骨あるが如くなり。斯く心着かざりしは、傳法灌頂をも受けたる身にて、いさ愧かしき事と思ひしなりき。

實慧が歸り行けるのち、阿闍梨は圓らすも結縁の動機の甚だ不備なりし事を悟り得たりき。咒のまなび、ハ、ナラ、ダ、ト、ハムと唱ふる聲は、熟れたる身にはいと易く覺ゆれども、眞言に心なき身には、唯だ異やうの音を怪しみて、却つて心に入り難ければこそ、彼の番匠等の朝に聴きて夕には忘れしなれ。僅かに四句の眞言を授くるにだも、民情に背けば此の如し。密機を普ねく弘通して、一切衆生をして眞言道に入らしめんには、今少しく平易なるものを造りて、知らず識らず口に上り、知らず識らず覺王の殿に進ましむるには若じと、深く此の一事に思ひを潜むるに至れり。

是れより先、空乗は文章の訓點を施すために、古くより作製られたる萬葉假名、吉備大臣眞備の製し創めしといふ片假名の二つを採りて、一定せる用法を定めんには、

内外二典の孰れを問はず、初學のために益する所大なるべしと思ひて、遂に悉曇の組織を應用して、こゝに五十音の圖を作り、母音子音の關係を明らかにしたりき。是までは漢字の音を探りたるもの、意を探りたるもの、或ひは熟字の上の義を探りたるものありて、中には義之の名をそのまゝにてし(手師)と訓ましむるが如きの類ひあり、之れを學ぶに別に師を要するが如き不便ありしを、流傳し來れる片假名を約めて、其の數を五十と定め、總てアイウエオの母字より生み出せる事としたれば、爰に始めて正しき音字の譜を得たりしなり。

されども、這は却つて學者研磨の用には至極すれども、上下一般を通じて用ひんには、重音多くして簡易なりとは言ひ難きに、空乘自身の立場より考ふれば、唯だ悉曇に基きて音字を五十に約めたりといふに過ぎずして、此れを以て佛法弘通の捷徑とはならざるなり。教法は本なり、文字は末なり、假令文字を習はしむるとも、其の意は佛陀の眞言ならざれば不可なり。一偈を解せず、一字を知らざる愚夫愚婦、婦女、童幼に至るまで、口より口に傳へて、自から佛法に結縁するものならざれば不可なり。

いかにせば可ならんか。

空乘は彼の動機を逸せずして、深く此の微妙の方便を起さんことに腐心したりき。或時涅槃經を讀誦したるに、闍らすも、

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂

の四句の偈に接着してけり。是れ人生の最期なり、歸趣なり、常住なり、不斷なり。輪王と釋凡とを問はず、凡そ生を此の天地間に得たるもの、誰か涅槃の一路に入らざるものあらん。無常道に歸らざるものあらん。寂滅縁を結ばざるものあらん。春の花は時を得て匂へども、時去れば空しく散りぬべし。我がこの人の世も、誰か無常を免かれ得べきぞ。嗚呼人間は有爲にして、人世に常住のものなしと悟らば、速かに妄念の迷夢より覺め來つて、無明の醉を知らざる淨土に急がざるべからず。是れ實に釋尊一代の教旨なり。今この四句の偈に由つて衆生を諭さんには、利濟の功は萬卷の經に勝らんとぞ想ひ到りぬ。

同時に天華は頭上に燃えたり。梵唄の調格を假りて、長短八句の歌は、心水の鏡

上に落ち來れり。試みに筆を採つて書き列ぬるに、かくなん成りにける。
色は匂へど、散ぬるを。

我が世誰ぞ、

(諸行は無常なり)
常ならむ。

有爲の奥山、

(是れ生滅の法なり)
今日越て、

浅き夢見じ、

(生滅滅し已つて)
酔もせず。

「嗟！ 嗟！ 是なり、是なり」
是に於て創めて「以呂波」歌の製は成りぬ。

(寂滅を樂と爲す)

第廿九 ふたら山

中元を過ること僅かに十一日、殘炎尙ほ雲を魚がして、秋意未だ水に動かざるに、山深ければ白露風く草を露し、境幽なれば涼氣清く腐に徹り、蟬の聲既に木梢を去りて、蟲の語盡も葦間に絶えず、異人の都する所、靈物の産する所、雲霧も亦世を隔つるの帷を疑がはる。樹間を洩る、瀑の聲に谿の深きを想ひ、峽路を挟む樹の姿に山の高きを察しつ、杖を運ぶ空策が目には、此の嶮嶮峻嶮を踏み破りたる勝道上人の、精力と法力とのみ、現前睹るが如く映するなり。

東道に立てる道珍法師は、初めより勝道上人に扈從して、此の補陀落の絶嶮を究めたる沙門なれば、四本瀧寺を出てより、其の跡に就きて其の昔を語ることいと詳らかに、頓て導いて山上の湖畔に出でたり。

峻坂に喘ぎ來て、忽ち平坦の廣土を得るのみならず、意ひの外にも漂渺たる一大湖の開かれし事なれば、隨行の沙門等は脚の勞れをもうら忘れて、阿呀とばかりに聲を

放つて歎賞したりしなり。道珍法師は直ちに阿闍梨等を神宮寺に導びきて、齋を供へて山路の疲れを勞らひたり。上人の遺弟子教長、尊鎮、仁朝等、皆な誠實を盡して、阿闍梨の山遊の一日も長からんことを努むるにぞある。

空葉は去年七月高野の山を下りて、高雄山寺に歸り、更に泉隣、眞雅、並に大安寺の幹海を率ゐて、東國の古迹を巡禮すべく、平安京を發ち出でたるなり。行きくして伊豆國田方郡走湯縣に着きぬ。こゝに桂谷といへる地ありて、溪水中を流るゝに、川の中より温泉の湧き出して、疲れたる體を養ひ、病る身を癒すべき奇瑞著るしければ、此の勝境に由りて修禪せんに、其の効果空しかるべくも思はれずと、遂にこの谷に一字の修禪院を營み、桂谷山寺と號して、こゝを泉隣大徳に付屬したりき。

桂谷山寺落慶の時、楠の良木を得て、自ら丈六の金剛力士の尊像を彫み奉つり、之れを本尊として金剛界大灌頂を興行したるに、遠近の緇素傳へ聞きて、速く密灌に預からばやとて、隨喜結縁するもの雲の如くなりき。阿闍梨は猶ほ此の山の社頭を巡禮して、壇を結んで念誦すること三日三夜に及びしが、忽ち走湯權現の王子來影して、

權現形を隠さんと欲するに、先づ此の神鏡と寶鏝とを、二所の神窟に藏め給ひてよといふ。乃ち王子に東道せしめて、松ヶ岳の南の峯に鏡を藏め、東の谷に鏝を藏めたる上、法華經二部を書寫して兩穴に安置したり。夫れより指頭を以て空中に魔事品を寫し、心經秘鍵を講じて四域を結界したりしかば、是れより永へに奇異の跡を斷ちしといへり。今の所謂修善寺にして、其の記は眞濟親しく目睹するまゝを、筆を染めて作りたるなり。

桂谷山寺は既に泉隣大徳が修禪の道場としたり。今は錫を阪東に飛ばさんとて、泉隣に引き別れて行くほごに、相摸の國鎌倉の里近く來れり。只看れば海中に小島ありて、島の形決して凡ならず、夫の「楸樹影沈魚上木、月浮海上兔奔波」と興じたりし淡海の竹生島と、伯仲の間にあるべき趣き見ゆれば、浦人の肩に負はれて、淺き海の瀬を涉りて到り着きたり。島人の語る所に據れば、此の島は靈龜の背に負はれたる蓬萊の浮島にて、神女あり惡龍と交りて棲み、時に妖禍を作すことありとなり。

島山を踏えて彼方に下れば、豁然として大海脚下に開け、巖を嚙む怒濤は碎けて雪と散るあたり、漫に土左の室生戸を懐はれぬ。巖角を攀ちて岸の盡る處を見んとするに、忽ち身は一洞の靈窟の門に立ちたり。島人に問へば、是れぞ惡龍の窟にて、龍穴と稱へて人の近くものなしといふ。又一人は之れを御けていふ、此の窟こそ神女の在す處にして、蓬萊洞とは申すなれ。昔し役行者來りてこの島を開き給ひ、後年また泰澄法師、道智律師等巡錫の序、神女をこの窟に崇め給ひて、惡龍の荒びを鎮め給ひたりと語りて、島の名は浮島とも、又、江島とも申すよしをも告げ聞えぬ。阿闍梨は斯くと聞きて、吾のこゝに來ること、正しく宿縁の然らしむる所なるべし。さらば、永く國家と住民とに利福を與ふるやう、件の天女を此の窟内に勧請し得させんと言ひつゝ、深く窟の内に進みて、誰摩を焚き經を修して、殊勝に行ひ畢りしなり。

此行の主なる要務の、固より東國の古跡を順拜して、其の四衆をして密教に結縁せしめん爲めなるは、言ふまでもなき事なれども、一つには、去じ甲午の歲伊豫部博士が餘義なき頼みに應じて、勝道上人の爲に補陀落山の碑文を認めにし、下野國都賀

郡の名山を訪らひて、吾が耳より得たる文章と、目より得べき奇勝との幾千の差ひあるや、勝道上人が開き得たる補陀落山と、掖澄和上の草創せる比叡山と、今吾が入定の處としたる高野山と、孰れか遠く孰れか幽かなるやを、親しく目賭せんことも、主なる目途なりしことは、疑ふべからざる事なりとす。

爾るを以て、房總を経て常陸に入るや、直ちに路を野州に取りて、彼の山の麓なる四本龍寺に投じ、故上人の上足の弟子道珍等が款待を受けしは、七月廿六日にして、夫より龍生の淵に於て一七日の念誦を修したる上にて、更ためて山頂に登り來り、今しも神宮寺に安着したるなり。

寺の後に雲を摩して山ゆる二山は、是ぞ二荒の神の鎮ります陰陽兩體の峯なるべし。此の山神を祈りて、こゝに其の勝益を増すべく、この神宮寺を造り得たる道勝の功德は、境心に臨みて更に偉大を添へたるの感なからず。掖澄の比叡と道勝の補陀落とに對して、我が高野も決して譲るべき境なきや、これを三山三寺とすれば、果していつれの山が最も山修の禪居に適すべし。之れを後代に徵するも、亦趣味なき案ならじ

なご思へば、神旺んに興高まりて、勃々たる雄心の自から禁じ難きものありき。
 次の日は舟を湖上に浮べて先づ南の岸に到りて、歌の濱より千手崎に向ひ、千光眼
 を禮拜して、こゝに「補陀落山發信壇門」の門額を揮毫し、更に往いて神宮寺の長位
 に當れる羅刹窟を見たり。

「この窟は山中一の魔窟にて候ふ」

道珍が足を停めて窟を指さすに、阿闍梨は窟近く杖を進めて、

「毒龍山魅は、故上人によりて結界せられつと覺えしに、尙ほ魔所の存れりや」

「さん候ふ、此の窟には及ばざりしと覺しく、毎年春秋の兩度には、此の坑穴より
 大風吹き起りて、寺中國内を破壊して候へば、二荒の名はこれにも呼び例はされて候
 ふよ」

「それは極めて難儀なるべし、不敏ながら空乘、爲めに辟除の結界を修し進らすべし」
 「大阿闍梨の法力もて、結界を行ひ給はんには、寺中のみかは、下野一國の幸ひ之
 れに過ぎ候はず」

「さらば、今より直ちに修法致すべきぞ、急ぎ壇を建き申さるべし」

教長等は眞濟を請ふて共に寺に歸り、三寶の獻供、建壇の法器を、式の如く調へて、
 船をこの崎に回したれば、眞濟と幹海とは共に密壇を建きつゝ、直ちに讀經三昧に移
 りたり。此の時秋の癖として男體山の頂に一簇の黒雲の現はるゝと見る間に、湖上一
 面を罩め盡くして、汀をうつ波漸く高く、吹く風漸く荒れ増りつゝ、今にも天地限晦、
 霹靂震轟せんす愴景と變り果たり。道珍等は修法の席に列りながらも、故師に隨身し
 て攀登せし昔の状を想ひ出で、心自から悚然たらざるを得ざりしなり。

果せるかな、黒雲は窟の上に垂れかゝりぬ。風は枝を碎いて地に打ち下しぬ。波は
 巖に激して跳つて雲を洗ひぬ。靡靡の烟は高く煽ちて、火は腰消えなんどせり。眞
 濟が讀經の聲は、風に抗ふて愈高く響けり。かゝる中に在りても、阿闍梨は右手に
 五鈷杵を執り、左手に念珠を持ちて、泰然として法を修せる状、肉身のまゝにしてこ
 こに金銅の毗盧遮那佛に化したらんが如し。折しもあれ、一陣の魔風壇上に落し來た
 ると見るや、迅雷轟き驟雨襲ひて、天氣益々險惡を加へたるが、阿闍梨は更に緋む色

なく、咄嗟の間に作り得たる結界啓白の文を捧讀し、伏て乞ふ一切の冥靈晝夜擁護して、此の願を果しめ給へ、敬つて白すと讀み訖る時、何處の霄に雲破れけん、日光照々として窟の裡を輝かし、雨霽れ、風歇み、雷鎮つて、天は宛然縹の帷を張りたる如く、水また藍を浴きて満したる如く、濕れたる樹々をわたる風は、心の底をも清めつべくぞ思はれける。

現象この奇瑞を見て、道珍等は、大阿闍梨の行法の神變不思議に驚歎せり。只願其の恩を謝しまつるを、空舞は笑ひながら制しつ、

「この魔穴の悪鬼神は、結界の外へ出て、後へは日光菩薩を勸請したれば、もはや魔風の害は跡を絶つべし」

「唯今の感應を拜し奉つりし上は、何をか疑ひ申すべき。是れにて山中一の惡所もなく、二荒の山は補陀落伽山となり候よ」

「されば、補陀落伽の文字は補陀落伽の聖地に思ひ寄せて認めつれども、二荒の音のニクソウをそのまゝに、今より日光山と稱はんはいかに」

「二は佳名にこそ候へ、菩薩永く跡を垂れ給ひて、愈々山の靈をや増しなん」
道珍等はこの日光の佳名に隨喜して、二荒の神をも二荒明神と稱へ、山の名は長身に曇りなき日光として傳へられたり。

阿闍梨は尚ほも勝景を看廻りながらも、道珍等に物語りぬ。

「仁等の師勝道上人には、吾顔を向けたることなかりしも、國司と頃年の故ありしを以て、便ち碑文を請はるゝまゝに、管輪の拙さを恥つと雖も、背命の辭なきに依つて、粗ぼ之れを注ぎき。頂の景を叙するに「悦惚惚として夢に似たり寤るに似たり、楮に乗るに因らずして忽ちに雲淡に入り、妙藥を嘗めずして神窟を見ることを得たり。一びは喜び、一びは悲んで心魂持ち難し。山之狀たらく、東西は龍の臥せるが如くにして、彌望するに極りなし、南北は虎の踞るが如くにして、棲息するに興あり、妙高を指して以て儻と爲し、鐵輪を引いて而て帶と作せり、衛岱の猶ほ卑きことを笑ひ、崑香の又劣れることを晒ける」としたるは、敢て私に形容したるにあらねど、稍や實に過ずると氣遣はれしが、今既に見聞する所、靈勝誠砌、比類あるべしとも思

はれず、唯だ益文の拙きを取たり」

道珍等も恩を謝していへり。

「故の師も申して候ひき。」四面の高岑影を水中に倒にす、百種の異莊木石自から在り、銀雪地に敷き金華枝に發く、池鏡私なし、萬色誰か逃れん、山水相映す、乍ちに見て勝を絶つ、騰つ、行めども未だ他かず、風雪人を趁ふ」とし給ひしは、親く其境に在して寫し出されしが如く、阿闍梨は神通力にて在するよと、常に道珍等に誨へ給ひき」

「勝道未だ「華藏を心海に觀じ、實相を眉山に念する」の法徳を具へねども、「池中の圓月を見ては、普賢の鏡智を知り、空裡の惠日を仰いで、遍智の我に覺る」は、これ居る處の氣に感するなり。」蘊羅寒を遮り陰葉暑を避け、茶を喫ひ水を喫つて樂み中に在り、乍ちにイリ乍ちに干きて塵外に出づ」るは、是れ法師の本分なり。努々この文を身に體して片時も忘るべからずと白されて候ひき」

教曼も亦た故の師の遺徳を説くなりき。他の二人も碑文を口吟みては、同じく故上人を語るなりき。

人を語るなりき。

山上を極め、湖畔を極め、靈地にして堂を備へざる處には、寺院を起しなごして、八月の下旬四本龍寺に歸り來り、般若理趣三昧、加持如意法を道珍に授けてのち、

「吾此の勝形を觀んで久住の思ひありと雖も、皇家の御修法に暇なければ、是より華洛に歸りなん。仁等一心に道師の跡を繼ぎ、盡未來際過失せしむること勿れ」

此の嚴戒を後に留めて、日光山を立ち出でしが、中山道には頼らずして、山越に奥の會津郡に出で、こゝにて徳一菩薩と對面し、これが爲に惠日寺を興して、更に雪早き越路を踏みながら、北陸道を平安京に歸り着きしは、歳の十二月盡なんとする頃なり。

高雄山寺に歸りて見れば、十月廿六日を以て、皇帝親しく宸翰を染め給ひ、傳燈大法師の位記を賜はり、更めて内供奉十禪師に任せられ、勅して東山の麓野寺に住せしめられたり。時に歳四十七なりき。

第三十 照闇の光

明れば弘仁十二年四月、讃岐國高濃の池の築池使刑部少丞路真人濱繼より、表を上つて請ひ申す所ありき。そは、傳燈大律師位空兼は、部下多度郡の人にて、行ひ離日より高く、聲彌天に冠たれば、山中に坐禪して鳥巢ひ獸狎れ、海外に求法して虚く往て實て歸りぬ。茲に因て道俗風を飲び、民庶景を望み、居れば則ち生徒市を成し、出れば則ち追従ふもの雲の如し。今久しく舊土を離れて常に京都に住み、百姓の懇慕すること實に父母の如し。若し師の來ると聞かば、部内の人衆履の倒にして來り迎へざるは莫けむ。伏て別當に宛て其の事を成さしめ給へといふにありき。

時に大法師は、自ら指揮して智泉をして尊像を圖書せしめつゝありしなり。從來の佛像を見るに、諸尊の形状區々にして、釋迦如來は阿彌陀如來と相混じ、藥師如來は大日如來と分別する所なく、現に凝滯が靈木を以て等身の佛體を彫り奉つり、之れを内陣に安置せんとして、三體毎に讀經して御名を稱奉つり、其の點頭せ給ふを見て、

そは藥師如來、こは阿彌陀佛と別ち奉つりし程なれば、一見して其の何佛に在ますかを判するは、最も至難の業なりしなり。空兼は密教の儀軌に由つて、嚴密に之れを正さんとするの志ありしもの、廣宣流布に急にして未だ指を染るに至らざりしが、今度少しく閑を得たれば、智泉に命じて新たに諸尊の威儀を圖書せしめ、相好、態度より印契、道具、或は寶冠、法衣に至るまで、經に準じて夫々に殊別し、一目にして何の如來、何の菩薩たることを、見別け奉つるに至らしめんため、此の大誓願をば發じたるなり。

朝廷にても密々其の事を知し召されしかば、別に高雄三綱に御諮問までもなく、件

の和尚他の隙あるに依て、遣はすべからずと仰せ渡されける。然るに國司重ねて解狀を申し請ひければ、先づ大法師に諮ねばやとて、讃岐國司が上表の旨を仰せ渡されぬ。

斯くと承まはるや、大法師は自ら進んで其の任に當らんことを請ひ申したり。已に去年より勤めて修築を加ふるに、池大にして課役の民少ければ、築成の期いつを終り

とも知れざる事を聞きては、空葉が意氣に於て、賦して止むことを許さざるなり。況んや其の池は父母の國の千町田の生命にして、而も故郷の隣郡にあるをや。また空葉は此の池の由来をも悉く知り。池は三十六谷の溪水を注いで、宛然に汪洋たる湖の如く、灌ぐ處の田萬許町に及ぶを以て、眞野の郷の池なるを、萬農の池とは稱ひ倣せり。歌に十千の池と詠めるも、同じく萬の意なり。此池一たび決する時は、三郡の耕池は積となるべく、堤を築くは病る人に藥を投するよりも急なるべし。殊に那珂一郡は、晴天五日に經れば水溢の潤ひなく、霖雨二日に及べば洪水の難ある地なり。二年にして尙未だ堤の築かれざらんには、民の憂ひ幾干なるべき。よし、さらば、進んで此の職を奉すべしとて、法衣を纏げて曠然とし起ちたるなりき。

特に空葉をして進んで此の任に當らしめたるには、尙ほ他にも已み難き事情ありしなり。そは比叡山の寢澄法師、山門に戒壇を建き、圓頓一乘戒を授けんことを上表したるに、平城七大寺にては奮つて之に反抗し、寢澄をして遂に顯戒論を著すに至らしめしが、双互の法論熾烈を極め、互ひに火華を散して相争ふこと、空葉が東國巡禮の

頃より發りて、今尙ほ治らざれば、空葉は之れが洞中に捲込まるゝことを憂ひて、此の囑請を機として、避けんとするの念慮も、亦た之れなきにあらざりしなり。

朝廷にても大法師の義心を嘉して、右大臣の宣を被つて、勅を奉はつて宜しく請に依らしむべきの符を下し、其の供養料は正税を宛て用ひ、路次の國々は食馬を宛て給ふべき旨をも、併せて承知せしめられたれば、濱繼等は歡喜して速かに入京し、恩を謝して大法師を迎へたるなり。

空葉は既に勅を奉まはりぬ。即ち吾が甥にして大安寺に於て得度せしめたる沙彌眞然を隨へ、童子四人を率ゐて彼の國に發向したりき。

實に濱繼等の計らひし如く、入唐求法の大知識として、勅賜傳燈大法師位の大徳として、國人の渴仰一方ならず、船の岸の着する頃より、早く其の慈顏を拜さばやとて、集ひ來る者雲の如く、野も山も人を以て滿さるゝばかりなれば、池の側らに壇場を建立し、愈修法を開始すれば、遠近の農民等、孰れも望んで築堤の課役に就き、今まで屢成らんとしては、人の少き爲めに破られたる箇所も、見る間に高く土を盛られ

て、風雨も爲めに破壊する力を失ふに至れり。殊に日々數萬の民衆の堤上を往來する事とて、新に盛られたる土も固く踏みしめられ、周圍遙かに遠くして、幾里にかわたれる堤も、高きこと丘の如くに築き成されて、今は萬代經ともこの堤ばかりは崩れじとこそ見えたりけれ。

公家にては大法師の徳を賞して、七月廿六日、勅して富壽神寶(弘仁九年所鑄新錢)二萬錢を賜ひたれば、是れを以て三寶を供養し、役民を慰め、隄上の植場は土の僧をして三箇年間祈禱を繼續し、甘雨を大地に泄えしめたりしかば、著水いつまでも絶ゆることなく、田畝に炎旱の愁ひなくして、農民長なへに豊稔の慶びに浴したりき。五年の後、大和監察使藤原三守、紀伊守末等の請ひに依つて、大和高市郡村井の益田池の碑文を製したるも、畢竟この功に感得らんとなりしなり。

九月に至つて京に歸りて見れば、智泉が圓像の功は既に畢れり。空兼も亦毫を染めて龍猛菩薩、龍智薩摩の影像を謹寫し、讀を敬書したる上、禱者青龍寺より請來したりし、善無畏、金剛智、一行、不空、惠果五祖の影を重修して、之れにも讚を題し、

この七祖の影讚と、智泉が圓する所の大悲胎藏曼陀羅、金剛界大曼陀羅、五大虚空藏、五忿怒尊、金剛薩埵、佛母明王、十大護天王、莫魯等天像等二十四鋪とも、九月七日を以て懸ろに供養し奉つり、又、四年前の十一日、空兼の高野に在りて冬籠りしたりし折、國人の右大臣と前後して薨じたる、故の中納言藤原葛麻呂のために、其の贈られたる紫綾の文服を以て地となし、金銀を彩となして、十七尊の曼陀羅一鋪三幅を圖し奉つり、別に大樂金剛不空三昧耶理趣經一卷を書寫して、香華を設けて供佛開演し、聊か知己の恩に酬ひ得たるを悦びたり。

翌年は平城の太上天皇の宣を被つて、曾て東大寺に營みたる南院をば、密教敷揚の灌頂道場としたるに、俄かに上皇の御幸ありて、灌頂を受けさせられんとすの宣旨なりき。我が朝にてこそ天皇灌頂の例しなけれ。大唐にては屢行はれたる事ありて、現に吾が師惠果大阿闍梨の如きは、三代灌頂の國師たりしかば、空兼も謹んで宣を奉じ、太上天皇並に廢太子高岳親王に對して、佛性三昧耶戒灌頂を授け奉つりき。是れ則ち、我が朝に於ける帝王密灌の始めなれば、其の作法嚴かにして、内外の

儀式最も愚愼なり。

太上皇の式に准へて壇に臨ませ給ふや、大法師は進んで諸尊を禮拜し、
「大同元年を以て曼荼羅並に經等を献じ奉つりつ、爾しより已還、愚忠感なくして
忽ちに一十七年を経たり。天人の欲に従ひ、聖人の心を監む、因縁感應の故に、今日
龍顏に對し奉りて、愚誠を遂ることを得たり。一びは喜び一びは懼れて、心中厩くこ
ころなし」

灌頂文を捧讀してこゝに至れば、聲滿堂に澄みわたたりて、人は皆な肅然として襟
を正しぬ。

大法師は更に嚴かに聲を高めて、

「喜ひなる哉今日の四衆、幸ひなる哉此夕の大小、聖父聖子に値ひ奉つりぬ。佛戒
を受持して、頓に佛位に入れ」

凜然として文を結ばば、四衆大小悉く頭を低げて、一心に陀羅尼を誦するなりき。
就中、高丘親王は親しく大法師の威儀の、宛然に菩薩の如く仰がるゝに、深くも感

じ思し召し、灌頂の事果てのち、切に請ふて徒弟の員に加はり給ひ、得度の後は眞
如親王と號して、常に隨身修行し、翌年正月河内の龍泉寺を再興の時、大法師の身に
金色の立つを覽られしかば、感するまゝを詠じて、之れを大法師に献せられたり。

賀久波賀利多良摩遠志禮留岐美奈禮婆但他莫多摩天仁奈利乃保利計理

大法師はうち誦して莞爾と笑み、

伊布奈良久奈落乃曾古仁於智努禮婆利毛毗沙毛弊多天也波須留

と返したりとなん。

四月十八日、勅に應じて兩部神道の旨を、紫宸殿上に談じたりき。斯の道は佛法渡
來の始めより其の萌ありて、上宮太子已に和合り説を立て給ひしが、行基菩薩出るに
及びて、神佛は是れ本地垂迹に過す、彼に在つて最上の神とする摩訶毗盧遮那（大日
如來）は、我朝に於て天照皇太神なり、是れやがて三世世界唯一の神にして、六合に
照臨在ますものたり。其他の神は皆な本佛の垂迹にして、唯だ我にして神と稱ひ、彼
にして佛といふに過すとし、即ち盧遮那佛を造りて東大寺を興すに至りしは、聖武天

皇の此説を信じ給ひて、之れを拜するは直ちに伊勢を拜するなりと思召されればなり。されば、宇佐八幡は親しく八幡大菩薩と神託ありて、兼澄に憑り、空兼に寄り、佛法を以て神威を高うせんとはし給へり。兼澄もまた大比江を開くに方りて、山神を祀りて日吉山王大権現とし、直ちに之れを一乗止観の聖地の地主の神とは崇めたり。空兼もまた兩部一體を唱へて、高野を創るに際しても、先づ四社明神を勧請して山の鎮守とし、神佛兩部の不即不離なることを、事實の上に明らかに認めたるなり。是日殿上の談義もこの説を立證するために、兩部神道の二圖を掲げ、密教傳來の義によつて、三教の帷薄を去り、室女の紅粉を洗ひて、密教の密を示したるに過ぎりしが、天皇御威斜めならず、兩部神道の號を賜はりたるなり。

十四年正月十九日には、藏人藤原良房を勅使として、東寺を永く大法師位空兼に賜うて、眞言の道場たらしめ給ひぬ。空兼は此の勅書を拜して、手の舞ひ足の踏む所を知らぬまでに歡喜しぬ。東寺は桓武天皇の都をこゝに徙し給ふに方りて、皇城鎮護の爲めに建てさせ給ひし道場なれば、其の靈境たること言ふまでもなし。こゝを賜は

りたる御慮の程を拜察し奉つれば、空兼が靜かなる心にも、斷えぬ歡びの風は發りしならんかし。

高野山金剛峰寺は、金堂大塔の造營こそ成りたれ、尙ほ秘密道場とするには、總て具備らざる所ありき。高雄山寺は山深く増狹くして、教徒を養ふには便宜悪かりき。殊に大唐講來の像圖、道具、經律論疏を收藏するに適當の地なきを憂ひたる處なれば、此の東寺を賜りたるを、唐の青龍寺に於けるものとして無限の歡びを抱きたるなり。乃ち寶庫を築いて之れを密藏し、異類の狼藉を禁じて、鎮護國家の場としたりしかば、空兼をして別當大阿闍梨たらしむると同時に、教王護國之寺の勅額をさへ賜るに至れり。

四月十六日の事なりき。天皇は禁裡を遊れさせ給ひて、冷泉院に徙御し給へり。皇太子大伴親王の驚きて御後を慕はせ給ふをば、正殿に居る御讓位の宣旨ありしかば、太子は已むなく宮に還御なりて、こゝに踐祚の大詔を發し給ひたるなり。かくして上皇は空兼大法師を囑請し給ひ、御心寛に三密の法門を聽し召され、金剛界大曼荼羅に

對して、智水の灌頂を受けさせ給へり。是日、橋皇太后を始め奉つり、右大臣藤原冬嗣、右近衛大將良岑安世等、孰れも灌頂の壇に入つて、三昧耶の戒を受け、永く師資の禮を執る事とぞなりぬる。

嗚呼、顯戒論を著はし、法鼓を鳴らして平城七佛寺を威壓したりし叡山の叢澄大法師は、未だ圓頓戒の勅允を得ざるに、去年六月四日春秋五十六にして圓寂しぬ。天皇輓詩を賜り、圓戒を允され、延曆寺の寺額を賜ひて、天台の法燈は輝きしも、大権者は既に亡し。勅撰、護命は既に老いぬ。今や空乘大法師は、教界唯一の大光明と
はなりしなり。

今佛の眼を以て之れを觀れば、佛と衆生と
同じく解脱の床に住して、此もなく彼もな
く無二平等なり。………卍字發

第卅一 惠みの雨

イ子神泉觀物候

心神恍惚不能歸

高臺神構非人力

池鏡弘澄合日暉

鶴響聞天馴御苑

鶴翅且戩幾將飛

游魚戲藻數吞鉤

鹿鳴深草露霑衣

一翔一住感君德

秋月秋風空入扉

銜草際梁何不在

踏々率舞在玄機

こは勅を被つて秋の夕にこの乾臨閣に遊び、賦し奉つりし一篇なり。今また勅を奉まはつて、春の朝に同じ神泉苑の汀に立ちし空舞は、觀來る物候の變化に驚かざるを得ざりしなり。神構の高臺は今も猶は輪奐美しく、泓澄たる池鏡は依然として日暉を浮ぶれども、鶴は何れの天にか去りし、御苑には苔枯れたり。游魚は何れの淵にか潜みし、汀渚には鉤も無し。雲深く藏まりて天の色焦げるが如く、烈日陰影なく

春の光り夏よりも酷なり。名君明德を垂れ給ひ、賢相善政を施す堯舜の世に、いかにしてか斯く天の殃災を下して、辜なき黎民を惱さんとする。草木國土是れ皆な我が後の有ならぬはなきに。いでや我が此の肉身を犠牲として、心神の續かん限り、法力のあらん限り、諸天神を驚かして、この殃災を攘はすやば已むべきと、池頭に壇を建て、端然として跣坐したりき。

嵯峨太上皇に灌頂を授け奉つりてのち、神託に寄つて藤の杜の山上に稻荷の社を勸請し、之れを東寺の總鎮守として、直ちに高野山に登りしに、七月に至りて嵯峨太上皇の召させらるゝに任せ、山を下りて大内に入り、暫らく中務省に寓して御修法を勸行したりき。今上天皇には、是より數々太上皇の召させらるべきに、彼の山との往復に休息の寺なきは不便なるべしとの叙慮を以て、大和國高市郡飛鳥川原なる弘福寺を賜り、永く宿處には充て給へり。空乘は勅命を畏みて敢て辭し奉つらず、中務省に在ること一月餘りにして、一び出て大和の當麻寺に詣で、還りて高野山寺に居住し、東寺に五十口の定額僧を置きて、三藏を學習せしめ、鎮護國家の法を修すべき勅

旨を拜したるなりき。

天長元年(正月五日改元)は、今上天皇の初て朝賀を受けさせ給ふ嘉年なれば、政刑ともに仁恕を基として、深く軫念在らせられしに、いかなる禍の神の業にやありけん、正月の頃より雨雪稀にして、二月ともなりては、川々の流れも細く、井の水も涸れ初めて、花を開き芽を發くべき草木の、冬枯のまゝに枯死するも少からず。照り續きたる日は紅くして燃るが如く、圃の作物も萎へて枯らむのみなれば、野には雲雀の聲もなく、市には青き蔬菜もなく、人もろともに早に焼かれて果なんかと思はれたり。されば、諸寺諸山に命じて霧の法を修めしめられしかども、唯だ驗の雲の現はるるに過ずして、遂に雨の潤ひを得るに至らざりしかば、皇帝親しく宸翰を下して、空兼大法師をして神泉苑の靈池に望み、請雨の法を修めて、天下萬民の憂ひを除かしめられたるなり。

時は彌生中洗にして、常の春ならましかば、乾園關の御苑、神の泉に香しき落英を漂はして、閑圃の夢温かなる頃なるに、肅殺として晩秋の野を望むが如く、唯だこの

靈池の泉のみは、漚瀝の渚を洗ふさま、無熱達池の奇瑞を湛ゆるなり。
 大法師は水色の袈裟法衣に水晶の念珠を持ち、手に水印を結んで壇上に在り。實慧、真濟、真雅、真紹、堅惠、真曉、真然の七高弟を始め、沙彌、童子に至るまで、孰れも水色の法服を装ひ、水色の幔幕打つて、池に面して法座を構へ、心を一つにし聲を同うして、請雨經を讀誦し、請雨の法を行ふに、其の作法神秘にして青龍相承の密咒なれば、殊勝なること言はん方なし。

心神を凝らし精力を竭して、晝夜退轉せず祈請すと雖も、三日と過ぎ四日と暮れてはや五日となり、六日を迎ふれども、天上一片の霧雲も見えず、晝は赤日爛々として觸る處の物悉く燦かんとし、夜は星斗欄干として萎凋凋落の慘況を指し晒ふかど疑はる。日限は唯だ一日を剩せるのみ。明日ははや結願なり。かくて一滴の雨だも降らざれば、大法師はいかにし給ふらんと、徒弟等は安き心もなかりしが、何を信じ何を頼みてか、大法師は心馳ます目瞬かす、倦じもやらで懇念に祈請するなりき。

七日目の夜は銀沙の如き星光に代りて、紅團々の朝暎に明け放れたり。實に是れ修

法結願の第一刻なり。油の面に映する日の影は、朝の戦ぎに細波を起して、長く金蛇を走らすを見る。衆僧は既に望みを失ひて、今はこのまゝ日の没するを待つのみなり。巳の刻にやありけん、大法師の手には水瓶を捧げられたり。默念多時にして其の水は池の面に濺がれたり。同時に實慧大徳の口より大聲の眞言は響きぬ。他の六法師も念珠を揉みて池中に吃度服を注ぎぬ。大法師の前なる栴香爐よりは、一道の香煙緩くたち騰りしが、徐かに實慧大徳を顧みて、莞爾と笑みにき。

「悉地成就！」

實慧は思はず大法師を伏拜みき。

「龍王も眞言の奥旨を敬ひ給ひしにこそ」

「現形の金色の蛇こそ、無熱達池より此の神泉に徙り栖める龍王にして、名を善如とは申すぞかし」

「長九尺もあらんかと思はる、蛇の頂に在りし、八寸餘りの金色の小蛇が、善如龍王にて在ますにや？」

真雅の間ひまつる後に就きて、濟、紹、曉、然、堅等も、恐るゝ其の出現の所以を問ひ参らするなり。

「應驗は間もなく顯はるべし。夫の龍王は慈しみ有つて人を害せず、請雨納受の瑞を示して、其形を現じたるなり。急ぎ人を走せて内裏に奏間に及ぶべし」

空兼はこの示現に由つて精力一倍加はりぬ。龍王に謁したるは唯だ七人の上足のみなりしも、耳に聴きたる大衆も信心肝に命じて、怠らず讀經したりき。

少時にして河内守和氣真繩、勅使として参向あり、御幣を献げ色物を供へて、龍王を崇め祭られたり。

時午に停るや、愛宕の嶺に薄雲のかゝるを見る間に、油然として一天黒雲に覆はれ、池の底まで墨を流せる如くなりし時、電光閃めき、雷鳴起り、忽ち沛然として霖雨を降らし來りしかば、池水滿ち踊つて大壇の上に注ぎ、上は殿上より下四元に至るまで天に歡び地に喜びて、魔賀の聲都鄙に瀾れり。

此の甘雨三日に及びて、普く水の愁ひを絶ち、山野漸く蒼々草木花を開きしかば、

天皇其の法徳を嘉賞せさせ給ひ、月の十七日を以て、律師を超えて少僧都に任せられたり。されども、空兼は山叢を宅とし禪賦を心として、聊かも僧綱に意なければ、再三抗表して辭し奉つりしも、遂に許されざるのみならず、却つて東寺別當職に補せられ、高雄山寺に二十一口の定額僧をさへ置かるゝの殊遇に浴することを得たりしなり。

是歲七月、平城の太上天皇升遐ましましぬ。空兼少僧都は真如法親王を補けて、佛會の營みに勤仕したるのち、真濟に高雄山寺を託し、東寺の法務を實慧に攝理せしめ、自ら高野山に到りて、靜かに修禪してありしに、天長二年二月に及びて、智泉法師は自ら創めし東南院に在つて、重き病に臥したりけり。

僧都の爲には肉身の甥、法身の子なるのみならず、幼少より隨身したるに、其智其才兼に勝れ、學を好み行ひを慎みて、空兼が爲には孔子の顔回たり。秘印を習ふて一字一書を誤まらず、衆經を呑んで一誦一念に飽ざるは、僧都の爲に釋尊の阿難たり。此愛は實弟の真雅に超え、此山を譲らん者智泉の外に其人なしと思ひつる程なれば、

吾が身に病ひあるよりも悲みて、直ちに其の枕頭に訪ひぬ。

子を視ること母に如かざりけん、短命を悲みて自ら玉の緒を締めたる吾が姉の、終焉の語を想ひ起さるゝまで、智泉の露命は消えなんとするなりき。薬石も救ひ難く、加持も用を爲さざれば、額を撫で、思はずも涙を禁めあへざりし。

「いかに病ひは苦しきや。肉身は金剛ならねば、生死は奈何ともするによしなし。但だ生死の大事と申すは、覺智を離れて覺智の中に在ることをぞかし」

智泉は故らに美しくしき笑顔を示して、

「弟子春秋三十七、法臘二十を經て、法に盡すことなけれども、師命に順つて普賢菩薩を禮し、今の東宮を祝ひ奉つりしを、心の誇りとは致して候へ。母上へ御物語も候へば、今この御山に骨を埋めんこと、喜びの中の喜びに候ふ」

「汝は都率内院に宿縁あれば、彼の所に詣らんと念すべし。今はまた何をか言はん。自性の本源に安住して、吾の如く正意に到りなせ」

手を握つて不覺の涙に咽へば、智泉もはららと其の手に涙を注ぎしが、一七日を

經て手に印を結び、二月十四日といふに光明のうちに成佛しぬ。僧都は天を仰いで、

「噫！智泉は實慧真雅にも替り難し、廣智にして廣行なりき」

常にもあらで悲歎の聲を漏らし、には、視るも聴くも涙を吞み袂を擗らぬはなかりけり。

智泉の冥福を修めたる後、僧都は真雅に密印を授くるため、山を下つて東寺に就きたるが、講堂の建立、仁王の修法に其歳を送りて、明年三年正月、高野山下曼陀羅院の政所に於て、仁王會を始修せるまゝ、遂に山に入らずして、再び東寺に歸住する事とはなれりき。

法務偶小閑を得れば、夫の灌頂の法縁ある左大臣藤原冬嗣が病ひを訪ねたり。冬嗣は泉殿に今を盛りの櫻を賞ながら、白衣のまゝにて左近衛大將良岑安世の公と、今昔の歌人の上など物語りて在りしが、大阿闍梨を見て恭しく上座に延きぬ。

「こは思ひも寄らぬ菩薩の來降かな、いかなれば輕々しくは渡らせ給ふよ」

「輕々しとは貧道よりも大臣が御上なるべし、疾病ある御身をかく端近く居る給ふ